平成 27 年度

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

ひきこもり当事者の
社会的自立に向けた居場所づくり

実施報告書

平成 28 年 3 月

特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会

はじめに

【ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくり事業にあたって】

特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
理事長　池田佳世

「KHJ 全国ひきこもり家族会連合会」（以下、『KHJ 家族会』）は、ひきこもりの家族会としては、唯一、全国組織として活動している家族会であり、昨年度（平成 26 年度）の WAM 事業「ひきこもり問題の社会的理解・支援促進」にて、全国 29 地域で講演会及び学習会を実施いたしました。

そこでわかったのは、ひきこもり長期高年齢化の背景に、家族の孤立化があり、支援機関につながっても、本人もなかなか出てくることができないため、支援が途絶えてしまうという状況でした。さらに、４０代以上を対象とした支援機関（地域資源）は非常に少なく、「外へ出たとしても、安心できる居場所がどこにも無ければひきこもっていた方がいい」という声も聞かれました。ひきこもり問題への理解が十分でない地域では、「外に出たくても出ていける場所がない」という声は深刻であると感じられました。

このように、つながる場所が無いから出てこられない当事者のために、一歩勇気を出して行ってみたいと思えるような「場」づくり、働いていないことを非難されることなく安心して居られる「場」づくりが、強く求められていると思います。

また、ひきこもり状態に陥る背景は多様で、十人十色です。ですから、その人に合わせた居場所が必要です。居場所を運営する側も、智恵をしぼっていかなくてはなりません。

そういった現状を踏まえて、本事業では、社会的自立に向けた居場所づくりを、全国の 17 の家族会（支部）と連携し実施いたしました。他の居場所や支援機関とノウハウを共有しながら、充実した居場所づくりに懸命に取り組んでまいりました。
また、ひきこもり家族会が無い地域においても、居場所の必要性と有効性についての講演を行い、全国への普及促進活動を進め、新たに 8 地域に家族会ができました。家族会は、家族にとって安心できる最初の居場所です。身近な地域における居場所づくり活動が、ひきこもり当事者の新たな一歩へのきっかけとなり、また、家族の安心につながったことと確信しています。

本報告書には、全国でおこなわれた居場所づくりの活動内容、成果と課題、今後の取り組みを記し、居場所活動効果の調査結果を掲載しております。
今後、各地の自治体、支援機関におきまして、「居場所づくり」の理解と普及促進のために、是非お役立ていただければ幸いです。

ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくり

実施報告書　目次

はじめに……1

「ひきこもり当事者の居場所」における現状と課題　……4

第一部　：　全国における居場所づくり普及促進活動

1．家族会発足のための活動報告　……5

長野・秋田・石垣島・沖縄・鹿児島・陸前高田・川崎・石巻・町田・奈良

2．講演会アンケート報告……19

第二部　：　各ブロックにおける居場所づくり活動

1．活動実績報告　……24

2．居場所の運営状況について～運営者アンケートより～……25

3．各ブロックの居場所づくり活動成果と実施報告……28

東北ブロック（青森）　……33

北陸ブロック（長岡、加賀、福井）……36

関東ブロック（東京、千葉）……43

東海ブロック（愛知、名古屋、三重、豊田、浜松）……50

近畿ブロック（兵庫、大阪）……63

中四国ブロック（広島、香川）……69

九州ブロック（福岡、沖縄）……74

第三部　：　アンケート報告

１. 居場所の利用者アンケート報告 ……81

２. 居場所づくり全体の課題と改善策 ……87

３. 今後の居場所づくりに求められるもの……95

第四部　：　居場所活動の効果測定報告～レジリエンス調査より～

１. ひきこもりの現状 ……102

２. レジリエンスとは……103

３. 居場所とは……105

調査１　：　レジリエンス・チェックリストの作成

調査２　：　ひきこもり経験とレジリエンスの関連

調査３　：　居場所への参加がレジリエンスに与える影響

おわりに　～家族会の未来・居場所づくりへの展望～　……118

事業委員一覧……120

資料……121

「ひきこもり当事者の居場所」における現状と課題

ひきこもり状態が長期高年齢化する背景に、住み慣れた地域にある支援機関では、年齢や制度の壁（40 代以上が利用できる支援機関が少ない、もしくは障害手帳を持参していないと利用ができない）などに阻まれ、既存の居場所において、当事者たちが十分に受け入れられていない現状がある。

また、特定の専門性に特化した相談窓口では、外には出られたものの、担当者の変更や、中間的な居場所が整備されていないために、支援が途絶しやすい現状も見られる。

当事者が社会参加に至る過程には、不安を抱えた当事者が、受け入れられ、安心でき、社会参加の足がかりにできる「居場所」が必要であるし有効である。居場所を通じた仲間との出会いや共同で何かをするという体験、他者からの承認を得る経験などをとおして、自立に向けた意欲と自信を醸成していくことができるからだ。

昨年の WAM 事業にて全国規模で実施された「ひきこもり問題」に関する講演会に参加した当事者からは、「何とか（自分の）居場所を確保したいと思ったから」という声や、「自分の住む地域で、自助グループなどが存在するのかどうか、まだ見つけられずにいる」といった声、支援者からも「年齢の高い方、40 歳以上等に対しての相談窓口が少ない。就労支援の場がない」といった声が挙がった。身近な地域で、年齢を問わず、つながることの可能な「居場所づくり」の必要性が叫ばれている。

全国にある KHJ 家族会においては、ひきこもり当事者のニーズに特化した居場所活動を実施し、実績を上げている部もある。平成 25 年度から当会で養成派遣を行っている「ひきこもりピサポーター」による訪問から、家族会の居場所につながり、入口から自立に向けた出口までの過程を、継続的に包括的にサポートしていくための取組みも始まっている。しかし、このような社会的自立に向けた活動はまだ端緒についたばかりであり、今後も当事者が参加しやすい居場所づくりと共に、包括的な支援体制を全国で推し進めていく必要がある。

●本事業の目的

このような現状と課題を踏まえ、本事業においては、全国各地で、居場所活動に実績のある支部と、これから居場所づくりを始めていく支部とが連携し、ノウハウを共有し合い、社会的自立に向けた居場所活動の充実を図った。また、居場所活動の効果測定として、居場所への参加がひきこもり当事者にどのような効果を与えているのかについて調査を行った。

併せて、昨年度の WAM 事業（全国での学習会事業）に続き、ひきこもり者の社会的理解と支援促進のために、当事者のニーズに応じた「居場所」の必要性と有効性について講演を行い、全国への普及促進活動を進めていくことを目的とした。

第一部 全国における居場所づくり普及促進活動

1．家族会発足のための活動報告

ひきこもり当事者が社会的自立の過程で必要な「居場所」の必要性について、社会的理解を促進するための講演会を開催した。また、居場所につながる入口として、家族の誰もが安心して集える居場所（拠点）となる「家族会」発足ための講演会を行った。

全国 10 か所で実施、8 か所で家族会が発足した。

＜実施日程と参加人数＞

開催日	開催地	実施内容	参加人数	アンケート回答数
2015 年 10 月 10 日（土）	長野県 松本市	長野県家族会発足講演会 ～居場所をつくって元気になる～	40 名	23 名
11 月 21 日（土）		長野県「らい鳥の会」学習会①	20 名	―
12 月 20 日（日）		長野県「らい鳥の会」学習会②	15 名	―
2015 年 10 月 13 日（火）	秋田県 秋田市	秋田県家族会発足講演会	39 名	34 名
11 月 10 日（火）		秋田県「ばっけの会」学習会①	33 名	―
12 月 1 日　（火）		秋田県「ばっけの会」学習会②	16 名	―
10 月 17 日（土）	石垣島	石垣島家族会発足講演会 （石垣島「ピパーチの会」発足）	42 名	21 名
10 月 18 日（日）	沖縄県	講演会シンポジウム（居場所づくり）	35 名	21 名
2015 年 11 月 14 日（土）	鹿児島	鹿児島県家族会発足講演会 ～ひきこもりを元気にする居場所づくり～	39 名	11 名
12 月 20 日（日）		鹿児島県「楠の会」学習会①	6 名	―
2016 年 1 月 16 日（土）		鹿児島県「楠の会」学習会②	8 名	―
2015 年 12 月 5 日（土）	岩手県 陸前高田市	岩手県「ひきこもりの居場所づくりを考える」講演会	26 名	4 名
2016 年 1 月 16 日（土）	神奈川県川崎市	川崎市家族会発足講演会 ～ひきこもりから「居場所」へ～	10 名	7 名
2 月 28 日（日）		川崎オレンジの会「家族相談会」	15 名	―
2016 年 1 月 24 日（日）	宮城県 石巻市	宮城県石巻市家族会発足講演会 ～未来の居場所づくりを考える～	30 名	16 名
2 月 28 日（日）		石巻「まきっこ家族会」月例会	8 名	―
2016 年 1 月 30 日（土）	東京都 町田市	町田市家族会発足講演会 ～ひきこもりから「居場所」へ～	58 名	39 名
2016 年 2 月 7 日（日）	奈良県	奈良県家族会発足講演会 ～ひきこもりの居場所づくり～	30 名	13 名

長野県家族会発足講演会

開催日 タイトル	2015 年 10 月 10 日（日）13：30～16：30 長野県家族会発足講演会「ひきこもりからの回復」
実施 団体名	特定非営利活動法人　KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 本部
会場	松本勤労者福祉センター（第２会議室）
参加人数	40 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	新聞紙上及び、NetFAX にて松本市、長野市内の行政、支援関係機関に告知（30 件） 信濃毎日新聞に告知掲載。10 月４日掲載紙面にて広報。
内容	 **【前半　13：30～14：30】池上正樹氏** **「ひきこもりの現状～当事者が望む新たな社会との関係性」** １８年前からひきこもり問題を取材し、多くの当事者の思いを発信し、当事者活動をサポートしている池上正樹氏から、「ひきこもりの現状」が語られた。「ひきこもり」とは、社会から孤立した状態。外出できるかどうかは本質的ではない。外部(家族以外)との関わりが途絶えてしまう。 これ以上傷つけられたくない。他人に迷惑をかけたくない。自分を防御する手段　ひきこもらざるを得ない。意欲を失いあきらめの境地に至った人たちである。家族に隠されることで、孤立化が長期化してしまうことが、ひきこもり問題の本質であることを伝えた。 **【後半　14：45～16：00】** **池田佳世氏（KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表）** ひきこもりの回復に親の力が必要と、「親の学習会」を 25 年継続。回復の各段階について明し、「親は、子の快復段階を少しずつ上げていく」責任者であること、ひきこもりの回復に親が関わることの重要性について呼びかけた。エネルギーは、楽しいことを増えれば増し、辛いことをすれば減る、家庭を安心できる環境にしていくことの大切さを伝えた。 **【グループトーク・質問会　16：00～17：00】** ８人程度のグループに分かれ、自己紹介を行い、自分の抱える問題や悩みを分かち合った。また、家族会発足に当たり、今後の運営内容についての話し合いが持たれた。
決定事項	・長野県では初の家族会誕生。名前は「らい鳥の会」と決定した。 ・支援機関、行政機関、教育機関、多様な関係諸機関からの出席を得た。 ・次回の家族会の開催日が決定した。11 月 21 日　同会場。
アンケートからの感想	・何ヵ所も親として相談に行っていたが、本人は年令もあがってきていて、家族だけで抱えていたので家族会の立上げに嬉しく、参加して、学んでいきたいです。 ・具体的に困っていることを共有できる人たちの集まりでほっとしました。 ・ひきこもり大学について知ることができた。子供への対応の仕方を変えようと思った。 ・「ひきこもり大学」生きていたいと思うようになりたい学科→ここに希望が持てるようになった。 ・池田さんの講演の「親が変われば子も変わる」というお話が印象的でした。多様な社会問題が絡んでいますが、大切なのは親の本気からだと改めて感じます。

KHJ 長野県「らい鳥の会」学習会①②

①開催日 タイトル	2015 年 11 月 21 日（土）13：30～16：30 ひきこもり当事者・家族の体験発表「わが子の快復に向けた家族の体験発表」 （KHJ 山梨県桃の会）
実施 団体名	特定非営利活動法人　KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 本部
会場	松本勤労者福祉センター（第２会議室）
参加人数	約 20 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティア）
広報	NetFAX にて松本市、長野市内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（約 30 件）
実施内容	＜前半:山梨桃の会からの体験発表＞ ①「桃の会」代表から会発足後の一年を振り返り、会として取り組んできたことや、「出会い、つながり、共感する」がいかに大事であるか、会を後押しした「山梨日日新聞（扉の向こうに連載）」の協力について話された。 ②当事者の居場所づくり活動を一年間続けてられている「すみれ会」代表者のお話から、卓球、料理教室など、多彩に行事を取り入れながらの活動の様子が話された。 ③親の体験発表として、会に参加することによって子供との会話が少しずつ取り戻せつつあるという親の思いを話された。 ④元当事者の T さんの体験発表。過酷な労働により働けなくなり、家族にも理解が得られず、薬漬け状態になった彼を救ったのは、「家族がいつも自分を見守ってくれていた」という気づき、家族との絆を再確認できたことだった。会場からの質問に「「あと少し背中を押せば踏み出しそうなのですが、親はどうすればいいですか？」という質問に、「何もしなくていいです」ときっぱり言われた。 質問者の方は、迷いが吹っ切れた様子。苦しみ、悩み、絶望から今の自分を取り戻した T さんの確信にあふれた話だった。 ＜後半:グループトーク＞ 4つのグループに分かれてグループトークを行い、前半の話から感じた思い、気づきを共有した。
① 11 月 21 日 学習会 成果	参加された方々は、「出会い→つながり→共感する」ということを身をもって体験された。派手な打ち上げ花火のようではなく、地味でも地に深く根を張って、隣県同士、ともに成長し交流していく機会となった。次回の月例会は、親の学習会として 12 月 20 日に決まった。
②12 月 20 日 学習会 内容	2015 年 12 月 20 日（土） 日常会話と治療会話～快話と不快話～ 池田佳世氏（KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表） KHJ 代表の池田佳世氏が、日常生活で話す親子の会話について、快い気持ちで話が終わる「快話」と、嫌な気持ちで終わる「不快話」の違いについて説明した。子どもから「No」と言われたときに、親は落胆せずに、子どもの意思表示を喜べる姿勢が問われてくる。また親が子どもの会話から良いところを見つけるための会話術を２人一組になり、ロールプレイを行って実際に、快話を体験した。参加者が、普段の親子関係を見直す貴重なきっかけとなった。

秋田県家族会発足講演会
KHJ 秋田県「ばっけの会」学習会①②

開催日 タイトル	2015 年 10 月 13 日（火） 家族会発足講演会「ひきこもりの現状」「居場所をつくって元気にする親の対応」
実施団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	秋田アトリオンビル
参加人数	39 名（当事者及び家族、親族、行政関係者・支援者・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて秋田県内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（34 件） 秋田さきがけ新聞 10 月 6 日号にて事前告知記事掲載
実施内容	【前半　13：30～14：30】池上正樹氏 「ひきこもりの現状～当事者が望む新たな社会との関係性」 ひきこもりの現状についての説明と共に、ひきこもり経験者・当事者たちが、自ら居場所を作りながら活動している状況を伝えた。 【後半　14：45～16：00】池田佳世氏（KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表） 「居場所を作って元気にする親の対応」 家族会は「家族の居場所」である。会に参加して気持ちを楽にしたり、情報交換をする場であり、ひきこもりの場合は、まず親が動き始める。秋田県で「家族の家族会」をつくることで、親がまず元気になることが大切であると伝えた。また本人が元気になるためには、家庭を安心できる場、自由に動ける場にしていくこと、そのために必要な親のかかわりについて伝えた。「子どもの話をよく聞く」実践法として、子どもの言うことを頭ごなしに否定せずに「そうそう」で子どもの気持ちに近づいてみることを、次回の学習会の課題とした。
実施成果 決定事項	・秋田県で初の KHJ 家族会発足。名前はふきのとうを意味する「ばっけの会」と決定。 ・秋田市のバックアップを受け、行政機関からの積極的な協力を得た。 ・次回の家族会の開催日が決定した。11 月 10 日（火）秋田文化会館にて。
アンケートからの感想	・良かれと思ってかけていた声が、結構本人にはきつかったのだと、知らされました。 ・居場所をつくる（ピア）家族会をつくる。「公的な窓口が必ずしも相談口たりえない」「思考停止を抜け出さねば」です。 ・個々に抱えている問題が違うのでもう少し足を運んで学んでみたいと思います。 ・親も孤独です。進展がなく親も疲れてきているので悩みを共有して話しをできる場があるといいなと思い参加しました。
①11 月 10 日の学習会内容	テーマ〔子がひきこもって、親はどうすれば良いか〕　講師：池田佳世氏 １．親の気持ちの安定があって初めて子の本当の姿に直面できるようになる。 ２．繰り返し体験を語り他者の体験を聴くことで正しい知識を得ることができ、日常生活の中で体験しながら子どもへの理解につながる。 ３．親の価値観の転換が子の変化のターニングポイントとなる。子の伴走者として気持ちを維持していくには継続的な相互支援が必要。次回の学習会までにやっておくこととして「子どもの頼みごとには正確に応えて、子どもが頼まないことはしない」を実践する。
②12 月 1 日の学習会内容	テーマ〔ひきこもりの理解〕 １　ひきこもりの本質について本人の内面の状態を説明。最初に必要なのは安心感（「ゆるむ」「ゆるめる」）であり、本人の回復の段階は家族の理解と関わりから他者との関わりに移行していく過程を伝えた。また具体的な困りごとの場面（暴力、暴言、要求、強迫症状）への対応方法と、その症状の意味について学習。グループセッションを持った。

石垣島家族会発足講演会

開催日 タイトル	2015 年 10 月 17 日（土） 生活困窮者自立支援法と長期化（高齢化）したひきこもり問題を考える石垣市の集い
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	大濱信泉記念館
参加人数	42 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	・八重山新聞 10 月 15 日号にて一面トップ記事「引きこもり支援の形（上）」（事前告知記事）掲載 ・八重山新聞 10 月 16 日号にて一面トップ記事「引きこもり支援の形（下）」（事前告知記事）掲載
実施内容	＜基調講演　池田佳世氏（KHJ 代表）＞ ひきこもりの回復に必要な親のかかわりについて講演した。 「ひきこもりは一人で立ち上がれない。親が手を貸さないとなかなか難しい。『今は反抗期なんだ』と思って、子の理解者として接してほしいと伝えた。 ＜シンポジウム：コーディネーター　山田孝明氏（石垣オレンジの会代表）＞ 「ひきこもりはマイナスではないというメッセージこそが出発点」と述べ、ひきこもりが家族にいることを隠してしまう風潮、相談に行きたくても行けない、手を上げたくても上げられない状態を地域ぐるみで真剣に考えることの必要性を示した。 ＜長山家康氏（石垣市議会議員）＞ 石垣市子ども若者支援に係るひきこもり等の実態に関するアンケート結果からの分析報告があった。不登校のその後について調べたところ､約 700 名がひきこもり状態であるという結果を得て、不登校の段階や 10 代での早期支援が非常に重要であると訴えた。 ＜松本大進氏（沖縄県子ども若者みらい相談ＳＯＲＡＥ　臨床心理士）＞ ひきこもりが長期化し、家族が高年齢化している中で求められる支援として、「ひきこもり経験のある当事者やその親が、ピアサポーターとして支援する制度がある。同じ境遇の仲間と出会うことで安心して自分を出すことができ、心理的に変わる部分も多い」と述べた。 ＜町田弘樹氏（グローバルハーツ代表）＞ ひきこもりの経験者同士だからこそわかる同じ悩みを共有できる場､家族も本人も気を使わず安心して情報交換できる集まりを提供したいと「グローバルハーツ」を結成。「ひきこもりになった理由が必ずある。どんな方法がその人にとって良いのかを関係機関が一緒になって考えることは必要」と強調した。
実施成果 決定事項	家族会結成の呼びかけがあり、KHJ 石垣島「ピパーチの会」が発足した。 翌日の八重山毎日新聞に『親が支援の手を』と題し、講演会の模様が新聞に掲載された。
アンケートからの感想	＜石垣島の支援情報を要望する声＞ ・市内で活動している支援者を知りたい。活動事例を知りたい。自分の町の実態、当事者の声、経験を知りたいと思って参加した。 ・家庭内で困っていてもどこにどういう支援の場があるのかわからない方々が多いと感じる。 石垣では親はどこに相談に行けばよいのか具体的に知りたい。

沖縄県講演会シンポジウム

開催日 タイトル	2015 年 10 月 17 日（土） 講演会シンポジウム「ひきこもりを元気にする居場所づくり」
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	沖縄県総合福祉センター１F
参加人数	35 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて沖縄県内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（38 件） 沖縄タイムス（10 月 19 日）にシンポジウムの模様が掲載された。
実施内容	 ＜講演「当事者の居場所づくりの現状について」ジャーナリスト池上正樹氏＞ 当事者会サポーターとして、全国の当事者の居場所づくり活動を取材し応援している池上氏から、ひきこもり当事者の現状が話された。ひきこもり本人たちの思いを安心して出せる場としての居場所が、経験者たちの手で各地に作られている様子を伝えた。「ひきこもり本人が自分の感情を言葉にできる場所が大事」と、当事者が主体的に自分を出せる「居場所づくり」の必要性を訴えた。 ＜シンポジウム「ひきこもりを元気にする居場所づくり」＞ シンポジスト：近藤正隆氏（KHJ 理事）OTS メンバー（平良さん、與那覇さん、仲田さん） KHJ 家族会理事で NPO 法人ウヤギー沖縄理事長の近藤氏と、ひきこもり経験者、支援者らで作る OTS メンバーから、居場所づくりへの意見が述べられた。 近藤正隆さんは、「当事者は周囲が思う以上に慎重になる。安心できる場所があると一歩進むきっかけになる」と語った。また、OTS メンバー（支援者）の仲田さんは、「本人が、ここなら大丈夫と思える居場所のイメージを作ること（魅力的で安心のブランド力をつける）が鍵になってくるかと思う。その結果として、本人が居場所に出てくるモチベーションを高めることにつながっていく」と伝えた。
アンケートからの感想	＜支援の入口の問題＞ ・時間がかかる。ひきこもりの原因が多岐に渡り、支援先をどこにしたらよいか。 また、その確保をどうするか課題だと思う。 ・状態が様々で、家族など周囲の方からの相談だけでは本人が見えにくい。 ・ご家族からの相談で、本人が第三者が介入を拒否している場合が多く、本人とどういうやり方で関係を築いていけばよいかわからない。 ・どこにつなぐのが最適なのか？ ・高齢（50 代・60 代）のひきこもりの方についての支援方法について。 ・長くひきこもっている子のことで親御さんからの相談もありますが、なかなか相談支援機関につながることができない方も多くいらっしゃいます。気長に時間をかけ支援していけたらと思いまいた。 ＜本人の意思確認の仕方＞ ・本人の意思を十分に確認できないまま、家族・地域からの声を受けての関わりが多い。 どのように本人の声を引き出せるか、尊重できるか、社会資源を生み出せるか。

鹿児島県家族会発足講演会
KHJ 鹿児島県「楠の会」学習会①②

開催日 タイトル	2015 年 11 月 14 日（土） 家族会発足講演会「ひきこもりを元気にする居場所づくり」
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	鹿児島中央公民館
参加人数	39 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて鹿児島県内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（22 件） 南日本新聞（11 月 8 日、11 月 11 日号）にて事前告知記事掲載
実施内容	池田佳世氏（KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表） 「居場所をつくって元気にする親の対応」 親はわが子の責任者として、子を快復させるために、親は子の快復段階を少しずつ上げていこうと伝えた。また、子どもの態度に意味があることを伝え、具体例を上げ示した。 例） ・子供の話を無条件に肯定的に聴こう →世間の目を気にしない ・トラブルには意味がある。 →エネルギーが出てきたということ。 ・無言の子への働きかけ →親のひとりごとから。 ・自立とは？ →他人に甘えられること ・我慢が見せかけの回復を生む →いい子をやめる。 ・買い物・お金の使い方。 →お小遣いをあげ、本人の生きる欲求を上げる。
アンケートからの感想	＜家族の心配について＞ ・家族以外と会話が出来る様になってほしい ・親が死んでしまった後のことが心配である。 ・まったく親子の会話がなく、会話の仕方が分からない。
①12 月 20 日の学習会内容	「ひきこもりを元気にする居場所づくり」 ～まずは月に一度の居場所から　無理なく、楽しく、孤立なく～ をテーマに、不登校支援20年の近藤正隆氏が学習会を行った。 集まった家族から出された現在の困り事に、どのように対応していったらいいか、近藤氏のアドバイスのもと、グループトーク形式で話し合われた。
②1 月 16 日の学習会内容	「ひきこもる本人が語る　ひきこもりのこといろいろ」 というテーマで、ひきこもり経験者で支援者の聞風坊さんを講師に迎え、ひきこもり本人の目線から、ひきこもり理解と家族の対応についての学習会を行った。１０年の当事者活動から、ひきこもり本人だけの自助グループ活動、親の会や地域支援者との連携などを通して分かってきたことを伝えた。また、多くの家族が疑問に思う点を挙げ、解説を行った。 例）Q：なぜ通院・支援を利用しないのか？　Q：納得すれば行動するか？ 家族の応対　Q:このまま待てばいいのか？　Q:まず何からすればいいのか？等
実施成果 決定事項	親の高齢化のため休会していた、鹿児島の家族会「楠の会」が再開し、月一回、定期的な開催が可能となった。

岩手県陸前高田市
「ひきこもりの居場所づくりを考える」講演会

開催日 タイトル	2015 年 12 月 5 日（日） ひきこもりを考える「ひきこもりの現状」「居場所をつくって元気にする親の対応」
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	陸前高田市コミュニティホール大会議室 A
参加人数	26 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	読売新聞岩手版 10 月 29 日「悩み分ち合い　自立支援」事前告知記事掲載 毎日新聞岩手版 12 月 3 日「ひきこもり 孤立させない」事前告知記事掲載（次ページ）
実施内容	**【現地呼びかけ人】　気仙地区不登校ひきこもり父母会　佐々木善仁氏** 陸前高田市広田小元校長の佐々木善仁さんは、10 年間ひきこもりだった次男と、伴侶を東日本大震災で失った。息子に向き合えなかった後悔と償いの気持ちもあり、不登校ひきこもりの子どもの居場所「Café まつぼっくり」を昨年 5 月に開設。親たちの相談に乗ってきた。「悩みを話せば、楽になることもある。解決のヒントを得られることもある。家族の方は、一人で抱え込まず、ぜひ参加を」と呼びかけた。 **「居場所をつくって元気にする親の対応」について講演する池田佳世氏（KHJ 代表）**「快復は他人任せにせず、家族が 5 分でも話をすること」と話し、治療の場として何より家庭の大切さを説いた。 **「ひきこもりの現状」について説明するジャーナリスト池上正樹氏** 「当事者が安心して発言でき、反応を得られる関係や居場所づくりが必要。支援は、当事者の思いを尊重しながら、社会との関わりを見つけていくことが大事だ」と伝えた。 講演後は、家族、支援者、当事者を交えたグループトークで、互いの自己紹介から、今、家族で抱えている悩みや支援の現状を話し合った。（写真右→）
実施成果	講演会の反響記事が 2 誌に掲載された。 12 月 7 日に読売新聞＜全国に７０万人　陸前高田で講演会　居場所づくり考える＞ 12 月 9 日に河北新報＜被災地の教師たち＞ひきこもり　悩み共有
アンケートからの感想	・ひきこもりの人がどこにいるかや各支援団体がどんなケアを行っているかを知りたい ・ご本人から直接相談がない場合の対応の仕方を知りたい ・不登校の会か、ひきこもりの会かで、親も本人も参加しやすさが違うと思うので、それぞれの会が、別々にあった方が相談しやすいように思う。

2015 年　12 月 3 日（木）　毎日新聞（岩手版）告知記事

2015年12月3日 毎日（岩手版）

陸前高田で家族会作り目指す佐々木さん

引きこもり 孤立させない

亡き妻と次男の思い胸に

5日、東京のNPOが講演会

引きこもりの人やその家族らが社会から孤立しないよう、元小学校長の佐々木善仁さん（62）が、陸前高田市で引きこもりの家族会の設立に向けて活動している。東日本大震災の津波で、妻みき子さん（当時57歳）と、引きこもりだった次男仁さん（同28歳）をなくした。震災直後に定年退職し、この問題と向き合う人々の「居場所」を作りたいと願い続けてきた。【斎藤邦太】

仁さんは中学2年生の時、佐々木さんの実家のため陸前高田から遠方の中学校に転校した。この時を境に、不登校になった。寮に入って盛岡市の高校を卒業したが、その後も10年近くは自宅に引きこもる日々が続いていた。

みき子さんは2007年に「気仙地区不登校ひきこもり父母会」を作り、親同士で悩みを打ち明け合ったり勉強したりする活動を始めた。一方、佐々木さんは「自分は仕事人間で家族の事は放ったらかしだった」と振り返る。ただ、みき子さんに「理解したら父母会を手伝う」と約束していた。

ところが、震災の津波が次男と妻を奪った。あの日、みき子さんは自宅にいた仁さんに逃げるよう必死に呼びかけ、長男雄一さん（34）と一緒に避難しようとしたが、津波にのまれて流される中で雄一さんとともはぐれた。佐々木さんが、陸前高田市立広田小校長として避難する直前だった。

仁さんは震災2～3年前から毎日、ひっそりと自宅のトイレと風呂の掃除をしていた。話をするのは長い間、みき子さんだけだったが、佐々木さんは「このままではダメだ」と思っていたんでしょう。閉じこもるだけでなく、自分ともきちんと向き合おうとする必死に探した息子の気持ちを、今は感じます」という。

震災後、みき子さんの遺志を継ぐように父母会の活動を続けてきた。会員の多くは、不登校などの問題に悩んでいた。仁さんのように、就学年齢を過ぎても自宅にこもる人の親は少なかった。「世間からの目を親がより気にすることもあり、不登校とは異なる苦があるのだろう」。引きこもりに特化した団体の設立を考えるようになった。

引きこもり家族会の設立に向けて活動する佐々木善仁さん。「もっと地域全体でこの問題に取り組んでほしい」と願う＝陸前高田市小友町で

今月5日には、市コミュニティーホールでNPO「全国引きこもりKHJ親の会」（本部・東京都）の代表理事代表と、引きこもり問題に取り組むジャーナリスト、池上正樹さんの講演会が開かれる。地元の呼びかけ人として、佐々木さんは「行政や地域の人にも問題意識を共有してほしい」と、保健所や社会福祉協議会、地元新聞社を回り後援を取り付けた。

引きこもりの家族会の設立は「講演会をきっかけに、望む人が集まればぜひ」と話す。「当事者が悩みを語って経験と共有する、地域の中にそれができる受け皿が必要なんです。5日は一人でも多くの人に来てほしい」と呼び掛けている。

講演会は午後1時45分から。無料。問い合わせは同NPO本部事務局（☎03・5919・5250）。

川崎市ひきこもり家族会発足講演会・オレンジの会相談会

開催日 タイトル	2016 年 1 月 16 日（土） ひきこもりから居場所へ「アウトリーチと居場所支援」「回復に向けた親のかかわり」
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	川崎市生活文化会館てくのかわさき 展示場
参加人数	10 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて川崎市及び隣接市の行政、支援関係機関、報道各社に告知（64 件） 1 月 11 日東京新聞朝刊に告知情報掲載
実施内容	第一部：池田佳世氏（KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表） 「居場所を作って元気にする親の対応」 、ひきこもりの回復に親の力が必要と、「親の学習会」を２５年継続する中で回復の各段階について説明し、「親がまず勉強して、家庭を治療の場にしてほしい」。親の子への肯定的態度から、家庭を子どもの安全基地とするためのかかわりについて伝えた。 第二部：鈴木美登里氏（NPO 法人オレンジの会理事・） 「居場所をつくって元気にする親の対応」 問題解決のための支援について話された。「生きることを支援する」（就労・就学＝問題解決ではない）こと、本人の困り感、生きづらさの理解から、子どもを一人の人間として捉え、先回りして世話し過ぎないなど、家族としての大切なかかわりを伝えた。 「ひきこもりこと」＝悪ではありません。自分と向き合い、外的ストレスからの逃げ場が必要な状況や時期が「ひきこもる状態」だと捉えます。 参加したひきこもり経験者からは、現在、ひきこもり当事者が運営する居場所活動についての情報提供や、「こんな風にかかわってもらえると気が楽だった」などについての体験談があった。
決定事項	川崎オレンジの会が発足し、次回の家族懇談会の日程が 2 月 28 日に決まった。
２月２８日の学習会内容	＜家族の膠着状態を脱するための家族相談会＞講師：鈴木美登里氏 参加者のご家族から、現在の状況、困っていることなどを順番にお聞きし、主に講師の鈴木美登里さんが質問に答えるというかたちで進行。鈴木さんから「単につらいことを吐き出すだけではなく、親がハッピーになって笑顔でおうちに帰ってください」とのお話があり、参加者の方から「今まで悩んでいた事が話せて、気持ちが軽くなって、参加して良かったです」という感想が聞かれた。 当事者、経験者も 4 名参加し、本人目線からの気持ちを代弁した。

宮城県石巻市家族会発足講演会・まきっこの会家族会

開催日 タイトル	2016 年 1 月 24 日（日） 未来の居場所づくりを考える「ひきこもりの現状」「居場所をつくって元気にする親の対応」
実施団体	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	宮城生活協同組合文化会館アイトピア（ホール A）
参加人数	30 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて宮城県内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（39 件） 1 月 20 日 河北新報にて事前告知記事掲載
実施内容	 長年、当事者活動をサポートしているジャーナリストで池上正樹氏から「ひきこもりの現状～本人たちは社会に何を訴えているのか」について講演。石巻市の現状について、ひきこもりについての調査がないことを挙げ、「学校を卒業すると追跡不可能になり、地域の中で見えなくなって」いき、長期高年齢化している可能性と、中高年層は課題が見えづらく掘り起しの工夫が必要と伝えた。その工夫のひとつ当事者イベント「ひきこもり大学」を紹介。当事者が講師となり、経験を通じて得た見識や知恵などを、家族や一般の人たちに向かって、自らが望む形で講義し参加者と対話をする。自らの空白の履歴を価値に変える試みである。問題は、「なぜひきこもったか」ではなく「なぜ抜け出せないか？」。当事者の声を紹介し、「自分だけじゃないよ、ひとりじゃないよ」を伝えていく当事者活動の今を紹介した。 **（写真右）宮城県在住でひきこもり大学講師を務めた高橋さん（左）と池上正樹氏（右）** KHJ 全国ひきこもり家族会連合会代表（臨床心理士）の池田佳世氏からは、ひきこもりの回復に親の力が必要と、本人の回復の各段階に応じた「親の学習会」について講演し、家庭を子どもの安全基地とするためのかかわりについて伝えた。家族会の居場所は、保健所が行う居場所とは違い、制約が少ない。年齢をとっぱらって誰でも参加できる。気持ちを楽にしたり情報交換できる場所。「震災で家族や仕事を失い、ひきこもる人がいるかもしれない。身近な人が会に足を運び、立ち直るきっかけを共に探してほしい」。 石巻地上で仮設住宅の訪問支援に取り組む、からころステーションの理事で、宮城クリニック院長の宮城先生（精神科医）からは、「震災で 14000 世帯は家を亡くした。House はあっても Home はない。Home とは、甘えられるホッとできる、安心できる居場所。災害公営住宅では、孤立化が起こりつつある」と伝えた。 不登校支援、学習支援、居場所づくりをしている NPO 法人 TEDIC の門馬代表は、ひとりぼっちがいないまち・石巻を掲げ、宮城県内でも不登校出現率が高い石巻市の現状について、専門性ではなく、関係性（信頼関係）の大切さを伝えた。ななめの関係として大学生ボランティアのお兄さん、お姉さんの自然なかかわりから、本人の目線に合わせたサポートの例を挙げ、問題解決はワーカー、伴走寄り添いはチューターという役割分担と連携の大切さを説明した。 若者の修学、就労支援をしている NPO 法人「Switch」の高橋由佳代表は、「一緒に支えられる共生社会、セーフティネットを作りましょう」と訴え、誰もがつながりを持てる未来への応援メッセージを伝えた。

実施成果 決定事項	・石巻市で家族会誕生。名前は「まきっこ家族会」と決定した。 ・次回の家族会の開催が 2 月 28 日で決定した。 ・2 月 24 日河北新報にて「引きこもり支える思い共有」～石巻・NPO が家族会発足～として、講演会の模様が記事として紹介された。（次ページ）

家族会発足後の新聞記事

＜2 月 24 日掲載　河北新報＞

（15）　16版　みやぎ

河北新報

引きこもり支える思い共有

石巻・NPOが家族会発足

引きこもりの子を持つ親らでつくる家族会が、石巻市で発足した。東日本大震災で被災地では生活環境が変わり、引きこもり状態になる人もいる。月1回の例会を開き、思いを語り合い、課題を共有していく。

家族会を発足させたのはNPO法人「KHJ全国ひきこもり家族会連合会」（東京）。連合会が関わる県内の家族会は、仙台市を拠点に活動する団体に続き2例目。家族会では、当事者や家族らが集まり、専門家に相談したり悩みを打ち明けたりする場を提供する。

先月、市内であった連合会主催の講演会に当事者や家族、支援者ら約40人が出席。参加者は連合会の呼びかけに応じ、家族会設立に賛同した。

参加した石巻地方の60代女性は自宅に引きこもる30代の息子がいる。中学時代の不登校がきっかけ。「息子と向き合えず、相談先がよく分からないまま時が流れてしまった。同じ境遇の方々とつながることは心の支えになる」と語る。

被災地での引きこもり増加を懸念する声もある。

一般社団法人「震災こころのケア・ネットワークみやぎ」が運営する「からころステーション」（石巻市）は、石巻地方で仮設住宅での訪問支援などに取り組む。ステーションの宮城秀晃理事は「仮設住宅は長屋のような生活で人のぬくもりがあった。災害公営住宅では人のつながりが希薄になり、孤立や孤独化が起こりつつある」と指摘する。

連合会の池田佳世代表は「震災で家族や仕事を失い、引きこもる人がいるかもしれない。身近な人が会に足を運び、立ち直るきっかけを共に探してほしい」と望む。

家族会は28日午後1時半から、石巻市中里7丁目の宮城クリニックで会合を開く。参加無料、予約不要。定員30人。連絡先は連合会03（5944）5250。

災害公営住宅での孤立懸念

家族会発足に先立って開かれた講演会＝1月24日、石巻市中央2丁目のみやぎ生協文化会館アイトピアホール

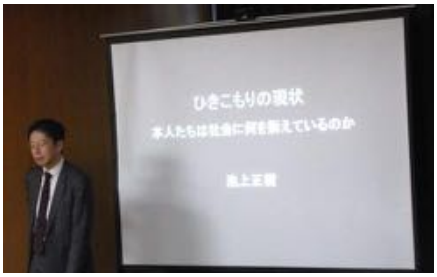
みや

アンケートからの感想・課題など	＜感想＞ ・自分の考えが整理できた。家族で困っている人がたくさんいるいるのがわかった。 ・何もわからない状態での情報の重要さを感じた点 ・ひきこもり問題は当事者の問題だけでなく社会全体の問題と分かった。 ・家族会は、ひとりじゃないよを伝えていく場所。社会の空気を変えていくために、未来の居場所づくりとして、出会いの場とすることの大切さ。 ＜課題＞ ・当事者を取り囲む周囲の人たち（親や兄弟、祖父母）の理解や、認知の仕方が十分でなく、継続相談とならず中断になることが多いのが残念。 ・本人が出ようと思わない（動機づけ） ・1 人 1 人で課題が違い対処できることと、できないことがあり、本人の言葉を引き出す手段が乏しい。 ・月 2 回、ひきこもりの子を持つ親の会というグループワークを実施、親の会の目的で始めたが、当事者も参加している。・アウトリーチ支援、震災後、石巻市で支援していますが、市からの委託事業費で支援しています。活動は年単位の契約で、先の保障がありません。
２月２８日の月例会内容	第一回のまきっこ家族会は、「家族でいろいろ語り合おう」の巻。参加者からの経験談として、夫婦でカウンセリングに通い、自分たちの問題を解決していった結果として、息子さんが一人暮らしを始めた話があり、他の参加者も自分の胸の内を吐き出しながら、だんだんと気持ちを楽にしていく場となった。当事者グループの動きもあった。石巻家族会と、福島の当事者グループとの交流が決まった。

町田市家族会発足講演会

開催日 タイトル	2016 年 1 月 30 日（日） ～ひきこもりから居場所へ～「ひきこもりの現状」「ひきこもりの回復から居場所へ」
実施団体	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	町田市民ホール 第４会議室
参加人数	58 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて多摩地区、都区内、隣接県の行政、支援関係機関、報道各社に告知（151 件） 朝日新聞多摩版 1 月 29 日事前告知記事掲載 毎日新聞多摩版 1 月 28 日事前告知記事掲載
実施内容	 講演会の冒頭、東京にある家族会、NPO 法人楽の会リーラの事務局長の市川氏から、挨拶があり、「身近な地域に家族会を作ることが何より大切。都内にある家族会同士、ネットワークを組み、今家族ができることから助け合っていきましょう」と伝えた。次に、KHJ 本部事務局（上田）から、KHJ の団体説明と KHJ の全国実態調査から見えてきた長期高年齢化の現状などを伝えた。（本人の平均年齢 33.2 歳、ひきこもり期間 10.22 年）その後、発足講演会として、ジャーナリストの池上正樹氏から全国でのひきこもり当事者の活動（居場所活動）や、様々な背景と本人のペースに合わせた支援現場の状況が伝えられた。町田市の「ひきこもり当事者調査」から、周囲が行動化のタイミングを見逃さないことが大切と訴えた。家族会代表の池田佳世氏からは、家庭を治療の場にすべく、親が子どもにどのように関わっていくことが必要かについて、ひきこもり段階に応じた親が身に着けるべき態度について講演を行った。その後、グループとなって自己紹介と共に家族の状況についての対話と交流を行った。
実施成果 決定事項	・町田市に家族会発足。保健所や市内の支援機関など地域連携の機会を得た。 ・次回の家族会の開催が 2 月 20 日に決定した。
アンケートからの感想	**＜参加者の感想＞** ・15 年前から変わらない現況に親の期待のしつこさの深さを思い知る一方で、当事者の力のつけ方が大きく様変わりしてきたことに、光明を感じる。 ・経験者の話が聞けてよかった。 ・自分の気持ちを話せたことがよかった **＜家族が抱える問題＞** ・ひきこもりを脱して１２年、現在の会社に勤務して１０年になるけど、非正規で給料が安いので、生活そのものが「ひきこもり時代」よりすごくきついことが悩みです。 ・弟夫婦を父母が経済的に支えているが、自立に向かっていると思えず、頼っていながら両親への態度も素直ではないと感じていて、責める気持ちが否めず、普通に向き合えていません。親亡き後を案じています。 **＜親亡き後の不安＞** ・両親が年老いて、いなくなってからの子どもが生きていけるか、心配。どこにも相談していません。 ・当事者を抱える保護者自身の高齢化で発生してくる事柄への対応策 ・特になし。親が亡くなった時に、妹についてどう対処していいかわからない点が不安。 **＜支援者側からの問題提起＞** ・就労に向かいかけたが、相談中断、ひきこもり再び、というケース。親は相談に見えず本人が「働きたい」と意思表明は明らかだったけれどもやはり途切れてしまった。 ・40 代～の方の支援に悩む。30 代前半までなら…という支援は少なくないように思う。 ・地道な支援をするための組織のバックアップ、方針の支持が得づらい。

奈良県家族会発足講演会

開催日 タイトル	2016 年 2 月 7 日（日） ～ひきこもりの居場所づくり～
実施 団体名	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
会場	奈良県文化会館（第二会議室）
参加人数	30 名（当事者及び家族、親族、支援者・医療関係者・民生委員・ボランティアなど）
広報	NetFAX にて奈良県内の行政、支援関係機関、報道各社に告知（54 件） 読売新聞（奈良支局）1 月 28 日事前告知記事掲載
実施内容	最初に、KHJ 本部事務局（上田氏）から、KHJ の説明として、全国組織を有する唯一の当事者団体として、ひきこもりの現状を説明した。全国の家族会を対象にした実態調査では「家族会では本音が話せる」人が 92%に上っており、「独りで抱え込まないことが本当に大切だとわかった」との感想が多く、家族それぞれが家庭以外に一息入れる場所を持つことが大切であると伝えた。また、ジャーナリスト池上正樹氏からは「本人たちは社会に何を訴えているのか」について講演。全国の当事者たちが主体的に生み出す動きを伝えた。 家族会代表の池田佳世氏からは、「ひきこもりを元気にする親の対応」について、子どもの話をどのように聴いたらいいかなど、具体的なケースを交えて伝えた。 
実施成果 決定事項	KHJJ 奈良県「わかくさの会」が発足した。次回は 4 月 3 日に決定した。
アンケートからの感想	・ひきこもっている状態（約 14 年になります）から抜け出すための考え方、具体的な行動のノウハウ、その他情報を得るため　・当事者、支援者さんとの何らかの交流。 ・ひきこもり当事者で、ダイヤモンドオンラインを自助会に行く前にずっと読んでいました。それで、自助会に出向いてみようと思えたので初めて講演を聞きに来ました。 ・以前より池上氏の連載”引きこもりするオトナたち”を拝読していて、当事者発の数々の試みに希望を感じ、関心を持っていた。地元でも家族会が発足すると知り、今後も参加するかはわからないが、雰囲気だけでも知っておこうと思い参加した。 ・演題「ひきこもりを元気にする親の対応」にひかれて参加しました。 ・知人に誘ってもらいました。少しでも子供が前向きになってくれたらと思い、それには声掛けが大切だと思ったので講演に参加して学べたらと思いました。
アンケートから、当事者本人の声	＜当事者の声＞ ・自助会等で仲間ができ、孤独状態にはないが、次の一歩（就労や職業訓練等）が踏み出せず不安（安定した生活を得るための）　・ハローワークやサポステ等で相談、コミュニケーションセミナー、面接等の訓練を受けたものの、次につながらない。就労意欲がわかない。（仲間ができたこと、趣味を楽しむ等で少しはわくようになっている） ・支援機関に不信感（押しつけがあったり、毒にも薬にもならない無意味なカウンセリング）があるが、自分の怠惰やプライドの高さも自覚していて、結局どういった支援を受けても文句を言ってる可能性があり、葛藤していて、不安に駆られている。 ・経済的問題は何もしなくても解決するようなものではないので、将来への不安はとても大きい。就労支援はいろいろあるようだが、そもそも現代社会にうまく適応できないことがひきこもりの要因なので、既存の就労観に合わせることに違和感がある。しかし、経済的問題は長引くほど酷くなるので焦ってしまい、身動きが取れない状態だ。

２．講演会アンケート報告

１）講演会アンケートの目的（※アンケート内容は巻末資料１を参照）

全国における居場所普及促進活動のため、ひきこもり問題に関し、参加者が現在抱えている課題を知り、講演会における満足度を測定するために実施された。

＜調査回数・対象人数・回答率＞

学習会開催回数（開催地域数）	10 回　（全国 10 地域）
参加人数合計	347 名　（平均 34.7 名 /回）
アンケート回答人数（回収率）	204 名　（58.8%）

２）アンケート結果について

①学習会の満足度について

図１に示したとおり、学習会に対して満足を得ることができた参加者は、「満足」45.6%、「やや満足」40.2%で、全体の 85,8%の方が何らかの満足感を得たことがわかった。

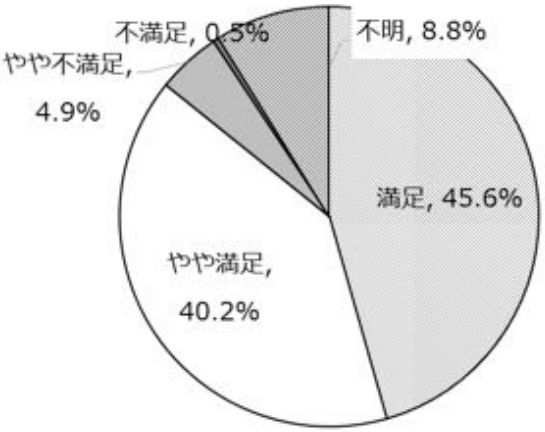


図１　講演会に対する満足度

②満足に思った点について（複数回答）

満足に思った点として、「役立つ情報が得られた」と回答した参加者は 111 人で、全体の半数以上に上った。続いて、他の参加者との交流、情報交換が図られたという方が多く見られた。講演会の後半のグループトークの時間に参加者同士の交流が促進されたと思われる。

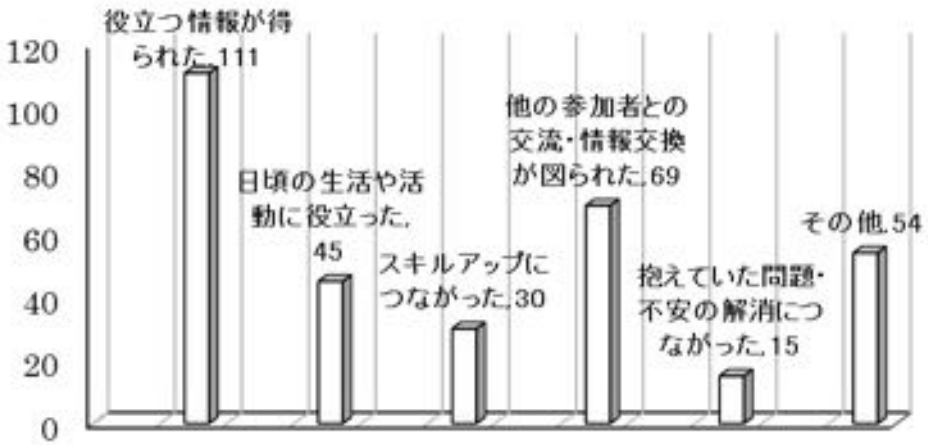


図２　満足に思った点について

③性別　④年代

講演会に参加された男女比は、女性が 7 割を占めた。また、年代別では、50 代～70 代が、全体の 6 割を占めた。また、20 代～40 代の親以外の次世代の参加も、4 割近くあった。

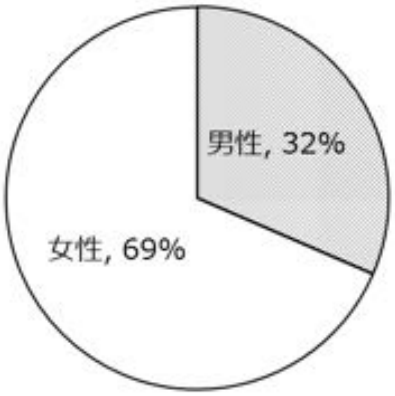


図 3　参加者の男女比

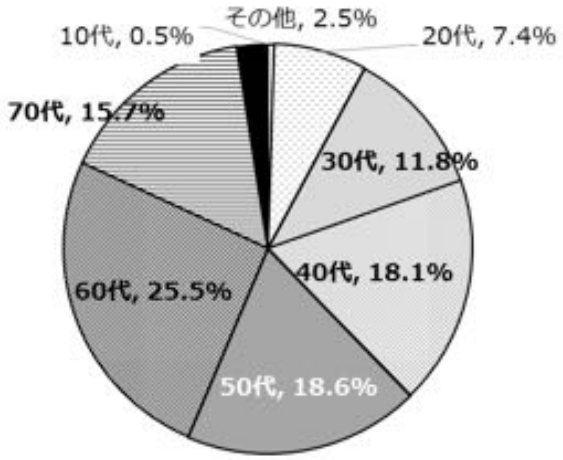


図 4　参加者の年代比

⑤参加者の立場

ひきこもり当事者、当該家族が全体の 50%を占め、関係諸機関の支援者からの参加が全体の 35%に上った。自治体からの行政職員の参加が半数を占めた（昨年調査の 2 倍増）。行政への広報促進と共に、困窮者自立支援法の施行に伴い、ひきこもり問題が、社会で取り組む問題としての認識が高まっていると考えられる。

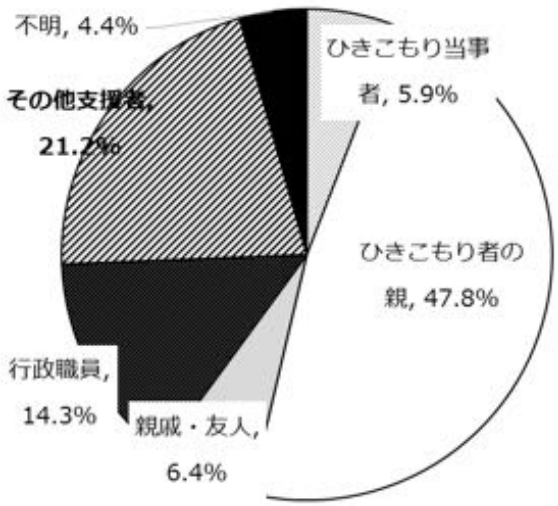


図 5　参加者の立場

３）ひきこもりに関する困難や課題について

＜家族の立場・兄弟姉妹の立場　困難や悩み事＞

【子どもへの関わり方】
・家庭内で困っていてもどこにどう支援場があるのかわからない。
・子どもの意識が「外へ出て、人と交わり、現状を変えたいと願う」のような前向きな方向に向かっていかない。家族以外とは会話がない。
・子どもとの会話をどう成り立たせるか。
・人と話すことを嫌がる。どうしたら信頼関係ができるのか…。話をしたら理解はできるが言葉を発しないので何か方法はないのか（医療につなげた方がいいのだろうか）

【家族の孤立】
・自分の気持ちを吐き出せる場所がない。

【就労につながらない】
・現在は親と別に生活している中で、時々会いに行くと何もかわらない、だらだらした生活をしている。就活や外に出ることをすすめても右から左に聞く耳をもたない。いろいろ質問すると説教しに来たのかと言われる。夫は「仕事のする気のないものに何をしてあげても仕方ない」と言って、ほうり放しで、話し合うということもしてくれない。

【親亡き後の不安】
・現在は特にまわりの家族に迷惑をかけて困るということはないのですが、親が死んでしまった後のことが心配である。
・両親が年老いて、いなくなってからの子どもが生きていけるか、心配。どこにも相談していません。
・弟夫婦を父母が経済的に支えているが、自立に向かっていると思えず、頼っていながら両親への態度も素直ではないと感じていて、責める気持ちが否めず、普通に向き合えていません。親亡き後を案じている。

＜当事者の立場からの悩み、困り事＞

・親の高齢化もあり、居場所を探したいと思った。

・元当事者となって 10 年近くなるが、何かあると昔の姿が見えることがある。

・新しい事に対する大きな不安から、先へ進めないクセが強いです。「仕事」に対する不安があります。

・ひきこもりを脱して１２年、現在の会社に勤務して１０年になるけど、非正規で給料が安いので、生活そのものが「ひきこもり時代」よりすごくきついことが悩みです。

・経済的問題は何もしなくても解決するようなものではないので、将来への不安はとても大きい。就労支援はいろいろあるようだが、そもそも現代社会にうまく適応できないことがひきこもりの要因なので、既存の就労観に合わせることに違和感がある。しかし、経済的問題は長引くほど酷くなるので焦ってしまい、身動きが取れない状態だ。

・支援機関に不信感（押しつけがあったり、毒にも薬にもならない無意味なカウンセリング）があるが、自分の怠惰やプライドの高さも自覚していて、結局どういった支援を受けても文句を言ってる可能性があり、葛藤していて、不安に駆られている。

・自助会等で仲間ができ、孤独状態にはないが、次の一歩（就労や職業訓練等）が踏み出せず不安（安定した生活を得るための）

・ハローワークやサポステ等で相談、コミュニケーションセミナー、面接等の訓練を受けたものの、次につながらない。就労意欲がわかない。（仲間ができたこと、趣味を楽しむ等で少しはわくようになっている）

・父と二人暮らしなのですが、その父が仕事がつらいとこぼしていたため、自分としてはいい加減何らかの職に就きたいと思うのですが、自信の喪失からなかなか行動に移せず悩んでいる。この講演会には黙って参加するほど、父に対して言いたいことを言えない気恥ずかしさがある。

・”主婦”という肩書だけあり、（実際はウツや適応障害で通院中です）夫と親子関係と同じような関係性になってしまい社会経験が少ないひきこもり当事者です。家事労働もあま

りよくできていません。2年前は完全に寝たきりでひきこもりでした。自助会につながってから、かなり良くなりました。

・(コンピューターの）専門学校を中退後、アスペルガーと診断され、2年くらいひきこもりしていました。発達障害の二次障害から鬱もあり、精神手帳を持って障害者職業センターからジョブコーチも付けてもらって、今2年仕事が続いています。発達障害の面からの取組みも当事者理解につながるのではないかと思います

＜支援者の立場・ひきこもり支援を行う上での支援者の困難について＞

【支援の入口の問題】
・本人が出ようと思わない（動機づけ）
・アウトリーチするにあたって切り口がない。どのような形でアプローチをしていくのか。
・居場所をつくったとして、どのようにして当事者をつなげるか。きっかけづくりの仕方がわからず悩んでいます。
・家族の協力のもと、本人と会うことから支援が始まるのですが、その掘り起こしの段階が困難と思われる。
・親の思いは聞けるが、親子は断絶している。本人とつながるすべは？
・顔を合わせた時、相手の方が隠れてしまう。そういうときの声かけ、初めの一言。

【支援スキル・ノウハウの不足】
・相談を受けても、支援策がない。how　to が、不明。何から、検討していけばよいか。
・当事者が、数年前就労しようと1か月がんばったが、対人関係で一挙に閉鎖的になってしまった。
・ご家族からの相談で、本人が第三者の介入を拒否している場合が多く、本人とどういうやり方で関係を築いていけばよいかわからない。
・高齢（50代・60代）のひきこもりの方についての支援方法について。

【本人の状態の多様性】
・支援の多様化の必要性を感じる。状態が様々で、家族など周囲の方からの相談だけでは本人が見えにくい。
・1人1人で課題が違い対処できることと、できないことがある。

【支援機関へのつなぎ方】
・本人の意思を十分に確認できないまま、家族・地域からの声を受けての関わりが多い。どのように本人の声を引き出せるか、尊重できるか、社会資源を生み出せるか。
・他機関との連携、業務上、出来る事の限界があり、また時間の制約があることも多いことから、他機関との連携が必要だと感じる。つなげ方が難しい。

【地域資源、支援体制の不足】
・支援する団体が少ない、解決する手段が見当たらない。
・ひきこもりの原因が多岐に渡り、支援先をどこにしたらよいか、またその確保をどうするか課題だと思う。
・居場所の資源の不足。
・長期間を要すること（担当者の変更）
・家族以外で長期に渡る伴走が必要だと思っていますが、現在はそういう窓口も乏しく、体勢がつくりにくい。

・どこにつなぐのが最適なのかがわからない？
・行政の保健師さんにひきこもりについてはサイレントな問題として後回しにされる印象がある。（アルコール依存や暴力など問題が表面化しやすい）
・家族に複数の困難を抱えた支援（親にも問題がある場合）
・他機関との連携、業務上、出来る事の限界があり、また時間の制約があることも多いことから、他機関との連携が必要だと感じるが、つなげ方が難しい（沖縄）

＜今後の取組みについて＞

・【活動を知る】どんなことから一歩進めば良いかわからないので、いろいろな所に足を運び、活動を知ろうと思いました。
・【橋渡しの役割】親御さんと本人との仲介役として、コミュニケーションを円滑にできるようはかること。
・【連携促進】自立訓練（生活訓練）事業所を運営しております。相談支援事業も併設しておりますのでぜひ連携がとれればと思う。
・【家族への支援】本人だけでなく親との交流も深めていくようにした。信頼がなければ、何をしても効果を出せないし、家族ぐるみの支援が必要かなと思う。医療的対応が必要なら勧めたり、学生なら信頼できる教師やカウンセラーに支援を依頼した。

【まとめ】ひきこもり問題の現状を理解するために

・家族、当事者本人、支援者、それぞれの立場からの困難の現状について見てみると、それぞれの状態（回復段階）に応じた困難さがあることがわかった。

・主に、家族からは子どもへのかかり方や親亡き後の問題、本人からは就労面や心身の安定を保つことへの困難、支援者からは本人とつながるための関わるための入口問題や、関わり方、連携方法、地域資源の不足の問題などが挙がった。

・特に、ひきこもり当事者の声から読み取れるのは、ひきこもり状態から脱しても、その段階ごとでの生き辛さを抱えており、彼らの目線に立って、その辛さをどう理解していくかが大切と思われる。

・また、地域資源、支援体制の不足については、社会全体で考えていくべき問題であろう。ひきこもり支援に求められるものは、長期に渡り伴走できる、継続的な粘り強い支援であろう。また、多様化に対応できる「居場所づくり」であると考えられる。公的（フォーマル）、民間（インフォーマル）を問わず、地域資源を確保していくことが重要である。

・講演会では、ひきこもり支援の土台として家族支援（家庭を治療の場とするための家族支援と親の学習）の大切さを伝えた。「信頼がなければ、何をしても効果を出せない」という言葉のとおり、ひきこもり支援の入口として、支援者が家族との信頼関係を作り、家族と共に伴走していくことが重要であろう。

・親亡き後への不安については、長期高年齢化が背景になっている。今後、家族会としても、長期高年齢化に対する親の不安をどう捉えて対応していくかも重要なテーマであろう。

第二部 各ブロックにおける居場所づくり活動

1．活動実績報告

全国の KHJ ひきこもり家族会ネットワークから 8 ブロック 17 支部が、社会的自立に向けた居場所づくり事業を実施し、2015 年 8 月～半年間（※名古屋のみ 5 か月間）での居場所参加者を当事者と家族を分けて集計した（表 1）。17 支部での平均居場所実施回数は、月平均 7.7 回、居場所参加のべ人数（月平均）は、全体でおよそ 45.5 人（うち当事者 26.5 人）であり、1 回あたりのべ 6～7 名の参加があった。遂行率では、実施回数は、目標値に対して 109.5%、参加人数（当事者のみ）は目標の 80%の参加があった。

表1. 居場所回数と利用人数集計（2015 年 8 月～2016 年 1 月・6 か月間）

	居場所実施回数			居場所利用のべ人数（当事者・家族・全合計）				
17 支部	回数計	目標数値	遂行率	当事者計	目標人数	遂行率	家族計	当事者家族計
青森	6	6	100.0%	11	12	91.7%	87	98
長岡	82	96	85.4%	510	600	85.0%	0	510
加賀	25	24	104.2%	45	90	50.0%	84	129
福井	4	6	66.7%	11	12	91.7%	24	35
東東京	77	90	85.6%	273	474	57.6%	126	399
千葉	23	24	95.8%	276	330	83.6%	50	326
愛知	57	48	118.8%	193	96	201.0%	227	420
名古屋	20	40	50.0%	56	80	70.0%	3	59
三重	17	24	70.8%	6	48	12.5%	158	164
豊田	65	41	158.5%	200	200	100.0%	190	390
浜松	64	24	266.7%	183	60	305.0%	183	366
兵庫	108	96	112.5%	503	480	104.8%	75	578
大阪	62	72	86.1%	88	216	40.7%	117	205
広島	64	24	266.7%	74	96	77.1%	146	220
香川	42	24	175.0%	107	120	89.2%	343	450
福岡	41	48	85.4%	84	202	41.6%	91	175
沖縄	35	36	97.2%	89	270	33.0%	37	126
合計	792（回）	723	109.5%	2,709（人）	3,386	80.0%	1,941（人）	4,650（人）
月平均	7.7 回の実施			26.5 人	—	—	19 人	45.5 人

各支部が実施した居場所の活動内容は、以下のとおりである。定期的な居場所の開催のほか、居場所運営を活性化させるための活動も本事業として盛り込んだ。

表2. 居場所の活動内容について

活　動　内　容	実施支部数
①ひきこもり当事者の居場所の開催	17 支部（全支部）
②就労準備のためのパソコン講座	11 支部
③当事者の雇用創出のための地域の特産物の発掘、生産	9 支部
④居場所活動に地域の理解を得るための活動	8 支部
⑤先進的な取り組みをしている支部との人材交流	9 支部
⑥居場所運営のノウハウ共有のための会合への参加	14 支部

２．居場所の運営状況について～アンケート結果から～

各支部の居場所の運営状況を調べるために、事業開始時に運営担当者を対象にアンケート調査を行った。（運営者アンケートについては、巻末資料３を参照）

＜居場所を運営した年数について＞

表３から、17 支部の家族会のうち、居場所づくりに「はじめて」取り組んだ支部が 7 支部、4 割に上ったことがわかった。また、7 支部のうち、5 支部は、家族会が出来て半年以内の新支部であった。家族会の運営と共に、居場所づくりの必要性を感じている支部の動きが見られたと思われる。

表3　居場所を運営した年数

はじめて	1 年～4 年	8 年～10 年	10 年以上
7 支部	4 支部	4 支部	2 支部

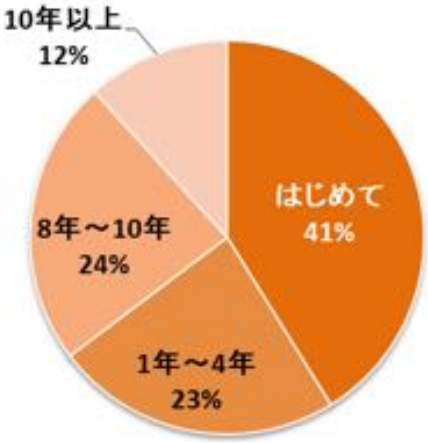


図 1-1：居場所の運営年数

＜スタッフ構成について＞

家族会の居場所スタッフは、ボランティアが全体の半数を占めた。次いで、専任スタッフ、非常勤スタッフが 35%を占めた。居場所の担い手の半分は、ボランティアスタッフの力によるものであることがわかった。

表4　雇用形態別 スタッフ構成

専任	嘱託	非常勤	ボランティア	その他	合計
24	3	23	71	13	134 人

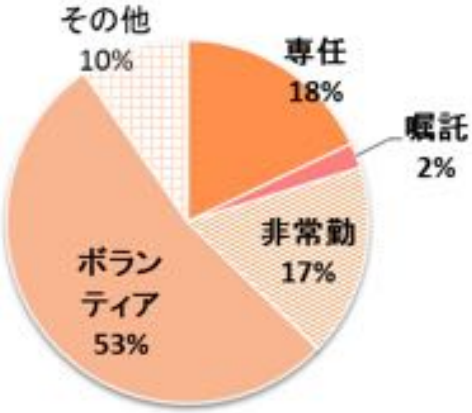


図 1-2：雇用形態別スタッフ構成

また、資格別では、ピアサポーターが最も多く、当事者団体としてのピア性(=仲間、共通の経験)を活かした居場所サポートとなっている。

表5　資格別 スタッフ構成

有資格者	無資格者	ピアサポーター	合計
33	43	46	122 人

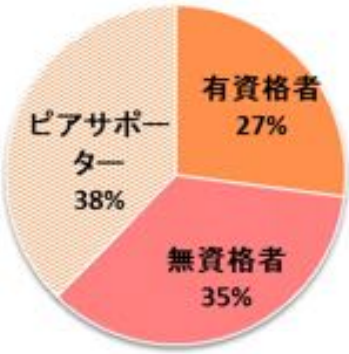


図 1-3：資格別 スタッフ構成

＜居場所参加頻度について＞

利用者が居場所に参加する頻度は、週１回以上が、全体の７割を占めた。居場所参加が定着している割合が多い傾向がある。

表6　居場所参加頻度について

月１回	月 2,3 回	週 1～3 回	週4回以上
1	5	12	3

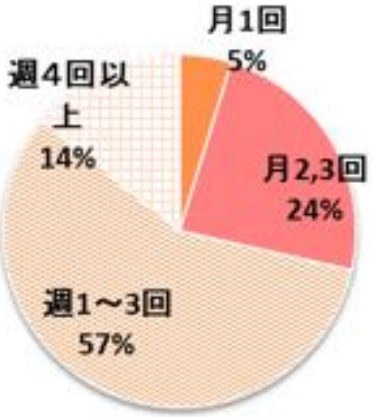


図 1-4：居場所参加頻度について

＜居場所への参加要件について＞

居場所への参加は、当事者、家族、支援者が一緒の居場所が半数を占めた。また誰でも参加のオープンな居場所を含めると、75%が家族と協働の居場所であった。<u>参加者を限定する居場所より、当事者と家族が一緒に活動する居場所形態が多いことがわかった。</u>

表7　居場所への参加要件について

当事者・経験者のみ（クローズ）	当事者・家族支援者	参加誰でも自由（オープン）
5	10	5

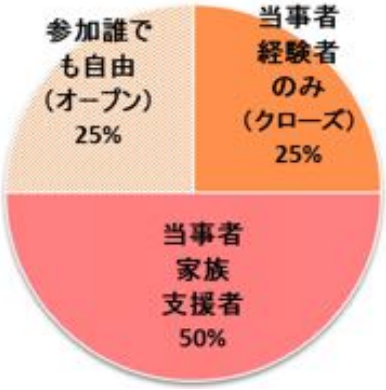


図 1-5：居場所への参加要件について

＜居場所参加の年齢制限について＞

居場所への参加者の年齢制限については、<u>制限無しの居場所が８割を占めた。</u>

制限有りの居場所は、３支部あった。年齢制限の基準として挙がったのは、対象者は「概ね 17 歳以上」、「概ね 65 歳以下」、「70 歳以下」という基準であった。

図 1-6：居場所参加の年齢制限について

＜居場所の参加ルールの設定について＞

居場所に参加ルールを設けているかどうかについては、「ルールがある」と答えた支部が 6 割に上った。

表8　居場所の参加ルールの設定について

ルールがある	ルールが無い	検討中
10	2	5

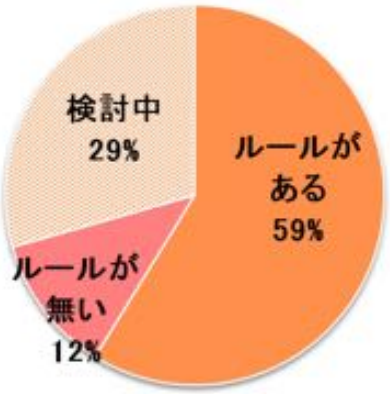


図 1-7：参加者の年齢制限について

また、どんなルールを設けているかについては、表 9 の通り、守秘義務が最も多く、10 支部に上った。その他には「男女間の連絡先禁止」、「メンバー通しのアドレス交換は基本禁止」などが挙がった。

表 9　居場所の参加ルールの設定について
（複数回答）

守秘義務	10 支部
相手の発言の否定や批判	6 支部
宗教や教育論など価値観の押し付け	7 支部
ネット上での書き込みや批判	6 支部
その他	2 支部

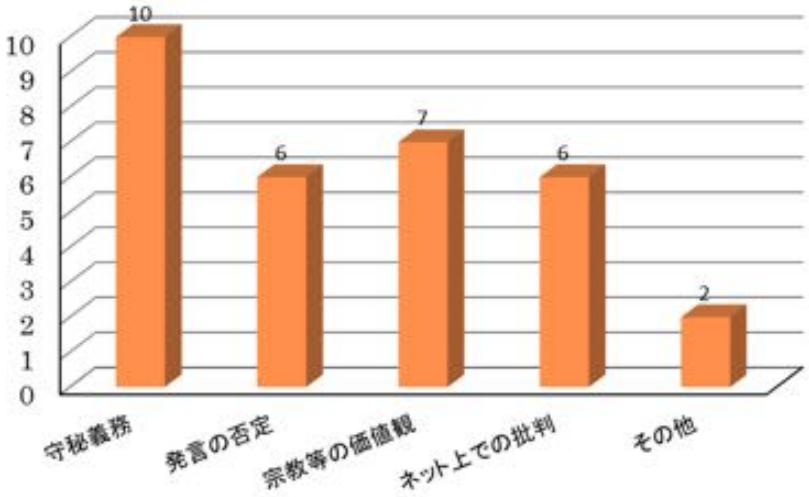


図 8：居場所の参加ルールの設定について

３．各ブロックの居場所づくり活動成果と報告

本事業に参加した 17 支部について、会の強み、特徴などをまとめた。また、2015 年 8 月（一部 9 月から）～2016 年 1 月（一部 2 月まで）の活動報告を掲載した。※は初めて居場所づくりを実施した支部（17 支部中、7 支部）である。

No.	支部名 居場所開始年月 （会の発足年月）	特徴　活動成果
1	**青森さくらの会※** 2015 年 8 月～ （2014 年 10 月発足）	特徴・青森地区と八戸地区の協働連携「人間の原点に帰る」。 実施成果まず、安心して居られる場所、気軽に来られる雰囲気づくりを提供した。その上で、居場所に来てよかったと思える環境、居場所に行こうとする意欲の継続。当事者自ら自発的に会場設営をしてくれるなど前向きな姿勢がみられ、居場所の運営は、当事者主導のもとに進めてみたいと新たな目標に向かう思いが強いと感じられた。
2	**長岡フェニックスの会※** 2015 年 5 月～ （2015 年 5 月発足）	特徴・クリニック内に居場所スペースを設け、週 4 回、メニューを設定して居場所を開催。ひと月で 80 人～90 人の参加。 実施成果語り場、雑談交流の居場所は一定の利用者がおり、継続して開催してきたことで、生活のリズム、対人関係づくりに効果があった。スポーツは体力づくりになり、ゲーム、将棋なども楽しみながら知的精神活動ができた。ただし、スタッフが一人に利用者が１０名ほどになると、全体への配慮にかけ、声かけなどできず、そのまま帰るケースがあった。その場の規模にあった居場所の運営が必要と思われる。PC 教室や学習支援は少人数であったが、その分、きめ細かい対応ができ、検定に挑戦し合格したり、自分発見や自己表現できる場となった。
3	**加賀いまここ親の会※** 2015 年 8 月～ （2015 年 4 月発足）	特徴・加賀の山奥でコミュニティカフェを運営。他、農作業や山菜加工や自然を活かした体験活動も。 実施成果安心して外に出られる場をつくれた。そしていろんな体験をしてもらえた。ひきこもり状態から一歩外にでる意欲が出たことが良かった。自然の中でいろんな体験を通して、心地よさを感じていただけた。
4	**福井すいせんの会※** 2015 年 8 月～ （2015 年 2 月発足）	特徴・月例会を重ねており、5 家族ほどに変化が見られた。・居場所では、発声や朗読、体操、料理（そば打ち）を実施した。 実施成果当事者は、外出全く無しの方も多く、当事者の参加者は限られていたが、参加してくれている当事者からは、「話す所がなかったので、ここに来るとホッとする。居場所は続けてほしい」と言ってくれている。
5	**東東京楽の会リーラ** 2007 年 4 月～ （2006 年 4 月発足）	特徴・東京豊島区巣鴨の地蔵通りに居場所があり便がいい。 ・グループカウンセリングを定期的に実施。居場所や訪問にピアサポーターが関わっている。 実施成果居場所の新しいメニューとして、講座、職業講話、等を提供し、一歩踏み出すきっかけづくりになった。PC 関連ではチラシ、パンフレット等を作成し活用している。目に見える成果と役立ち感及び達成感が得られるという成果につながった。

6	**千葉なの花会** 2004 年 4 月～ (2003 年 12 月発足)	特徴・月 1 回の月例会で講演を実施。毎回 70～100 人。 ・月 3 回の居場所では将棋やトランプなどのゲームをしている。基本的には居場所参加者の意向を中心にプログラムを考えている。 ・居場所参加者は埼玉から来る方もいる。 実施成果居場所に来る若者の様相は、なの花会創設以来変化はないと思うが、**新メンバーの参加があっても、仲間として暖かく迎え入れようとする思いやりは、スポーツやゲーム、雑談などを通してより強く醸成されたと思う。**PC 講座では、Excel の基礎のテキストを使った講習と練習問題を自力で解くことを通して、**パソコンを使った就活への意欲が芽生えてきた。**
7	**東海なでしこ会** 2011 年 4 月～ (2001 年 8 月発足)	特徴・当事者は PC 講座はネットで十分というが、そのスキルが事務で活かされ社会参加や就労につながるという意識を促す支援をしている。夕食を共にして対話をしたり、外出をしたりしている。 実施成果同じような悩みを持つ当事者同士が集う場で、**気兼ねなく人間関係を再構築することが出来るようになった。**元当事者スタッフには、一利用者立場でなく支援（お世話）をすることの意味を知ってもらう機会になった。少人数ながらも人見知りの強い参加者は、数回の参加後に来られなくなるケースもあった。
8	**名古屋オレンジの会** 2001 年 4 月～ (2001 年 11 月発足)	特徴・４つの居場所運営を実施 ①地域活動支援センター　②就労継続支援 B 型事業所 ③就労移行支援　④その他の制度に当てはまらない居場所 ①では主に内職。②ではパン製作。③は食堂の運営。④は自由なプログラムを実施。当事者の状況に応じて居場所参加を促している。 実施成果④の居場所を実施。利用登録や利用のための条件がなく、誰でも参加できる居場所として、制度の狭間で居場所のない当事者が安心して利用できていた。また、どこに相談に行けば良いか分からない、相談自体に抵抗があるといった方に対し、よろず相談（生活・就労・家族・人間関係など）を行い、一人で悩んでいた方の気持ちの整理やどこに相談に行けばよいかの繋ぎの役割を担うことができた。**支援を受けることに抵抗を感じている当事者が多く、情報交換を行うことでインフォーマルな社会資源があることを周知することができた。**
9	**豊田大地の会** 2012 年 6 月～ (2003 年 9 月発足)	特徴・報告事項や現況を共有することで、共に支え合う組織、家族会を目指している。農園を運営し、農園の様々な活動が当事者支援に繋がっている。 実施成果①月例ピアサポーターとの懇談…若者たちの安らぎの時間と空間で必須の活動②屋外活動…月例開催の決まっている、農作業、ファーマーズ・マーケット、料理会、内職の主軸４柱をきちっと開催することは**若者たちの生活サイクルを保つ**ために重要で大切で基本◎その他に屋外活動として月ごとにアクセントの効いた行事を企画実施出来ました。①９月．１１月…**豊田マラソン・ジョギング部門に参加エントリートライ**しました。若者たちは大勢の中での参加に委縮を懸念したが、３**回の事前実線コース練習で大きな体験をすることができました**②パソコン教室の再開…昨年の Word、Excel の初級コースで終わっていたが、今回講師料予算の手当てを頂き**作表技術の習得**ができたのは大きい③内職…毎週月火の２日を稼働でき、若者はのべ１９２

		人、家族会のべ２０１人の沢山の労働機会と対価を得る事ができ、かつ就労継続できたのは大きい。
10	**三重オレンジの会** 2015 年 8 月～ (2015 年 1 月発足)	特徴・発足したばかりだが、居場所を始めること。「親のステップ・新若者のステップ」を実施している。 実施成果１．当事者で参加可能な方に家族会出席時の同行をお願いし、ＤＶＤ鑑賞や茶話会を実施。また、四日市相談会では受付をお願いし、茶話会を実施。２．11 月の家族会で「参加者に資源調査」を行い、居場所候補の空き家とホームページ開設の提案を受けた。これを期に居場所開設に向け活動開始し、3 月 2 日からの開設にこぎつけた。３．居場所の目処がついた事で、一つの光を提案できた。役員にまとまりが出てきた。
11	**浜松てくてく** 2014 年 12 月～ （2011 年 9 月発足）	特徴・農作地の放棄地を借り上げ、親が耕して当事者が出てくるようになる居場所「てくてくファーム」を運営。・にんにくや小豆を育成し、農協や地元のスーパーに出荷している。・外の居場所として認知され、行政がやっているひきこもり施策に（市運営の居場所など）なじめなかった当事者が来ている。相談件数も訪問（アウトリーチ）も増えた。 実施成果運営者は、外の居場所を提供できた。その結果継続的に当事者が出てこられるようになった。イベントに参加することにより、当事者が街に出てこられるようになった。利用者は、ファームでの作業にアルバイト料が出て仕事をすれば自分のお金を持てる喜びを発見。また、出てこられない人も、ファーム通信を楽しみにしたり、自分の家で野菜を育て始める人も出てきて、各自其々の動きが出始めている。
12	**兵庫ひまわりの家** 2014 年 4 月～ (2012 年 4 月発足)	特徴・古民家にてカフェを実施。ボランティアで運営してきた。 ・当初は高次脳機能障がい者が対象だったが、次第にひきこもり当事者が増えてきた。地域支援活動センターのスタッフも来所している。・当事者が来て、当事者が考える運営を心がけている。・当事者が自らの諸問題を克服しながら関わっていく姿勢を尊重する。 実施成果まず、行ける場所、居られる場所の提供をした。その上でコミュニケーション能力の取り戻す環境づくり。決まった時間に起床し、居場所に行こうとする意欲の継続。集団の中に入って行こうという、前向きな姿勢がみられた。体を動かし汗をかく体験を通して、園芸に興味が出てきた参加者も出てきた。スポーツなどの体を動かしての交流は、対話だけの交流が苦手な参加者にとっての、最初に人と繋がれるきっかけになった。
13	**大阪虹の会** 2007 年 6 月～ （2005 年 6 月発足）	特徴・喫茶店やお弁当の販売を開始した（親２～３人がボランティアに来てくれる）・外の居場所活動として農園栽培を実施。いちごやいちじくを栽培している。・活動を通じて元気な親が増えてきた。 実施成果当事者の個性や特技が発揮できるように居場所活動のメニューを豊富化。手づくり教室（モビール製作、万華鏡製作、押し絵、クリスマスカード制作、アクリルたわし製作）や当事者の若者が講師を勤めた絵画教室、パソコン教室、そして料理教室や昼食会、農園活動と産直野菜朝市、若者の集いやフリータイムの場などを提供しました。当事者の若者がパソコン教室や絵画教室、ピザランチなどで講師やシェフをつとめ、特技を発揮し

		た。その成果を周囲が繰り返し評価していった。それが本人の自信へとつながった。秋の収穫祭（１０月）は、恒例行事として、家族とともに多数の若者当事者の参加があった。当事者、家族、支援者がそれぞれ協力して農作業をし、自ら収穫した野菜などでバーベキューをみんなで一緒になって楽しんだ。準備する人、バーベキューを焼く人、食べる人とそれぞれ役割を交代しながら経験し、協力し合う中で、自然と会話も弾んでいた。
14	**広島もみじの会※** 2015 年 8 月～ （2002 年 1 月発足）	特徴・お寺で居場所を実施している。写経や座禅、和菓子制作など。 ・お寺の居場所にて「心の相談室」を開催。 ・耕作放棄地を借りて農作業を実施。 実施成果通常体験できないことを体験できる場を提供できた。体験前は不安に思っていたことを最後まで体験することにより自信をもって達成感を得ることができた。参加者間のコミュニケーションをとることが自然にでき、緊張を緩和することを体験できた。話だけではなく、手や体を使うことにより自然にコミュニケーションをとることができた。
15	**香川オリーブの会** 2008 年 4 月～ （2005 年 1 月発足）	特徴当事者主体の居場所 実施成果毎回、有能な支援員（市民活動センター嘱託員、元経験者、自助グループ代表等）を招くことができ、特に支援員の得意とする PC 教室はそれぞれに合った対応をしてもらえた。　・支援員が相談、訪問もされているので安心して任せることができた。　・回を重ねる毎に変化（積極性：仲間と話す、役割を担う、他の講演会、講習会に参加する等）が見えてきた。　・調理体験実習では親と一緒に参加できたことを喜んでくれた若者や、回数を重ねる毎に食材、金額、作り方などに関心を示すようになり、手際良く行動できるようになった。
16	**福岡楠の会** 2006 年 5 月～ （2001 年 4 月発足）	特徴・親の力を得て居場所を運営。・農園を実施。小豆や豆の栽培。豆類は保存がきくので。精神障害者の作業所と連携して、作物を購入してもらっている。・講演会などにも力を入れている。 実施成果①居場所第 3 空間は会員外の新しい若者の参加者があったこと、②農作業体験は若者たちに荒々しい自然の姿を体験してもらったこと、③パソコン講習会は若者たちが自分の親以外の大人たちに大変近く接することができたこと、④講演会３つはひきこもりの支援につながらない人たち、あまりよく知らなかったひきこもりのことについて、今までこのような機会に恵まれなかった人たちへ支援の必要性を理解する機会になったと思われる。
17	**沖縄** **てぃんさぐぬ花の会※** 2015 年 8 月～ （2013 年 12 月発足）	特徴・子若相談支援センターなどの関係機関から、有用な社会資源として会が認知されている。当事者とは文通などを通じて、交流を図っている。・OTS（親、てぃんさぐぬ、サポーター）というサポーターのグループをつくり活動をしていく。 実施成果できる限り外での活動を促し、沖縄の持つ悲しさや力強さ、今の幸せとこれまでの歴史を感じることをテーマに、仲間として活動しました。

＜居場所づくり活動成果（要旨）＞

1．安心感・意欲の高まり。

（安心できる、また来たい。ひきこもり状態から一歩外に出る意欲の醸成）

2．他者との関係づくり、コミュニケーションの促進、他者への思いやりの醸成。

3、人との交流、集団への参加、仲間づくりにつながった。

（対話以外での交流の場の提供により集団の中に入って行けた）

4．自己表現、自己発見の場となった。

5．継続的な居場所参加と共に、生活リズムを立て直しにつながった。

6．居場所＝インフォーマルな社会資源としての周知と、社会的理解の促進へ。

（支援に抵抗のある若者にも、気兼ねなく来てもらえる相談場所として）

7．「体験」を通した「関心」と「行動」力の高まり

・本人が関心を持って取り組めることが見つかった。
・当事者が講師へ。周囲の評価や承認が自信へとつながった。
・役割を持ち、周囲と協力して楽しみながら、成し遂げる。達成感と楽しみの共有。

8．勉強会や就労準備の機会、情報交換の機会を提供し、次のステップへ一歩踏み出すきっかけ作りとなった。

9．居場所の情報提供により、居場所以外でも日常生活の動きがあった。

10．回を重ねる毎の変化が見えてきた。

（積極性：仲間と話す、役割を担う、他の講演会、講習会に参加する等）

11.自分たちにできることは？居場所をもっと良くするために、自分たち（当事者自身）も居場所づくりに参加したい（家族会の活性化、自助への意欲の醸成）

どのような居場所活動によって、上記の成果を生み出せたのか、次ページから各支部の活動報告を掲載する。

東北ブロック（青森支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 青森県　青森さくらの会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">平成 27 年 8 月～12 月リンクモア平安閣市民ホール
平成 28 年 1 月～しあわせプラザ</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">98 名（家族 87 名　当事者 11 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報にて会員向けに周知</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／体験者の話を聞く</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【8 月の参加者数：当事者：3 名　家族：13 名】

＜当事者の親御さんの話を聞く＞
居場所の開始時間 30 分前に当事者が来て、自発的に会場設営をしてくれた。親御さんの話を聞いて、親は私たちのことを、どのように受け止めているのかがわかったが、やはり「いつになったら自立するのか?」という言葉にとても傷ついた。当事者を無理に居場所に連れてきたことで、当事者が負担に感じたらしく、ひきこもったケースがあった。本人に無理をさせない配慮が大切である。居場所=働き場所を見つけてほしいという感想があったが、親の焦りと不安が感じられた。親の継続的な学びが必要であると思われる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／体験者の話を聞く</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【9 月の参加者数:当事者：1 名　家族：17 名】

＜ひきこもり体験者の話を聞く＞
これまで居場所で体験者の話を聞くことはなかったが、下山さんの話を聞いて共感するものがとても多かった。親御さんにもっと体験者の話を聞いてもらいたいと思った。
（参加した親御さんの感想）
子どものこころに寄り添っていかなければならないことがわかった。親の価値観を押し付けることは良くないですね。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【10 月の参加者数：当事者：1 名　家族：12 名　支援者：2 名】

＜ひきこもりからの回復を学ぶ＞
10 月は、ひきこもりからの回復「新・若者の 10 のステップ」を読み合わせし、意見交換をしました。当事者からの率直な感想を頂き、この 10 のステップを、これからも居場所で当事者と定期的に読み合わせして感想を述べあい、交流したいと感想を述べてくれた。当事者の参加数が少なく、周知をもう少し工夫しなければならないと思った。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>リラクゼーション講座</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【11 月の参加者数：当事者 0 名、親 22 名】

＜ラフターヨガでこころをリラックスする＞
ラフターヨガをして、とてもこころが温かくなり、緊張がほぐれた。11 月は当事者の参加が見られなかった。周知が足りないと感じた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流/体験者の話しを聞く</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【12 月の参加者数：当事者：3 名　家族：17 名】

＜ひきこもり当事者の親御さんの話を聞く＞
居場所の開始時間 30 分前に当事者が来て、自発的に会場設営をしてくれた。当事者がアップルケーキを作ってきてくれた。ケーキを食べながら話を聞いて、その場が和んだ。
前回 9 月に引き続いて 2 回目、同じ苦労をしていることを知り、話し合うと気持ちが落ち着いてきた。1 月の居場所は、雪だるまを作りたいということになった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【1 月の参加者数：当事者：3 名　家族：6 名】

＜6 ヶ月の居場所を振り返り、これから居場所で何をしたいか話し合う＞
居場所の開始時間 30 分前に当事者が来て、自発的に会場設営をしてくれ、2 月以降も居場所づくりを継続したいと 1 人の当事者から要望があり、2 人の当事者も継続したいと賛同してくれた。
また、2 月以降の居場所は経験者・当事者主導でやりたいと前向きな発言もあった。後半は、しあわせプラザの近くの公園で雪だるまを作ろうということになりました。</td></tr>
<tr><td>開催の
模様</td><td colspan="3"> </td></tr>
</table>

実施 成果	**＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞** まず、安心して居られる場所、気軽に来られる雰囲気づくりを提供した。 その上で、居場所に来てよかったと思える環境、居場所に行こうとする意欲の継続。当事者自ら自発的に会場設営をしてくれるなど前向きな姿勢がみられ、居場所の運営は、当事者主導のもとに進めてみたいと新たな目標に向かう思いが強いと感じられた。
利用者 の感想	・みんなと一緒に悩み・苦しんでいることが共有でき、お互いの絆が深まってよかった。 ・月に１回の居場所に行くのが楽しみです。できれば、常設してほしい。 ・同じ境遇の人がアップルケーキを作ってきてくれ、場が和んで楽しかった。 ・いつも一人なので話し相手がいるのがうれしい。友達ができてよかった。
課題と 改善策	**＜今後の居場所継続に向けた課題＞** 6ヶ月間やってみて前半の３ヶ月は当事者が気軽に居場所に来たり、ケーキを作ってもってきてくれたりしてその場が和んだが次第に来なくなる当事者もいた。親御さんが複数名居場所に来ると気をつかっている様に感じられた。当事者に限定して居場所づくりをすることに心がけていたら居場所来る当事者も増えていたと思う。しかしながら、これからも（2月以降も）居場所を継続してほしいという要望もあり、継続することになった。今後の課題として情報発信のあり方を工夫する必要性を認識した。 **＜参加者が集まらなかった理由、人材の確保、居場所運営の困難さなど＞** ・居場所だけで終わらない、社会的自立へ向けての具体的な支援。 ・気を遣わず、意思表示を出来る環境づくり。その悩みや状況は一人だけじゃないという事実を伝える必要性。 ・居場所の必要性を強く感じているが、財政的支援が無いと継続は困難であるが、公的機関（福祉センターや市民センター）の活用によって居場所は継続できると思う。 ・居場所の周知が不十分であった。会報だけではなく、チラシなどの周知も必要と認識した。

北陸ブロック（長岡支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 長岡フェニックスの会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">ながおか心のクリニック</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">510 名（家族 0 名　当事者 510 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">ながおか心のクリニック院内の掲示。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／ＰＣ教室／学習支援</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【8 月の参加者数：当事者：78 名　家族：49】

居場所として語り場、雑談交流の活動と、学習支援、ＰＣ教室を実施している。雑談交流や語り場は一定数の利用者がいるが、学習支援、ＰＣ教室は利用者が少ない。ニーズの把握や居場所に慣れた方への動機づけなどを行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／ＰＣ教室／学習支援</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【9 月の参加者数:当事者：98 名　家族：57 名】

先月に引き続き居場所を継続して提供し、利用者数の延べ人数も先月を上回った。ＰＣ教室、学習支援が実施できた。一人でもいれば実施する意義はある。初めは 0 人であったがじっくり取り組んだ成果である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【10 月の参加者数：当事者：87 名　家族：43 名】

先月に引き続き居場所を継続して提供した。参加者も横ばいで安定している。ＰＣ教室の参加者も増えてきた。参加を継続するための工夫が PC 教室、学習支援メニューの課題である。
午後には居場所に慣れた方たちが公園でスポーツをおこなった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／ＰＣ教室／学習支援</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【11 月の参加者数：当事者：86 名　家族：43 名】

先月に引き続き居場所を継続して提供した。参加者は継続している方が多数である。一方、9 月と比べると漸減である。次のステップにつながった、居場所に慣れなかった、調子が悪くて来られないなどが考えられる。
雪国はで小春日和は貴重な晴れ間である。三角ベース野球を公園で行った。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="4"></td><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／ＰＣ教室／学習支援</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【12 月の参加者：当事者：87 名　家族：30 名】

先月に引き続き居場所を継続して提供した。参加者は先月から減少しているが、人数の多い水曜日が祝日と重なったためである。冬になり外で運動の代わりにトランプやＵＮＯなどカードゲームや将棋、オセロなどのボードゲームを行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／ＰＣ教室／学習支援</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【1 月の参加者：当事者：74 名　家族：39 名】

先月に引き続き居場所を継続して提供した。半年間、計画通り実施できた。冬になり大雪の影響により交通機関に影響がでて利用者が来られない状況があった。</td></tr>
<tr><td>開催の模様</td><td colspan="3">

（居場所、学習支援、PC 教室など）</td></tr>
<tr><td>実施成果</td><td colspan="3">＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞
居場所は雑談交流の場、学習支援、ＰＣ教室を提供した。居場所を継続していくことで生活リズムができた。自宅、自室以外でも参加できる安全、安心な場所を提供し、気持ちが楽になった。利用者は雑談交流を通じて楽しい時間を過ごすことができ、スポーツやゲームなどレクリエーションをして楽しんだ。スポーツは運動不足の解消になった。学習支援では自分の学びたいことを学び、自己表現できる場となり、ＰＣ教室ではＰＣ検定に挑戦し合格することができ、就労の準備につながった。</td></tr>
</table>

利用者の感想	同じ悩みを抱えている方々と話せて孤独感がやわらいだ。 自分自身の確認、自分がすべきこと、進むべき方向性が見えてくるようになった。 同じ悩みを抱えている人なので共感できて安心する。 乗り越えた経験談を聞けた。 周りに言えないことが言えた。
課題と改善策	**＜参加者が集まらなかった理由、人材の確保、居場所運営の困難さなど＞** ・ひきこもり当事者の居場所は男性が多くなり、女性の方は居場所に参加しづらいことがある。 →女子会を作る。しかし時間と場所、人材の確保が困難である。 ・居場所での人数が多くなると全体への配慮に欠け、対応が困難になる。とくに新しい方が参加したときなど。また居場所に参加したくない方や居場所で孤立している方への声かけが十分できていない。 →全体に配慮しながらまとめ役を行う能力の向上。

北陸ブロック（南加賀支部）における居場所事業

実施支部	KHJ 石川県　いまここ親の会		
会場	百笑の郷　でくのぼう		
人数	46 名（家族 84 名　当事者 45 名）		
広報	会員にメール、チラシで連絡。市役所、社協などにチラシ送付。図書館、地区会館などに配布。		
実施内容	8 月	メニュー	コミニュティカフェ、山野草野菜収穫、火遊び、相談会、こころのワークショップ
		内容	【8 月の参加者数：当事者：7 名　家族：14 名】 コミニティカフェを併設して行い、来やすい環境を作りました。来られた当事者、家族会の方々とで一緒に山野草をとりに行ったり、野菜の収穫などを一緒にしました。ひきこもり君たちが大好きな火遊びも楽しみました。（ホントにみんな大好きです） 図書コーナーも作り、ただ本を読んだり、外でボーっとする人もいてゆったりと一日を過ごす人もいます。決められたことをするより本人が家から一歩出てそれぞれの過ごし方をしたらいいかと思います。 8 月は 2 回の相談会とこころのＷＳも開催しました。

	9 月	メニュー	コミニュティカフェ、脱穀作業、稲刈り、相談会、こころのＷＳ
		内容	【9 月の参加者数:当事者：9 名　家族：16 名】 外で過ごすにはとてもいい季節になり、ウッドデッキやハンモックでゆったり過ごしくつろいでいました。カフェで食事するとき笑顔が出る人もいました。やはり美味しいものを食べると心が和みます。稲刈りと野菜の収穫もしました。当事者よりも家族の方が喜んでいたように思います。天気がいいとき外でカラダを動かすのはとてもいいと思いました。 先月に引き続き、相談とＷＳを行いました。
	10 月	メニュー	コミニティカフェ、お手当てサロン、相談会、こころのＷＳ
		内容	【10 月の参加者数：当事者：6 名　家族：5 名】 10 月より山の居場所から町の居場所に変わりました。(当初 11 月から変更の予定でしたが、寒さと虫の大量発生により変更)　　町に移動してからは来た人がくつろげられるようお手当てサロンを始めました。温熱療法やこんにゃく湿布などでカラダをケア。カラダが温まり、緩まると心もリラックスできることを改めて感じました。今月からボランティアでお話を聞いてくださるかたも来てよかったと思います。ただ、今まで来ていた人が急に来なくなりました。やはり自然の中がリラックスできることと、町の人が多いところがイヤと言われました。
実施内容	11 月	メニュー	コミニティカフェ、お手当てサロン、相談会、こころのＷＳ
		内容	【11 月の参加者数：当事者：2 名　家族：7 名】 参加者が少なくなりました。町だとどうしてもすることが限られており窮屈感があるようです。スタッフでどうしたら来てくれる人が増えるかを話し合いました。まず、居場所を知ってもらうため、ブログやフェイスブックで呼びかけ、チラシの配布を行いました。そして 12 月に親の会主催の講演会を行い、多くの人に来ていただき活動を知ってもらうことにしました。
	12 月	メニュー	コミニュティカフェ、お手当てサロン、餅つき、相談会
		内容	【12 月の参加者数：当事者：13 名　家族：21 名】 12 月初めに講演会を行い居場所作りのことを知らせたことで参加者が増えました。また、年末に餅つきをしましたがこれも多くの方が参加してくれ皆さん楽しんでくれました。イベント的にするのではなく定期的に来てくれる取り組みを考えたいと思います。

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【1 月の参加者数：当事者：8 名　家族：21 名】

先月から参加してくれた家族の方が毎回参加してくれるようになりました。居場所に来て元気になっていく姿を見てうれしく思いました。半年たってようやくという感じです。ただ、続けてくる当事者が少なかったのは反省です。</td></tr>
<tr><td>開催の模様</td><td colspan="3">火遊び

稲刈り

脱穀
 </td></tr>
<tr><td>実施成果</td><td colspan="3">安心して外に出られる場を作れた。そしていろんな体験ができた。ひきこもり状態から一歩外にでる意欲が出たことが良かった。自然の中でいろんな体験を通して、心地よさを感じていただけた。</td></tr>
<tr><td>利用者の感想</td><td colspan="3">・今のままの自分ではダメだと思っていたがそのままの自分を受け入れてくれたことが嬉しかった。
・気持ちのいい時間を過ごせた。カラダを動かす楽しさを感じた。ゆったりした空間の中で時間を忘れてくつろいだ。</td></tr>
<tr><td>課題と改善策</td><td colspan="3">＜参加者が集まらなかった理由、人材の確保、居場所運営の困難さなど＞
・自然の中のいい環境だが、行くのにはとても不便。交通手段が無い。親の力が必要。送迎も考える必要があり。
・体験から就労につなげるためのことを考えないといけない。
・いろんなメニューがあるが参加者によってやりたいことが違うのでそれぞれに担当スタッフが必要。
・居場所が必要な現状があるが、財政的な支援が無い限り継続は困難である。</td></tr>
</table>

北陸ブロック（福井県支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">福井県すいせんの会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">すいせんの会事務所</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">35 名（家族 24 名　当事者 11 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報にて会員向けに周知。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【10 月の参加者数：当事者 3 名　親 6 名】
《そば打ち体験》
家族会参加の親御さんでそば打ちを趣味とする方からそば打ちの手ほどきを教えていただいた。粉の配合、こねる伸ばす等一連の作業を全員がさせていただいた。出来た人が途中の人に教えるなど当事者同士の会話も生まれ良い企画であった。
(親御さんの感想)
皆で楽しめたので今後も続けたい。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>農作業体験・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【11 月の参加者数：当事者 2 名　親 2 名】
《里芋ほり》
ひきこもりほぼ脱出の当事者と家族会員の里芋畑へ芋掘りにでかけた。畑所有の当事者へ招かれた当事者が話しかけたく接近したが、ことば掛けできずにおにぎり弁当と収穫で別れる事となった。
（親御さんの感想）
家族会には親だけでなく当事者も参加していることを知らせたくて、他人とは話さない息子を引っ張り出したが、来月は出ないと言われ慌てすぎたと思う。現在は家庭訪問中です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>調理体験・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【12 月の参加者数：当事者 2 名　親 9 名】
《餅つき、皆で鍋囲み》
餅つき器でつき、取り出しからまるめる作業は当事者 2 名がしてくれた。熱いと言いながらも周りの大人たちが手水をおしえたりして、大根おろし、きな粉、ごまの餅が出来あがった。豚汁を皆で作り会話しながら食べた。
（親御さんの感想）
自分の子供もこのように外へ出てほしい。食べ物作りが目的ではない居場所も考えて欲しい。皆で一服としてのお茶時間はとても有効だが、各々したいことが違うのでどのように設定するかが今後の課題。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">実施
内容</td><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>ゲーム・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【1 月の参加者数：当事者 1 名　親 2 名】
《お正月あそび》
新年ということでお正月遊びをした。前日まで大雪であり参加が少ないと思ったが 3 名で福笑いとかるたに興じた。その後遅くまでぜんざいを食べて雑談。大勢でこの福笑いをしたらもっと楽しいねとの感想。
（親御さんの感想）
こたつに入り沢山の話も出来たし、少ない人数もまた良かった。こたつは心身ともに温まるので冬にはうってつけのアイテムだと思う。</td></tr>
<tr><td>開催の
模様</td><td colspan="3"> </td></tr>
<tr><td>実施
成果</td><td colspan="3">すいせんの会当事者は、外出全く無しの方も多く、当事者の参加者は限られていた。半ばひきこもり当事者は話す所がなかったが、ここに来るとホッとするので続けてほしいと言っている。</td></tr>
<tr><td>利用者
の感想</td><td colspan="3">若者が来たいと思う居場所を作って欲しいと言うが、具体的に、食べ物（調理）以外にしたいことが聞いても出てこない。</td></tr>
<tr><td>課題と
改善策</td><td colspan="3">ひきこもり当事者といっても、年齢幅、性別、興味の持ち方などそれぞれに相異なるそれぞれの事情がある。
年 1 回のイベントならば、お祭り気分のような企画や盛り上がりも可能であるが、継続して出席し、他人とも交わり、社会に出ていくための窓口になる所なので、気分転換で終わらないことを現在考慮中である。
事務所内で 3 つのブースを作り、各々異なったことに取り組んでもらい、途中お茶時間をとり全員で集まり、雑談情報交換の場としたいと思う。</td></tr>
</table>

関東ブロック（東東京支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 東東京支部（NPO 法人楽の会リーラ）</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">楽の会リーラ事務所</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">399 名（家族 126 名　　当事者 273 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報、HP 等にて会員、関係者、一般向けに周知。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>ＰＣ教室、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>①ＰＣの活用によるパンフレット作り等を通じて社会体験を支援した。②スタッフ、家族との交流を深めた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>ＰＣ教室、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>①居場所トークで、当事者の対話集会を実施した。②当事者へパンフレット作成の役割を与えた。③パンフレット等の封入、印刷、等の手伝いを依頼した。当事者参加者 0 の居場所が数回あった。会員への周知がまだまだ不十分であることと、居場所担当スタッフを会員へ紹介できないこと等によるものと思われる。今後は、ほっとできる居場所、仲間ができる居場所であることを、もっと周知するようしたい。ＨＰ掲載の工夫、電話による案内、チラシ配布の強化等。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>レジリエンス講座、労働法講座、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>＜参加者に何を提供できましたか？＞
①10 月 7 日：職業講話（パン屋の話：パン作り、苦労話、パン屋の将来等）を 1 時間 30 分実施した。当事者等 9 名が参加し、興味を持った参加者もいた。②10 月 4 日：居場所スタッフ、ピアサポ会議：11 月以降の居場所講座計画検討。介護の話、コミュニティ食堂の開設の話、鉄道会社の話等がほぼ決まった。③10 月 16 時：レジリエンス講座：当事者 5 名、家族 2 名参加で、期待以上に当事者の関心が高かった。特にポジティブ志向（自己肯定感の向上、職場における人間関係づくりに役立つこと、自身の強みの認識のためのワークは参加者全員参加のワークであり、自身を見つめることと、交流を深めることに多いに効果的であった。当事者より参加した講座について、今後継続しての開設要望が大変強かった。④10 月 26 日：労働基準法講座（当事者 5 名参加）、ポケット労働法をテキストとして東京都労働相談情報センターの職員より解説及び質疑応答があり、実際の具体例についての質疑応答が活発にあった。今後就労に関連して当職員に相談することが可能となった。⑤10 月 30 日：職業講話（内職と起業等）：当事者 5 名（他）参加あり、起業及び内職を受託するまでの実際の大変さを実感した様子。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>職業講話、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>①11 月 6 日の居場所ではゲーム交流をした。(花札等)、②職業講話：コミュニティ食堂の話を聞いた。③鉄道会社の車掌及び事務職の話を聞いた。④25 日の居場所では、アートが得意な女性当事者にカフェの看板をデザインしてもらうこととなった。⑤職業講話：介護の話：正社員として介護現場で働く方からどのようにして就労したか、介護の大変さ、継続のモチベ―ション等について話して頂いた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>職業講話、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>①職業講話（介護現場の話）：当事者 1 名参加で介護の話が 2 回目プロフラムであったため、新規性にかけていたためと、まだまだ PR 不足が原因と思われた。23 日（就労状況等の説明と相談会）：当事者 5 名出席で盛況であった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>職業講話、居場所交流、他</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>①1 月 11 日：就活関連ミニセミナー開催した。家族、当事者ともに関心が高く、特に具体的な就活方法の説明で、今後一歩踏み出すのに効果的であった。②1 月 16 日職業講話：参加者より早速楽の会リーラの印刷作業の手伝いについて申し込みがあるなど、かなりインパクトが高かった。③1 月 18 日フリーランスの生き方：サラリーマンよりフリーな立場で、自分に合った（生き方に）仕事に従事している方の発表に、共鳴する当事者が多くいた。彼らにこれからの生き方の 1 例として、多くのヒントをもらった様子であった。④全日空の話；ＣＡと当事者との活発な交流の場ともなり、華やかな職場であるが大変な仕事であることが分かり、生き方のよい参考例となった。人生を存分に楽しんでいることも良く伝わり、参加者にとっても有意義な時間となったと思われる。</td></tr>
<tr><td>開催の
模様</td><td colspan="3"> </td></tr>
<tr><td>実施
成果</td><td colspan="3">講座、職業講話、等を提供し一歩踏み出すきっかけ作りになった。ＰＣ関連では具体的にチラシ、パンフレット等を作成し、活用している。目に見える成果と役だち感及び達成感を得ることに成果を上げることが出来た。</td></tr>
</table>

利用者の感想	各種講座が好評で、特にレジリエンス講座では考え方を変えることに感心が高かった。今後も全プログラムについての開催希望があった。一方職業講話も好評で参加者も多く、有意義であったとの感想が寄せられた。
課題と改善策	課題：参加者の集まりが想定以上に少なかった。（講座等開催以外の通常の居場所） 改善策：グループ相談会等で具体的な対策の結果としての、出口としての居場所の周知徹底が、更に必要と思われた。より魅力的な居場所プログラムの開発を検討する必要がある。特にレクレーション等の遊び、野外活動、等（都心という立地の中で工夫が必要）。

関東ブロック（千葉支部）における居場所事業

実施支部	NPO 法人　KHJ 千葉県　なの花会		
会場	千葉市ハーモニープラザ３F 活動室		
人数	326 名（家族 50 名　　当事者 276 名）		
広報	会員宛月報、なの花会ホームページなどにより周知。		
実施内容	9 月	メニュー	スポーツ交流　語り場・雑談交流　ゲーム交流
		内容	[9 月の参加者数：当事者；44 名、家族；2 名] スポーツ交流はハーモニープラザの屋外スポーツ広場(テニスコート）に当事者：6 名、スタッフ:3 名の参加で行った。日常的に身体を動かさない若者からの希望は多い。しかし、他の団体との競合で、月一度の頻度にならざるを得ないのが残念である。ゲームはオセロやトランプに興じるグループが多い。
	10 月	メニュー	スポーツ交流　語り場・雑談交流　ゲーム交流
		内容	[10 月の参加者数：当事者:59 名、家族:4 名] 三々五々に集まり来る若者たちであるが、先に来ていた若者の着席（４テーブル）状況により自分の居場所を決め、雑談や近況報告などからトランプや UNO などに移行し、親睦を深めることが多い。スタッフも参加し交流を図っている。今月は珍しく二度のテニスコート予約が取れていたが、16 日は雨のため残念ながらできなかった。
	11 月	メニュー	スポーツ交流　語り場・雑談交流　ゲーム交流
		内容	[11 月の参加者数：当事者；44 名、家族;7 名] 週に一度の集会を楽しみにしている若者もいることから、居場所の存在価値を強く感じながら若者に寄り添う姿勢を守っている。しかし居場所に来られる若者は比較的に体調等が良好な者であることから、今回参加していない若者の動向が気になることが多い。

<table>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流　ゲーム交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［12 月の参加者数：当事者；44 名、家族；5 名］
12/18 は慣例のクリスマスパーティであったが,例年よりも若者の参加者数は 16 名と少なめであった。親やスタッフを加えても総計 23 名であったが、楽しくひとときを過ごすことができた。参加者は 500 円以内のプレゼント品を持ち寄り、後半に行われるビンゴゲームの勝者により好きなものを選び取る仕組みである。包装紙(華麗さ)により選ぶ者、大きさ等で選ぶ者、直感で選ぶ者、それぞれの思いでプレゼント品を手にし、即座に中身を確かめる者、楽しみを後にする者、仲間の“ビンゴ”の掛け声に喚声を上げながら、童心にかえって楽しんでいたようである。
このパーティでは,あらかじめ会場設定グループ、買い物グループ、ケーキ作リグループ、パーティ進行(ゲーム進行を含む)グループなどの担当者を決めてあり、パーティ開始は 13:00 であるが、10:00 頃に集まりだして準備等に取り掛かった。毎年使い回しをしている飾リテープを張り巡らせてパーティ会場を飾り立て、中央にテーブルを、回りには椅子を並べて、見る見るうちにパーティ会場が出来上がって行った。買い物グループによるケンタッキーチキン、寿司の盛り合わせ、大判ピザ、ケーキ作リグループによるデコレーションケーキ等々、テーブルいっぱいの品々に満足感を充した様子だった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>スポーツ交流　語り場・雑談交流　ゲーム交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［1 月の参加者数：当事者；34 名、家族；3 名］
8 日の新年初めは例年に比べて参加者は少なめであったが、恒例となっている千葉寺への初詣を行った。銀杏の大木に迎えられ、若者それぞれが年頭の祈願をしている様子に、祈願成就を願った。15 日は二か月ぶりのテニス日であったこともあり、体力増進・ストレス解消に役立ったと思う。久しぶりの再会に語り場も盛り上がっていた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流　ゲーム交流　自然散策</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［2 月の参加者数：当事者；44 名、家族；2 名］
19 日は隣接する青葉の森公園に梅の花鑑賞に出掛けた。微風の中、白梅、紅梅、桃色の梅花から漂う微かな香りに初春を感じられた。春の足音は直ぐ近くまで来ていることを実感した。</td></tr>
</table>

開催の模様	
実施成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ 居場所に来る若者の様相は、なの花会創設以来変化はないと思うが、新メンバーの参加があっても、仲間として暖かく迎え入れようとする思いやりは、スポーツやゲーム、雑談などを通してより強く醸成されたと思う。
利用者の感想	居場所にはいつ来ても(久し振りであっても)歓迎され、仲間に加えてもらい、心の負担が軽減され、有意義な時間を過ごすことができ、次回もぜひ参加しようと思う。
課題と改善策	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ 半年から 1 年振りに居場所に参加する若者も居るが、入会直後に居場所に来なくなる若者も居る。いずれにしても、当初は居場所に通いたいとの思いで入会したのだから、長期的に居場所に参加していない若者の動静が気になる所である。せっかく居場所の扉を開けたのだから、その後のフォローアップ策を考えることも必要かと思う。居場所スタッフが手分けして、近況を把握するための手紙（はがき）や電話はどうであろうか。当事者を懸念している者の存在を知らせることも必要と思われる。これからの日本を担っていく若者の力になることの難しさを痛感している。 ＜居場所プログラムの検討＞ テーブル毎にテーマを設け、関心のあるテーブルに着席しての対話を考えている。例えば、就活・アルバイト関連テーブル、趣味・興味関連テーブル、ゲーム関連テーブル、会話・雑談テーブルなど(1 テーブル当たり 4・5 人)。それぞれのテーブルには進行役を設け、スタッフが支援する体制が考えられる。今後の日本を担って行くことになる、若者の自己主張や自立支援に貢献できる居場所づくりを、地域のサポートステーションや諸支援センターなどとの連携を図りながらの未来思考的取り組みを考える時期かも知れない。潜在的ひきこもりの若者の実数は判らないが、地域の民生委員や地域保健所等との連携を図り、居場所に参加できる体制づくりを、行政との強い協力体制の下に推し進めることも必要不可欠なことと実感している。ピアサポーター制度の実質的推進が待たれるところである。 ＜スタッフの役割として＞ その日の体調やアルバイトの都合など、それぞれの理由で来れたり来れなかったりはあるが、居場所に来ての仲間との交流に魅力を感じて参加している若者は多いはずである。その若者たちに居心地の良い居場所提供が我々スタッフの役割と思われ、参加する若者の表情や和やかに交流を図っている様子に安堵することが多い。

関東ブロック（千葉支部）における居場所事業（PC 講座）

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 千葉県　なの花会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">ハーモニープラザ 3F 活動室・スタジオ　及びに　なの花会事務所（9 月～11 月の第 4 週のパソコン講座）</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">居場所参加人数（パソコン講座を含む）を参照</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報（「なの花会」、毎月発行）にて会員向けに周知。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>Ｅｘｃｅｌの基礎第 1 章&2 章の講習</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［参加者数：当事者；8 名］
Ｅｘｃｅｌの基礎（ＦＯＭ出版）の第 1 章と 2 章を外部講師により 10：00～15:00 の 4 時間講習</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>Ｅｘｃｅｌの基礎第 3 章＆第 4 章の講習並びに第 1 章と 2 章の補講</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［参加者数：当事者；10 名］
第 1 週～3 週の金曜日 12:00～16:00　2 名のアルバイトによる個人指導で前月の講習分を補習
第 4 金曜日 10:00～15:00　Ｅｘｃｅｌの基礎の第 3 章＆第 4 を外部講師による講習</td></tr>
<tr><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>Ｅｘｃｅｌの基礎第 5 章＆第 6 章の講習並びに第 3 章と 4 章の補講</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［参加者数：当事者；8 名］
第 1 週＆3 週の金曜日 12:00～16:00　2 名のアルバイトによる個人指導で前月の講習分を補習。
第 4 金曜日 13:00～17:00　Excel の基礎の第 5 章＆第 6 章を外部講師による講習
パソコン講座も 3 か月が経過し、各人の体調により 4 種類の受講形態に分類される。a.　4 時間の講座に参加可能な人（3 人）、b.　体調に合わせ居場所で個別に 1～2 時間の補講を受ける人（2 人）、c.人がいると気が散って学習が出来ず自宅で自習し、分からない所を個別に補講を受ける人（1 人）、ｄ.受講してみたら全てマスターしており受講が必要でない人（1 人）に分類される。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">実施
内容</td><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>Ｅｘｃｅｌの基礎第 7 章の講習並びに第 5 章と 6 章の補講</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［参加者数：当事者；5 名］
第 1 週～3 週の金曜日 12:00～16:00　2 名のアルバイトによる個人指導で前月の講習分を補習
第 4 金曜日 13:00～17:00　Ｅｘｃｅｌの基礎の第 7 章を外部講師による講習</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>Ｅｘｃｅｌの基礎第 8 章の講習、第 7 章の補講</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>［参加者数：当事者；5 名］</td></tr>
</table>

			第 1&2 週の金曜日 12:00～16:00　2 名のアルバイトによる個人指導で前月の講習分を補習 第 4 金曜日 13:00～17:00　Ｅｘｃｅｌの基礎の第 8 章を外部講師による講習
	2 月	メニュー	Ｅｘｃｅｌの基礎第 9 章&まとめの講習、第 8&9 章とまとめの補講、修了式
		内容	［参加者数：当事者；9 名］ 第 1 週～3 週の金曜日 12:00～16:00　2 名のアルバイトによる第 8&9 章とまとめの個人指導 第 4 金曜日 13:00～17:00　Ｅｘｃｅｌの基礎の第 9 章およびまとめの外部講師による講習 修了式
開催の模様	 PC 講座修了証書の授与		 パソコン教室
実施成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ Ｅｘｃｅｌの基礎のテキストを使った講習と練習問題を自力で解くことを通して、パソコンを使った就活への意欲が芽生えてきた。		
利用者の感想	Ｅｘｃｅｌでのデータベースの利用が理解できた。 会社などの情報の大量なデータを処理する時に簡単にまとめるやり方が分かった。		
課題と改善策	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ 理解力にバラツキがあり、進捗が遅いと感じる人と情報量が多く大変であった人がおり、進捗の管理が難しかった。改善策としては大変な人は補講でカバーした。 第 1～3 金曜日は居場所のメンバーが常に参加し、時々パソコンが不足するケースがあった。時間をずらしての個人指導で不足するパソコンのカバーをした。 4 月からパソコン講座の再開を計画しているが、2 月の最終回の講座にも新人 3 人が参加する等若者のパソコン講座への参加意欲が高く、今後パソコンの不足が懸念される。補助金等の申請を検討しているが当面のニーズに対応できないケースが予想される。		

東海ブロック（愛知支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 愛知県　NPO 法人なでしこの会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">フレンドシップなでしこ　阿久比居場所（田中邸）</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">420 名（家族 227 名　　当事者 193 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報とブログにて会員と非会員に向けて広報。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>＜居場所にてくつろぐ＞</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>安心・安全な居場所にて、支援者スタッフと当事者とでカードゲームなどをしながらゆっくり楽しいひと時を過ごしてもらう。同じ悩みを抱えている人同士の少人数で空間を共有してもらい、人間関係を体験する場と位置付けてプログラムを行いました。来訪しても場に馴染めない当事者の方には、スタッフと個別で世間話を交えながら簡単な作業の手伝いをしてもらい、話さなくても作業を通じて同じ時間を共有し、個別対応でのお互いに関係を作っていく作業をおこないました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>＜居場所スタッフ交流・居場所提供＞</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>新たに加わったアルバイトスタッフの元当事者の方たちのケアを目的に、ゆっくり寛ぎながら話し合いを行い、今後の実施内容などについて話し合いの場を設けました。居場所に来訪された参加者の方とも雑談をし、人と触れ合う感覚を知ってもらいました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>＜パソコン教室①＞</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>ＷｏｒｄやＥｘｃｅｌでの基本的なパソコン操作や入力作業を行いました。また、ＨＴＭＬ＆ＣＳＳといった当事者から興味のあるジャンルについての問い合わせに対応。後に社会へ参加していく過程の中で「スキルを身に着けたい」との要望から資格習得のノウハウをアドバイスしたりしました。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>＜居場所にて料理教室＞</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>阿久比（田中邸）にて当事者中心に、今後自立した生活を送る際に必要な生活技術の一端を目的に料理を行い、当日参加した当事者やご両親に振る舞います。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>＜パソコン教室②＞</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>以前から参加している方以外にも、新たに参加される方など、きっかけは様々でした。基本的に一つの課題に対して皆が一緒に教室形式で行いますが、集団での講習が苦手な方には個別講習も行いました。　また 12 月ということで年賀状やクリスマスカード制作などにも取り組み、これまで関わることから遠ざかっていた内容に一喜一憂しながら、パソコン教室を行いました。</td></tr>
</table>

	1月	メニュー	＜会報発送作業＞
		内容	月一度、当会が発行している会報の郵送作業を行いました。封筒に入れる作業をしながら、気持ちに余裕ある方は会報記事に目を通したりしています。作業中には効率よく作業を進めるように参加した人同士で話し合いをしたり、教え合ったり。世間話を交えながら作業を進めています。
開催の模様			
実施成果	同じような悩みを持つ当事者同士が集う場で、気兼ねなく人間関係を再構築することが出来るようになった。元当事者スタッフには、一利用者立場でなく支援（お世話）をすることの意味を知ってもらう機会になった。少人数ながらも人見知りな部分も大きく、数回の参加後に来られなくなるケースもありました。		
利用者の感想	興味は持っているがなかなか人に聞く事が出来ない、または街のパソコン教室に通えないといったことで躊躇していた当事者へのハードルを下げることで参加しやすくなった。		
課題と改善策	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ ひきこもり当事者が抱える問題は多様であるため居場所で提供できるプログラムには限界があるし人員も不足していると考えられる。又、当事者が居場所へ来訪される際には、「居場所がどんな場所であるか？」の広報の仕方も考えなくてはならないし、ＮＰＯ団体で行っているので団体職員・会員の協力も不可欠である。今後は可能な限り当事者や元当事者からの声を拾い居場所事業の内容に生かしていきたい。		

東海ブロック（名古屋支部）における居場所事業

実施支部	NPO 法人 オレンジの会		
会場	名古屋駅西サンサロ＊サロン		
人数	59 名　（当事者 56 名、家族 3 名）		
広報	家族会向け通信、ブログ、居場所世話人に周知。		
実施内容		メニュー	雑談・個別相談・情報提供
	9 月	内容	居場所として利用をしているサンサロ＊サロンが、曜日ごとに自助会

			を開催しているため、他の会に参加している方の参加があり、どんなことをしているか、どんな人が来ているかの情報交換を行った。比較的静かに過ごすことを希望されている方が多かったため、雰囲気を大事に雑談を主として開催した。 週に1回、いつ来てもいつ帰っても良いという居場所があることで、外出するきっかけになりそう…という声もあがった。
	10月	メニュー	雑談・個別相談・情報提供
		内容	前月同様、雑談等で過ごすことが多かった。9 月から来ている方が、居場所に定着。多い日で名古屋市サテライト事業（無就業者支援）に紹介したケースが1件あり。障害者年金受給についての相談ケースあり。
	11月	メニュー	雑談・個別相談・情報提供
		内容	3ヶ月目に入り、利用する方の顔ぶれもだいぶ安定し、また自助会に顔を出している方々の繋がりで初めて参加するという方もチラホラといました。 高卒認定資格の取得や、進学についての情報交換をしました。
実施内容	12月	メニュー	雑談・個別相談・情報提供
		内容	ひきこもりに関するイベント・セミナー「地域の居場所づくりに向けて」を開催（参加者：85 名）。※チラシ添付。また、居場所で情報交換をしました。福祉サービス地域活動支援センターや新しく開所する地域の作業所の実際の様子についての話をしました。継続して、障害年金申請の困りごとについての相談もあり、資料を見ながら説明しました。
	1月	メニュー	雑談・個別相談・情報提供
		内容	名古屋市仕事・暮らし自立サポートセンター大曽根の職員が見学にいらっしゃいました。地域の資源として、制約なく利用できる場所を探していて、当居場所活動を紹介したいという当事者の方を繋げたい、というお話でした。毎週やっている居場所として社会的認知も広まりつつあります。 名古屋市仕事・暮らし自立サポートセンター大曽根の職員が見学にいらっしゃいました。職員の方は地域の資源として、制約なく利用できる場所を探していました。また、当居場所活動を紹介いただける当事者の方から話をききたいということでした。毎週やっている居場所として社会的認知も広まりつつあります。

<table>
<tr><td></td><td>開催の模様</td><td> </td></tr>
<tr><td>実施
成果</td><td colspan="2">利用登録や利用のための条件がなく、誰でも参加できる居場所として、制度の狭間で居場所のない当事者が安心して利用できていた。また、どこに相談に行けば良いか分からない、相談自体に抵抗があるといった方に対し、よろず相談（生活・就労・家族・人間関係など）を行い、一人で悩んでいた方の気持ちの整理やどこに相談に行けばよいかの繋ぎの役割を担うことができた。支援を受けることに抵抗を感じている当事者が多く、情報交換を行うことでインフォーマルな社会資源があることを周知することができた。</td></tr>
<tr><td>利用者
の感想</td><td colspan="2">・あれこれ指示的に言われたり、決まったプログラムがないので気軽に参加できた。
・40 代なので行政の支援が受けられなかったり、世代特有の悩みを話せる人がいなかったが、少し話が出来て良かった。
・参加に義務感がないことで、逆に楽な気持ちで居場所に行こうかな、という気持ちになった。・顔見知りの人がいて、週 1 回会うという良いリズムができた。
・色々な居場所・自助会に参加している人たちの話を聞くことが出来た</td></tr>
<tr><td>課題と
改善策

※12 月
のイベン
トチラシ
添付</td><td colspan="2">・集まる人数が 10 人以下だったので、世話人 1 名で対応していたが、参加者が多いともう少し手が必要かと感じることがあった。
・障害年金に関する質問を受けた時、専門機関（年金事務所）へすぐに付添ができればよかったが、世話人不在になるため出られなかった。必要機関と連携が必要。
・静かな雰囲気を好む方が多かったが、活発な人が参加した場合や、年齢層が極端に離れた場合、グループを分けて開催するのも今後あっても良いのでは。
・福祉サービスを利用者の余暇時間として訪れる方が多かった。
・就労支援を始めた人に対し、居場所としてどういうサポートができるのか不明確になりがちだった。 ・他の自助会との交流会を今後増やしていく必要。

</td></tr>
</table>

東海ブロック（三重支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 三重県　みえオレンジの会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">（毎月）アスト津 3F 県民交流センター　　（奇数月）四日市市文化会館会議室</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">164 名　（家族 158 名、当事者 6 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報にて会員向けに周知。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【8 月の参加者数：当事者：1 名　家族：27 名　支援者 5 名】
＜8/2 家族会・当事者居場所＞
1. グループ分け（当事者の年齢別グループ）
2. 自己紹介グループワーク
3. グループワーク：　当事者も参加
〇親や家族が取組むキーワード（なでしこ伊藤進氏資料）
・テーマ毎にひとりが読み合わせ：　経験等を話し合い
4. 今月の個人宣言
＜8/16 役員会＞居場所活動について</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流/ 受付の協力</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【9 月の参加者数:当事者：2 名　家族：46 名　支援者：15 名】
＜9/6 四日市相談会・当事者居場所＞
〇（名古屋）オレンジ 鈴木美登里氏による個人相談会
〇中垣内正和先生の「新親の 10 ステップ」を活用してグループワーク
＜9/13 家族会・当事者居場所＞
1. グループ分け（当事者の年齢別グループ）
2. 自己紹介グループワーク
3. 居場所の必要性：(名古屋）オレンジ　山田真理子氏講演
4. トークセッション：　元ひきこもり児玉君のひきこもり経験</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流/ ＤＶＤ；宮崎アニメを見る</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【10 月の参加者数：当事者：1 名　家族：32 名　支援者：13 名】
＜10/4 家族会・当事者居場所＞
1. パネルディスカッション：　過保護・過干渉と自立/ 居場所
＜パネラー＞山田真理子氏、左近ｻﾎﾟｰﾀｰ、堀部（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ）
＊知らず知らずやっている過干渉事例等パネラーから引き出した。また、居場所の必要性を事例を元に語ってもらった。
2. 居場所の必要性、管理方法等のセミナー（左近サポーター）
3. 今月の活動宣言（個人報告）
＜相談会・当事者居場所＞①10/11 ②10/17 ③10/25</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流/ ＤＶＤ；宮崎アニメを見る</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【11 月の参加者数：当事者 1 名、家族 23 名、支援者 10 名】
＜11/1 家族会・当事者居場所＞
1. パネルディスカッション：（中垣内正和先生）新親の 10 スップ
9 月の宇奈月研修参加者によるパネルディスカッション
2. 居場所アンケートとグループワーク
・空き家を居場所にしても良いとの提案があった。
＜11/15＞四日市相談会・当事者居場所（当事者：受付の手伝い）
＜11/22 居場所候補地の現地確認会＞
役員で居場所候補地を確認：鈴鹿市駅から近い閑静な住宅街で適地</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>（名古屋）オレンジの居場所と作業所を見学</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【12 月の参加者数：当事者：0 名　家族：2 名　支援者 6 名】
＜12/16 役員会＞
翌年 3 月開設に向けて名古屋オレンジの居場所を見学、鈴木美登里さんの案内で大変参考になった。
最初からうまく行くはずが無いので兎に角スタートする事が大事という事がよくわかった。そして、諦めない事、歩き続ける事。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流/ ＤＶＤ；宮崎アニメを見る</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【1 月の参加者数：当事者：１名　家族：33 名　　支援者：18 名】
＜1/10 家族会・当事者居場所＞
〇当事者居場所：ＤＶＤ鑑賞：　アニメ/ おおかみ子供の雨と雪
〇家族会
－1. ひきこもり大学のＤＶＤ鑑賞（宮崎将太君の講演）とグループワーク
－2. Ｓ婦人と支部長の相談トークセッション：当事者の破壊行動
－3. この１ヶ月貴方は当事者の対応で何を変えますか：個人宣言
＜1/31 四日市相談会・当事者居場所＞
－1. （名古屋）オレンジ山田孝介氏の個人相談
－2. グループワーク：今一番困っている事</td></tr>
<tr><td>開催の
模様</td><td colspan="3">
</td></tr>
</table>

実施 成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ 1. 当事者で参加可能な方に家族会出席時の同行をお願いし、ＤＶＤ鑑賞や茶話会を実施。また、四日市相談会では受付をお願いし、茶話会を実施。 2. 11 月の家族会で「参加者に資源調査」を行い、居場所候補の空き家とホームページ開設の提案を受けた。これを期に居場所開設に向け活動開始し、3 月 2 日からの開設にこぎ付けた。 3. 居場所の目処がついた事で、一つの光を提案できた。役員にまとまりが出てきた。
利用者 の感想	・家族会併設の居場所に出られるようになってよかった。（当事者家族から） ・家族会に出るようになり当事者が少し明るくなった気がする、話ができるようになった。（家族：親） ・家族会に参加するようになった事を話したら、当事者が喜んだ。（家族：親）
課題と 改善策	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ ・これまで津駅前の県民交流センターを中心に活動してきたが、駅前は人が多すぎひきこもり君にはちょっと来づらい環境だった。このため鈴鹿に当事者居場所を開設する事にした。家賃、電気ガス、水道、駐車場料そして居場所管理のバイト料をどう維持していくか？まずお金の問題です。 ・ついで、ひきこもり君をどうやって居場所までつれてくるか？　家族会で話していると　とても家族の勧めで自主的に来るとは思えない。訪問活動をどう管理してゆくか？ひきこもり君のピッキング課題。 ・居場所にひきこもり君が集まったとして、コミュニケーション能力の無い彼らをどう管理するか？ピアサポータの技術問題。 ＜居場所ピッキングの次のステップへ：　如何に光を照らし続けられるか＞ ・社会復帰は必ずしも就職ではない、しかし、ひきこもり君が本当に輝けられるように「生きがい」を見つけられるよう、支援する必要がある。 ・家族の老後の問題も切実である。これには、行政へのアプローチが必要です。 困窮者自立支援の枠の中で、一人一人の将来についての不安が自立を阻害しないよう支援したい。

東海ブロック（豊田支部）における居場所事業

実施支部	KHJ　愛知県　豊田・大地の会		
会場	豊田市青少年センター、豊田市畝部東町の農地、作業所、その他		
人数	390 名（家族 190 名　　当事者 200 名）		
広報	「大地の会だより」、「若者の会活動予定表」にて会員向けに周知。		
実施	8 月	メニュー	①ピアサポーターの月例例会開催（第 2. 4 水曜日）②屋外活動③終戦

内容			記念日を迎え映画鑑賞④月次料理会⑤ファーマーズマーケット参加⑥農作業⑦内職
		内容	①ピアサポーターの月例例会開催(第4水曜日)…お盆休みで第2水曜日開催は休止②屋外活動･･･夏の果物のブルーベリー刈りを実施、中山間部での農業を体験した。③終戦記念日を迎え映画鑑賞「日本の一番長い日」の鑑賞を試みました。終戦に向けて活躍した人達の思いをそれぞれに感じてもらった。④月次料理会…メニューはメンバーの提案で夏用のサンドイッチいろいろを楽しみました。⑤ファーマーズマーケットへの参加・・・メンバーの一人が豊田スタジアム・フロントまで、従来の車送迎ではなく、自分一人で駅から徒歩片道 25 分間の道のりにトライした。母親との依頼心からの克服にこうした場面を活用し、役立てました。母親の知恵です。⑥農作業…秋冬野菜の種蒔きをしました。⑦内職…真夏日の中、お盆休みを挟みましたが、10 日間稼働しました。若者のべ 35 人、家族会のべ 33 人参加
	9月	メニュー	①ピアサポーターの月例例会開催(第4水曜日)②屋外活動③ジョギング体験④月次料理会⑤農作業⑥内職
		内容	①ピアサポーターの月例例会開催(第2.4水曜日)②屋外活動…ぶどう狩り/毎年の恒例になりました。季節の果物の味覚体験。③11 月 15 日の豊田マラソン・ジョギング部門参加者に本コース体験として 2 回練習体験…ウォーキングの体験は実施しているが、メンバーと一緒に体を動かすジョギングをするのは若者は初めての体験。④月次料理会…ぶり大根、魚の調理は初めての体験⑤農業…冬野菜の種蒔きと苗植え、人参、大根、ほうれん草、赤カブ、水菜⑥内職…月間最高の 14 日間開催実施。若者のべ 40 人、家族会のべ 63 人参加。※ファーマーズ・マーケットは　野菜の端境期(…販売に合う野菜がない)で不参加。
	10月	メニュー	①ピアサポーターの月例会開催(第2.4水曜日)②屋外活動③カラオケ④月次料理会⑤ファーマーズマーケット参加⑥農作業⑦内職⑧ウォーキング⑨パソコン教室
		内容	①ピアサポーターの月例例会開催(第 2.4 水曜日)②屋外活動…BBQ 大会・オレンジの会との合同開催は恒例。若者 15 名、家族会 19 家族の参加交流体験が出来ました。③カラオケ…酒井代表にも参加頂き、若者の歌っている唄と歌唱スタイルを理解頂く。④月次料理会…キノコ炊き込みご飯／季節のきのこを調理する。⑤ファーマーズ・マーケット…豊田スタジアム・フロント／過去最高の売上を確保。⑥農業…冬野菜の生育作業・間引きとローゼルの収穫。ローゼルは新規に多量取引頂く取引先を得て売上も確保。⑥内職…9 日間

			稼働若者のべ 33 人家族会のべ 33 人参加⑧ウォーキング…鉄道会社企画に参加、若者の参加 2 名と少なくても秋の城下町の街中ウォーキングに参加。⑨パソコン教室の再開…月 2 回 6 回のコース設計／ＥｘｃｅｌⅡ具体的な作表を通しての技術習得／昨年開催のＷｏｒｄ、Ｅｘｃｅｌの初級編の継続講習
実施内容	11 月	メニュー	①ピアサポーターの月例例会開催(第 2.4 水曜日)②屋外活動③青空やさい市④月次料理会⑤ファーマーズマーケット参加⑥農作業⑦内職⑧パソコン教室
		内容	①ピアサポーターの月例例会開催(第 2.4 水曜日)②屋外活動…豊田マラソン・ジョギング部門に参加エントリー。若者３名家族会６名本戦参加。前週に本戦に備え練習走行実施③青空やさい市を企画実施…畑に隣接する住宅地の市民の方に向け、木曜日午後 3 時～4 時、月に 4 日間開催、若者が販売活動に参加。④月次料理会…クリスマスを翌月に控えてローストチキンを作る。⑤ファーマーズ・マーケット…豊田スタジアム・フロント⑥農業…小松菜、ほうれん草種蒔き⑦内職…9 日間稼働、若者のべ 31 人家族会のべ 24 人⑧パソコン教室…月 2 回・ＥｘｃｅｌⅡ
	12 月	メニュー	①ピアサポーターの月例例会開催(第４水曜日)②交流活動③月次料理会④ファーマーズマーケット⑤農作業⑥内職⑦パソコン教室⑧「むかしＭａｔｔｏの町があった」映画鑑賞福祉会館開催バザー協賛参加⑨年末師走の街中体感
		内容	①ピアサポーターの月例例会開催(第 2 水曜日。第 4 はクリスマス会と重なり休止)②交流活動…クリスマス会をオレンジの会とそらの会(ボラティア団体)の合同交流で恒例開催。③月次料理会はクリスマス会に合流開催のため休止④ファーマーズ・マーケット…開催場所が郊外の鞍ヶ池ハイウェイオアシスになったが、変更に追随して参加出来ました。⑤農作業…冬野菜の収穫を予定しましたが、降雨のため休止。⑥内職…7 日間稼働若者のべ 24 人、家族会のべ 24 人参加⑦パソコン教室…ＥｘｃｅｌⅡ　当初目論んだファーマーズ・マーケツト売上報告書の作表を完成出力出来ました。⑧福祉協議会主催、友好団体の福祉作業所「はばたき工房」、精神障がい家族会「あけぼの会」と協賛参加『むかしＭａｔｔｏの町があった』映画鑑賞のバザー開催に野菜販売で参加。若者、家族会で販売活動し協賛先からも喜ばれました。⑨年末の師走の夕刻の街中散策体験…従来避けてきた年末師走の夕刻の喧騒の街を家族会と共に散策体験、夕食も一緒にし、一家族では出来ない体験が出来ました。
	1 月	メニュー	①ピアサポーターの月例例会開催(第 4 水曜日)②新春行事の体感③月次料理会④ファーマーズマーケット⑤農作業⑥内職

		内容	①ピアサポーターの月例会開催(第 2.4 水曜日)②新春行事の体感…社会で行われている年始新春行事に取り残されないように行事を体感する事の大切さ②-1 初詣で…恒例の地元の挙母神社に参拝。若者 5 人の他、家族会と合わせ 24 人の参加②-2 新春映画鑑賞…若者に新春映画を体感させる企画②-3 餅つき体験…家庭でしなくなった餅つきを市営屋外総合センター施設で 12 名体感③月次料理会…チーズフォンデュ④ファーマーズ・マーケット…開催場所を鞍ヶ池ハイウェイオアシスを予定するも降雪影響で休止。⑤農作業…冬野菜のマーケット販売野菜収穫／開催休止であったが開催業者に全品販売補償を得た。⑥内職…6 日間稼働、若者のべ 24 人、家族会のべ 24 人参加。
開催の模様	パソコン教室風景 ファーマーズ・マーケットの参加 農作業終了後の一枚 豊田マラソン・ジョギング参加 師走の夕刻、駅前の街中散策体験 新春・初詣で体験
実施成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ ①月例ピアサポーターとの懇談…若者たちの安らぎの時間と空間で必須の活動です。②屋外活動…月例開催の決まっている、農作業、ファーマーズ・マーケット、料理会、内職の主軸 4 柱をきちっと開催することは若者たちの生活サイクルを保つために大切な基本と心得ています。◎その他に屋外活動として月ごとにアクセントの効いた行事を企画実施出来ました。①9 月.11 月…豊田マラソン・ジョギング部門に参加エントリートライしました。若者たちは大勢の中での参加に委縮を懸念したが、3 回の事前実線コース練習で大きな体験をすることができました。②パソコン教室の再開…昨年のＷｏｒｄ、Ｅｘｃｅｌの初級コースで終わっていたが、今回講師料予算の手当てを頂き作表技術の習得が出来たのは大きい。③内職…毎週月・火の 2 日を稼働出来、若者はのべ 192 人、家族会のべ 201 人の沢山の労働機会と対価を得る事が出来、かつ就労継続出来たのは大きい。

利用者の感想	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ ◎支えあいの意味するところ若者の近くで寄り添わなければ、若者たちの心のひだ、辛さ、苦しさ、楽しさ、喜び、得手、不得手は判らないです。◎若者からの 感想は充分に伺い知りえていないが、行事の運営に大人任せでなく、少しずつではあるが意見を述べてくる若者も増えてきた。また、行事の内容について予め照 会してくる若者が増えた。
課題と改善策	◎居場所の活動と運営は事柄によるが、家族会との合同運営を心掛けている。◎これは若者の同行者、支援者だけでは、若者の状況、状態の変容が理解出来ないからです。又、間近で他の若者の動向を見守るのは若者への向き合い方を学ぶ大切な機会◎今後の課題は　企画そのものの立案と実施運営に若者の関与を増やす事と心得ているが、これが障がいの中にいる若者には中々困難なところがありますが、その場面から新たなパワーの習得機会にもなる訳で意識するところです。◎若者の会スケジュール部会の立上げと実施…27 年 5 月から若者の会居場所運営の月次活動予定表の企画立案作業に大地の会の先輩・卒業生 2 名(1 名は月次のピアサポーターの役割の人物)に加わって頂き、若者の感性を発揮して頂きました。実際に彼らの意見で実施した事柄があります。他面立案の構成とか主旨説明の中で活動の意味合いを伝承しています。今後はこの作業部会に居場所参加者を加えていきたいと思っています。

東海ブロック（浜松支部）における居場所事業

実施支部	KHJ 静岡県ＮＰＯ法人てくてくの会		
会場	＊外の居場所＝てくてくファーム 中の居場所＝浜松市南区田尻町 208－2　山本悦久宅 10 畳洋間		
人数	366 名（家族 183 名　　当事者 183 名）		
広報	会報にて会員向けに、新聞にて一般向けに周知。		
実施内容	8 月	メニュー	当事者の居場所＝てくてくファーム （ノンバーバルなコミュニケーション）
		内容	野原の真ん中の寂しい場所の畑で作業したり昼寝したり、安心して外に居られるようにお休み処を当事者とピアサポーターで作った。こだわりのスーパーへ収穫した無農薬栽培の野菜を出荷。

<table>
<tr><td rowspan="4"></td><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>野菜栽培と出荷作業</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>・夏野菜が終わり秋～冬野菜の畑の準備を当事者に手紙で呼びかける。イベントに焼き芋として出す為さつま芋を栽培、9 月 21 日～22 日に当事者と親とで芋掘りをした。
 </td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>10 月 3 日、4 日とイベントに参加・不特定多数の人と出会う</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>・イベントに参加を手紙で呼びかける。当日は 4 人の当事者と 15 人の家族が参加。手づくり品や焼き芋を販売。バルーンアートのワークショップを開催。
 </td></tr>
<tr><td rowspan="4">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>秋・冬の畑の準備作業とイベントに参加
不特定多数の人と出会う</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>11 月 1 日、地域交流イベント、すずかけセントラル病院　「ふれあい祭」に参加。4 人の当事者と 8 人の家族が参加。無農薬野菜の販売とバルーンアートのワークショップ。
 </td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>外の居場所と、野菜の販売で、多数の人と出会う</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>すずかけセントラル病院内で、医師、看護師向けに無農薬栽培の野菜を販売。当事者 1 人と家族 3 人が参加。近隣のシニアクラブの方たちと協働販売。
 </td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>不特定多数の人と出会う</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>寒くなったのと、当事者が 1 人正社員に就職したので、参加者が減った。引き続きスーパーに無農薬野菜の出荷は続いていて、野菜の生産も引き続き行っている。親の居場所で新年会が行われ 13 人の家族が参加。
 </td></tr>
<tr><td>開催の模様</td><td colspan="3">9 月 20 日ファームの芋掘り　（左）
11 月 1 日すずかけセントラル病院主催「ふれあい祭」に参加（右）
 </td></tr>
<tr><td>実施成果</td><td colspan="3">＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞
運営者は、外の居場所を提供できた。その結果継続的に当事者が出てこられるようになった。イベントに参加することにより、当事者が街に出てこられるようになった。利用者は、ファームでの作業にアルバイト料が出て仕事をすれば自分のお金を持てる喜びを発見。また、出てこられない人も、ファーム通信を楽しみにしたり、自分の家で野菜を育て始める人も出てきて、各自其々の動きが出始めている。</td></tr>
<tr><td>利用者の感想</td><td colspan="3">＊スーパーへ野菜を販売することにより、ファームでの野菜栽培が楽しみになった。
＊ファームがある、という事が、いつか自分も出る場所がある、と目標になっている（当事者談）
＊アルバイト料が出る事は嬉しい。これからもアルバイト料が出てほしい（当事者）</td></tr>
<tr><td>課題と改善策</td><td colspan="3">＜今後の居場所継続に向けた課題＞
＊部屋の中の居場所は人気が無かった。理由は、部屋の中で他人と顔を突き合わせて何か話さなくては、と想像すると嫌になる。
＊外の居場所ファームは緩やかな就労準備場所として機能しているようだ。しかし、なかなか人が出てこない。
＊決まった当事者しか出てこないので、未だ出てこない当事者に対してどのように伝えるのか。

改善策：
1. 当事者への呼びかけを引き続き続ける。</td></tr>
</table>

	2. ファームのスタイルを替え外部の参加者も導入する。 3. ファームに参加しやすいように、道具、機材等助成を受ける。 4. 居場所を１か所に固定せず、様々な場所を居場所としていく。 例）卓球クラブを作り、そこに出かけていく。　麻雀大会を当事者の家で開催する。参加者は開催するお宅を訪問。（アウトリーチとしても機能）等多方面へ向けての発想の転換を図る。

近畿ブロック（兵庫宍粟支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 兵庫県　ひまわりの家</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">ひまわりの家居場所、その他</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">578 名（家族 75 名　　当事者 503 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">チラシを作成し、当事者に届きそうな場所に置いた。
市や社協などの広報誌に取り組みを掲載した。
当 NPO 会員に取り組みを知らせ、より多くの方に情報が行き渡る様に取り組んだ。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">実施内容</td><td rowspan="2">８月</td><td>メニュー</td><td>語り場・雑談交流／昼食会／レクリエーション</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【8 月の参加者数：当事者：74 名　家族：29 名】

夏祭りに備え、家族会の皆さんと当事者で、庭の草取りを一緒にしました。
作業の後は、そうめんパーティをしました。また、すいか割りをしたり、ギターやハーモニカの演奏に合わせて歌を歌ったりしました。きれいになった庭で、みんなでわいわいと言いながらいつもはなかなか話さない人たちとの交流もできました。

8 月のその他の活動：
家族会・若者の会・ブドウ園作業・誕生日会・お菓子作り・料理教室など</td></tr>
<tr><td rowspan="2">９月</td><td>メニュー</td><td>ＰＣ教室／屋外自然体験／語り場・雑談交流／農業体験等</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【9 月の参加者数:当事者：64 名　家族：12 名】

ひまわりの家の庭では、四季折々の花の他カフェで使うベビーリーフ等を少しずつ育てています。また、近所の人たちの指導を受けて、畑でジャガイモや玉ねぎ等も栽培しています。
緑がいっぱいの自然の中で、土を触りながら汗を流す時間は、いつの間にか会話ができたり、笑顔が見えたりする嬉しいひと時です。
9 月のその他の活動:家族会・若者の会・ブドウ園作業・カラオケ・ガーデニング・料理教室など</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>ＰＣ教室／屋外自然体験／スポーツ交流／調理体験実習等</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【10 月の参加者数：当事者：81 名　家族：19 名】

ひまわりの家の庭にピザ窯を作る計画が立ちました。若者たちが協力して作る予定です。この日は、その研修を兼ねて、ピザを焼く体験をさせていただきました。
ボランティアさんの協力を得て、美味しいピザをたくさん作って食べることが出来ました。薪割りや、ピザ生地つくり、ピザ焼き等、初めての作業に夢中になりました。里山の景色をみながら、美味しいピザをお腹いっぱいいただきました。

10 月のその他の活動：家族会・テニス・ソフトボール・ブドウ園作業・ガーデニング・料理教室など</td></tr>
<tr><td rowspan="5">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>PC教室／屋外自然体験／地域交流/スポーツ交流／調理体験実習等</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【11 月の参加者数：当事者：70 名　家族：14 名】

例年開催される地域のふれあい祭りに、ひまわりの家自慢のケーキやクッキーを販売する活動に参加しました。
見知らぬ多くの方との交流は、緊張と恐怖の連続ですが、支援して下さる方も多くいろいろな体験をすることが出来ました。模造紙で作った壁新聞で、地域の皆さんにひきこもりに対する理解を持っていただく機会にもなりました。

11 月のその他の活動：家族会・パソコン・テニス・ソフトボール・ガーデニング・料理教室・地域のイベント参加等</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>ＰＣ教室／地域交流/スポーツ交流／調理体験実習等</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>【12 月の参加者数：当事者：111 名　家族：1 名】

宍粟市のキャラクターしーたんの着ぐるみに入っています。着ぐるみは、頭が重くて、暑くて本当に大変ですが、人ごみが怖い人も着ぐるみに入ると、少しずつみんなの中に入って行くことが出来る様になっています。キャラクターになって地域のいろいろなイベントに参加出来る事は楽しいです。12 月は、スキー場の山開き式典にも参加しました。

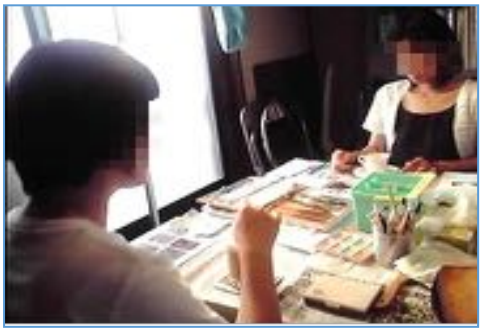
12 月のその他の活動：パソコン・テニス・ソフトボール・ガーデニング・料理教室・地域のイベント参加等</td></tr>
<tr><td>1 月</td><td>メニュー</td><td>PC教室／屋外自然体験/地域交流／スポーツ交流／調理体験実習等</td></tr>
</table>

		内容	【1 月の参加者数：当事者：103 名　家族：0 名】 1 月 17 日、兵庫県は阪神淡路大震災の祈りにつつまれます。今年は、ボランティアさんたちの中に入り、追悼集会に参加することができました。そのあと里山保全ボランティアさんたちと竹藪の清掃作業に参加するなど有意義な一日になりました。また念願の雪が降り、みんなでスキーをすることが出来貴重な体験となりました。 1 月のその他の活動：パソコン・テニス・卓球・キャッチボール・ガーデニング・料理教室・百歳体操・地域のイベント参加等
開催の模様			
実施成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ まず、行ける場所、居られる場所の提供をした。 その上でコミュニケーション能力の取り戻す環境作り。 決まった時間に起床し、居場所に行こうとする意欲の継続。集団の中に入って行こうという、前向きな姿勢がみられた。 体を動かし汗をかく体験を通して、園芸に興味が出てきた参加者も出てきた。 スポーツなどの体を動かしての交流は、対話だけの交流が苦手な参加者にとっての、最初に人と繋がれるきっかけになった。		
利用者の感想	・体を動かすのは楽しかった。スポーツは楽しい。会話を無理にしなくてもいいのも楽だった。 ・畑仕事は体力的に大変だったが、土に触れ、作物を育てるいい経験が出来て良かった。 ・ＰＣ教室で使い方を勉強できた。出来る事が増えたので嬉しかった。 ・着ぐるみに入ると、普段居られない場所でも居られるので、この方法から慣れていきたい。		
課題と改善策	＜参加者が集まらなかった理由、人材の確保、居場所運営の困難さなど＞ ・居場所だけでは社会復帰へはなかなか繋がらないので、社会復帰へ向けての具体的な支援が必要。 ・今後は出費だけになるので財政が苦しい。財政支援の継続がない限り継続はとても難しい。 ・トイレなど、他人が居ると使えない、居られない参加者が。可能な限りの状況の改善と、気を遣わず、意思表示を出来る環境づくりが必要。その悩みや状況は一人だけじゃないという事実を伝えていく。		

近畿ブロック（大阪支部）における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">特定非営利活動法人大阪虹の会</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">喫茶＆フリースペース虹、および前川農園（貝塚市木積）</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">205 名（家族 117 名　当事者 88 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報やチラシにて会員・支援者・例会参加者・居場所利用者に周知。また周辺住民などにチラシを配布。ホームページでも広報活動を展開(週 1 回更新)。</td></tr>
<tr><td rowspan="7">実施内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>手づくり教室、料理教室、絵画教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室</td></tr>
<tr><td></td><td>8 月から居場所活動活性化に向け、いろいろな教室がスタートしました。絵画教室では、絵手紙を描きました。お花の写真をもとにグリッド線を引き模写する方 法で描きました。着色は色鉛筆と水彩絵の具で描き、繊細なお花の絵が仕上がりました。絵が苦手な人もコツさえつかめば、どんどん描けるようでした。
8 月のその他の活動：若者の会（なないろの集い）・農園ボランティア・朝市・手作り教室（モビール作り）・料理教室（クッキー作り）・絵画教室（絵手紙）・パソコン教室
8 月の参加者：当事者 9 名　家族・支援者 9 名</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>手づくり教室、料理教室、絵画教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>身近なものなどでできるという万華鏡作りを手作り教室にて開催しました。鏡を合わせる作業は、感覚とミリ単位の調整が必要でしたが、みんなワイワイ話しながら解決されていきました。万華鏡の外側には、きれいな千代紙を貼りそれぞれ世界で一つしかない万華鏡を仕上げました。
9 月のその他の活動：家族会・若者の会（なないろの集い）・農園ボランティア・朝市・手作り教室（万華鏡作り）・諸活動（ＣＤを聴く）・パソコン教室・料理教室（たこ焼き）・絵画教室（模写）
9 月の参加者：当事者 7 名　家族・支援者 20 名</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>手づくり教室、料理教室、絵画教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>外の居場所としての虹農園では、季節を通じて野菜を栽培しています。10 月 25 日には秋の収穫祭を開催し、25 名が参加。タマネギとニンニクの定植作業をしました。喫茶でも販売する干し柿の皮むきや紐をつける作業をしたり、除草作業をみんなで力を合わせてしました。その後には、年に 2 回ほどするバーベキューを楽しみました。
10 月のその他の活動：家族会・若者の会（なないろの集い）・農園</td></tr>
</table>

			ボランティア・朝市・手作り教室（紙すきのはがき）・諸活動（浜寺公園散策）・パソコン教室・料理教室（ちぢみ）・絵画教室（塗り絵） 10 月の参加者：当事者 11 名　家族・支援者 25 名
実施内容	11 月	メニュー	手づくり教室、料理教室、絵画教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室
		内容	ホットケーキミックスを使ってホットプレートで焼き、あずきあんやイチゴジャム、いちじくジャムをのせて食べる簡単で美味しいメニューで料理教室を開催しました。居場所活動を続けることで、たくさんではないけれど地域の方の参加があるのが、楽しみの一つです。この教室でも、地域の方の参加がありました。 11 月のその他の活動：若者の会（なないろの集い）・農園ボランティア・朝市・手作り教室（干支の押し絵）・フリータイム・パソコン教室・料理教室（ホットケーキミックスを使ってのメニュー）・絵画教室（色の作り方、技法講座） 11 月の参加者：当事者 9 名　家族・支援者 15 名
	12 月	メニュー	手づくり教室、絵画教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室
		内容	12 月は、若者の参加を増やすため、昼食会を 2 回計画。1 回目は、秋の収穫祭で人気だった当事者のＦ君にシェフ役を依頼し、ピザランチの昼食会を開催。予想通り、多くの若者が参加し、盛り上がった。2 回目は、忘年会として焼肉ランチの昼食会を開催。こちらも大勢の若者が参加し、始めて居場所に来た者も多かった。 12 月のその他の活動：若者の会（なないろの集い）・農園ボランティア・朝市・手作り教室（クリスマスカード作り）・フリータイム・パソコン教室、絵画教室（動物イラスト講座） 12 月の参加者：若者 26 名、家族・支援者 44 名
	1 月	メニュー	手づくり教室、料理教室、なないろの集い、農園活動、産直朝市、パソコン教室
		内容	手づくり教室ではアクリルたわし作りを実施。料理教室では「かんたんピザ」作りを実施。また、12 月に続き 2 回目のピザ・ランチの昼食会では、ピザ作りが得意なＦ君がシェフをつとめ、15 人分のピザとクッキー（フィナンシェ）を作り上げ、参加者から大きな拍手をもらい、大満足でした。また農園活動では、ビニールハウスで夏野菜（ナス、メロン、ピーマン）の種まきを実施。セルトレイといわれる種苗ケース（128 穴）に 1 粒ずつ小さな種を丁寧に蒔きました。毎回、農園活動に参加してきたＴ君が、自宅の休耕田を開墾しジャガイモ作りに兄弟で挑戦。大きな一歩を踏み出し、みんなから祝福されていました。

開催の模様	 10 月の収穫祭の様子（農園にて）  絵画教室の様子（9 月）
実施成果	当事者の個性や特技が発揮できるように居場所活動のメニューを豊富化。手づくり教室（モビール製作、万華鏡製作、押し絵、クリスマスカード制作、アクリルたわし製作）や当事者の若者が講師を勤めた絵画教室、パソコン教室、そして料理教室や昼食会、農園活動と産直野菜朝市、若者の集いやフリータイムの場などを提供しました。当事者の若者がパソコン教室や絵画教室、ピザランチなどで講師やシェフをつとめ、特技を発揮した。その成果を周囲が繰り返し評価していった。それが本人の自身へとつながった。秋の収穫祭(10 月)は、恒例行事として周知されていたこともあり、家族とともに多数の若者当事者の参加があった。当事者、家族、支援者がそれぞれ協力して農作業をし、自ら収穫した野菜などでバーベキューをみんなで一緒になって楽しんだ。準備する人、バーベキューを焼く人、食べる人とそれぞれ役割を交代しながら経験し、協力し合う中で、自然と会話も弾んでいた。
利用者の感想	利用者の感想として、次のようなものがあった。 ・「自分の働きで、みんなが喜んでくれたことが、とてもうれしかった。」（ピザランチのシェフ担当） ・「家族の方々がとても明るかった。」（参加した感想） ・「居場所は、話がしやすい場所だった。」（はじめて居場所に来た若者）
課題と改善策	・当事者の若者の興味・関心を把握するのに時間がかかり、居場所活動の取り組み準備が十分にできなかった。特に、今現在もひきこもり状態にある人の興味を把握するのは、非常に難しかった。ひきこもり状態にある当事者が一歩外に出て、居場所につながるにはどうすればよいか、が大きな課題である。当事者それぞれ皆、個性、生い立ち、環境、年齢などが違うので、それぞれの個性にあったきめ細やかな支援が必要である。居場所担当者のスキルアップに取り組みたい。 ・居場所活動に参加した当事者が、居場所にとどまることなくさらに社会参加するには、きめ細かい支援策が必要。ボランティア活動や中間的就労の場の確保など、公的機関、社会資源、医療機関などとの連携強化が不可欠である。 ・居場所を運営する資金の確保が大きな課題である。喫茶事業により自前の運営資金を工面することを第一にしているが、さまざまな助成金確保も探っていきたい。

中国ブロック(広島支部)における居場所事業

<table>
<tr><td>実施支部</td><td colspan="3">KHJ 広島「もみじの会」</td></tr>
<tr><td>会場</td><td colspan="3">行者山 太光寺(社会福祉法人　福祉館)</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="3">220 名（家族 146 名　　当事者 74 名）</td></tr>
<tr><td>広報</td><td colspan="3">会報にて会員向けに周知。広島市社協にチラシ送付(計 1000 枚)。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">8 月</td><td>メニュー</td><td>座禅・写経</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[8 月の参加者数:当事者 1 名、家族 25 名]
居場所開催に合わせて、居場所チラシ構成の検討を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月</td><td>メニュー</td><td>座禅・写経、太極拳、和菓子作り体験</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[9 月の参加者数:当事者 10 名、家族 29 名]
和菓子製造に携わっているご主人の指導により、和菓子の製造の一部を体験した。
自分が製造した和菓子は持ち帰り、食することとした。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>メニュー</td><td>座禅・写経、ストレッチ、百マス計算、そば打ち体験</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[10 月の参加者数:当事者 10 名、家族 37 名]
そば打ち体験では、アマ名人に指導をいただき、そばを粉の状態からそばに仕上げる体験をした。
打ったそばは、当日食べてそのおいしさに感動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">実施
内容</td><td rowspan="2">11 月</td><td>メニュー</td><td>座禅・写経、ストレッチ、畑の雑草整理・焼却、そば打ち体験</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[11 月の参加者数:当事者 17 名、家族 22 名]
畑の開墾作業では、雑草の焼却に合わせて焼き芋作りを実施した。
そば打ち体験では、アマ名人に指導をいただき、そばを粉の状態からそばに仕上げる体験をした。
打ったそばは、当日食べてそのおいしさに感動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">12 月</td><td>メニュー</td><td>座禅・写経、ストレッチ、グランドゴルフ、うどん打ち体験</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[12 月の参加者数:当事者 17 名、家族 17 名]
うどん打ち体験は、講師を親の会から提供したが、好評であった。
打ったうどんは、当日食べて、まずまずのおいしさに感動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1 月</td><td>メニュー</td><td>ボレーテニス、テニス、うどん打ち体験</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>[1 月の参加者数:当事者 19 名、家族 16 名]
うどん打ち体験は、講師を親の会から提供したが、好評であった。
打ったうどんは、当日食べて、まずまずのおいしさに感動した。
テニスは体を動かす激しい運動であったが、希望者があり、3 週間連続で参加したものもいた。</td></tr>
</table>

開催の模様	 和菓子作り体験 そば打ち体験 開墾清掃・焼却 硬式テニス
実施成果	・通常体験できないことを体験できる場を提供できた。 ・体験前は不安に思っていたことを最後まで体験することにより自信をもって達成感を得ることができた。 ・参加者間のコミュニケーションをとることが自然にでき、緊張を緩和することを体験できた。 ・話だけではなく、手や体を使うことにより自然にコミュニケーションをとることができた。
利用者の感想	・和菓子作り体験では、きんとん作りの難しさを認識した、形が良くないとの指摘にへこんだもののよい勉強になった。 ・やってみて自分の体力のなさに気づいた。もっと頑張る。 ・和菓子を作ったのは初めてで楽しかった。 ・そば打ち体験では、最初は不安を抱いた人もいたが、最後までできて満足した。 ・初めてのそば打ちで気分転換できた、そばも腰があっておいしかった。 ・そば打ち体験では、初めての体験で楽しかった。普段しないことをしたので良い刺激になった、楽しかった。 ・思っていたよりも楽しかった、そばがおいしかった。また参加したい。 ・開墾作業では、初めての開墾体験で体力に自信はあったが、少ししんどかった。 ・体が使えて元気が出た。草を刈って燃やしてすがすがしい気分になった。楽しく過ごせた。 ・うどん打ち体験では、初めての体験で楽しかった。笑顔も見られた。 ・テニス体験は、体を動かす良い運動となった。 ・親の居場所づくりを継続してほしい。

課題と改善策	・チラシだけては、参加者が集まらない。（既存のＮＰＯ 等との連携） ・写経・座禅などは既存のＮＰＯで実施しているプログラムにあるため、新鮮味がない。（既存にはないもの） ・場所確保に必要な財源の確保が課題。（無償で使える場所の確保） ・居場所が市内中心部ではなく、丘陵地にあるため、行きにくい。（市内中心部で交通の便が良いところ） ・体験型には人が集まりやすいが、講師謝金・材料費がかかる。（親が講師を務められるようにする） ・体験型には人が集まりやすいが、工夫がないと本人の自立に繋がらない。当事者同士の関与の仕方に工夫が必要。（触れ合う時間を作る、達成感を得る経験をさせる）

四国ブロック（香川支部）における居場所事業

実施支部	KHJ 香川県　オリーブの会		
会場	オリーブの会居場所（ポパイの会）　その他		
人数	450 名（家族 343 名　当事者 107 名）		
広報	会報にて会員、関係機関等に周知。オリーブの会のホームページに掲載。他の研修会、講座、協議会等で積極的に紹介。		
実施内容	8 月	メニュー	PC教室／調理体験実習／語り場・雑談交流／地域交流（夏祭りなど）
		内容	【8 月の参加者数：当事者：17 名　家族：46 名】 ・ＰＣ教室：全国大会参加者一覧表を作成。入力は慣れると結構早くなった。休憩のお茶の時間には全国大会の話で会話がはずんだ。 ・調理体験実習：ヘルシーカレーはお肉が入っていないのにお肉の味がして全員初試食。家事手伝いが出来ている当事者が多いので包丁を使うのも慣れている。サラダのトッピングも各自 6 種類の中から選んでやってもらう。大盛りもあれば、色の配合にセンスをみせる当事者もいたり、話題がつきない。 ・その他：地域の夏祭りの不要品バザー出展の準備の手伝いなど。
	9 月	メニュー	ＰＣ教室／調理体験実習／その他（全国大会打合せ）など
		内容	【9 月の参加者数：当事者：17 名　家族：46 名】 ・ＰＣ教室：当日はパソコン作業を行いました。全国大会の案内状や参加者名簿、名札などの作成を行いながら、全国大会が近付いてきたんだなぁと改めて感じました。ＷＡＭ事業の助成で 8 月から月 4 回の活動となりました。

			・その他（全国大会打合せ）：全国大会のスケジュールを見ながら、当日に若者ができることを決めました。予定が難しい若者もいましたが、みんなそれぞれやれることをやろうという話になりました。久しぶりに顔を出した方も含めて、様々な話題で盛り上がり、みんなで楽しめました。（Ｋさんの日誌より） ・調理体験実習：ピザとトマト・キュウリのジュレサラダでした。生地からこねて手作りしていきました。飾り付けは個性が出て会話がはずみました。スープもコンソメと卵スープがあり、またＳさんの娘さん手作りのクッキーもいただきました。（Ｔさんの日誌より）
	10 月	メニュー	ＰＣ教室／調理体験実習／軽作業（通信発送作業）／その他（全国大会打合せ、資料袋詰め、会場設営）など
		内容	【10 月の参加者数：当事者：24 名　家族：119 名】 ・軽作業：台風のためバドミントンを中止、会員、関係機関へのオリーブ通信発送の手伝いをしました。 ・ＰＣ教室：それぞれ無理のない範囲で全国大会スタッフ用名刺、名札等の作成の仕方を学ぶ。 ・調理体験実習：餃子・炒飯、今回から材料の買い出しを当事者にお願いする。始まる 1 時間前に集合して材料と数量は支援者と相談しながら、スーパーで買ってきてもらった。 ・その他（会場設営など）：当日はスタッフと同じように８時半に会場へ集合、すぐ設営等に取り掛かった。全国大会は当事者の活動をとおして、大きく成長を感じることができたイベントになったことに感謝したい。
実施内容	11 月	メニュー	ＰＣ教室／調理体験実習／屋外自然体験／その他（全国大会会場片付け、ひきこもり大学受付）など
		内容	【11 月の参加者数：当事者：18 名　家族：33 名】 ・ＰＣ教室：全国大会に参加いただいた支部に年賀状を印刷。年賀状の裏面は参加者に選んでもらった。楽しそうなイラストを時間をかけて選んでくれた。はじめてパソコンとｉＰａｄをつないで大西さんと連絡をとってみた。 ・調理体験実習：牛めし、味噌汁。食材はみじん切り、錦糸卵も順番に焼いてみたが、みんな上手だ。 ・屋外自然体験：丸亀市の飯野山（標高 422m）に上った。前日まで雨が降っていたので、当日の天候と登山道も心配していた。新メンバーが前以て下見をしていたので感心した。小型犬も一緒に登ったので楽しく登れた。
	12 月	メニュー	ＰＣ教室／調理体験実習／その他（居場所リフォーム　クロス張り）、居場所の大掃除など

		内容	【12 月の参加者数：当事者：20 名　家族：51 名】 ・ＰＣ教室：年賀状の宛名のレイアウトは住所の字数で変わるので難しかったが、根気強く挑戦できた。 ・調理体験実習：ちゃんこ鍋。食材はカットするだけなので簡単だった。ご飯は炊き込みご飯、アレルギーの若者に配慮した玉子を使わない茶碗蒸しもどき。つけものは支援員の方の手作りで、みんな美味しくいただいた。 ・その他：居場所リフォーム、クロス張り。支援者から提案いただき、計画変更で認めていただけたので、クロス張りの体験ができた。当事者 1 人の参加だったが丁寧に教えて下さった。 ・居場所活動を月例会会場に移し、若者の近況報告等話して貰った。 ・大掃除など 12 月は盛りだくさんであった。
	1 月	メニュー	ＰＣ教室／調理体験実習／語り場、雑談交流/その他（居場所リフォーム クロス張り）
		内容	【1 月の参加者数：当事者：11 名　家族：48 名】 ・ＰＣ教室：2/11 の第 3 回若者交流会 in 香川のチラシを作成。ネットから案内図の貼り付けや装飾を行う。 ・調理体験実習：幕の内弁当。いつもどおりレシピの説明、手順の説明があり、コンビニ弁当と単価や味を比較しながらお互いに楽しくおしゃべりしながら料理をしました。煮物、揚げ物、酢の物、果物、ごはんをバランスよく彩りも考え、それぞれ手分けして盛り付けました。 ・その他：居場所リフォーム、クロス張り。12 月に引き続きクロス張りの体験ができた。28 年度につながるといいなと考えている。 ・語り場、雑談交流：ゲーム交流の予定だったが、いろいろおしゃべりしているうちに時間が過ぎた。
開催の模様			

実施 成果	＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞ 1.居場所事業を月 4 回以上実施できた。居場所に出て来る回数が増えた。 2.毎回有能な支援員（市民活動センター嘱託員、元経験者、自助グループ代表等）を招くことができ、特に支援員の得意とする PC 教室はそれぞれに会った対応をしてもらえた。 3.支援員が相談、訪問もされているので安心して任せることができた。 4.回を重ねる毎に変化（積極性：仲間と話す、役割を担う、他の講演会、講習会に参加する等）が見えてきた。 5.調理体験実習では親と一緒に参加できたことを喜んでくれた若者や、回数を重ねる毎に食材、金額、作り方などに関心を示すようになり、手際良く行動できるようになった。
利用者 の感想	1.他の参加者と交流、情報交換ができた。 2.他人から批判的干渉をうけることがなく、安心できる場所。 3.日頃の生活や活動に役立った。 4.話すことができたので抱えていた問題・不安の解消につながった。 5.就労準備のスキルアップにつながった。 6.今までに付き合いのない年齢とコミュニケーションの場を持てた。
課題と 改善策	＜参加者が集まらなかった理由、人材の確保、居場所運営の困難さなど＞ 1.　居場所の役割にも利用者の回復度により様々なニーズがあったこと。 2.タイムリーに相談を聞いてあげられなかったこと。 3.力量のある青年世話人（支援員）によるところが大きいこと。 4.元経験者、居場所の世話人（リーダー）的な当事者等の育成、本部、他支部等からの派遣のシステムつくりも必要ではないかと思う。 5.居場所活動も利用者の回復段階によって、活動日も分けてプログラムを組んで行いたいが、財政的な支援が無いので、非常勤であっても青年世話人（支援員）に依頼できないのが現状。

九州ブロック（福岡県支部）における居場所事業

実施支部	KHJ 福岡県　福岡「楠の会」		
会場	①福岡「楠の会」事務所兼場所②糟屋郡宇美町畑③福岡市市民福祉プラザ④大牟田文化会館⑤介護施設「かつき苑」		
人数	175 名（家族 91 名　　当事者 84 名）		
広報	①会報 2 種類（親向け支援者向け＆若者向け会報）にてＰＲ活動。②講演会 2 回とも、新聞社 5 社に名義後援と広報依頼。		
実施	8 月	メニュー	①新居場所活動「福岡第 3 空間」②農作業体験

内容		内容	①新居場所活動：「福岡第 3 空間」で“黄昏から集まろう”をキーワードに、毎月 1 回鍋の会を実施。参加者は会員以外にも呼びかけ、市内にいる古い若者の会の人たちが誘い合って参加した。ファシリテーターは石垣オレンジの山田孝明さん。トランプで占いやマジックを披露したり、やり方を教えたりで興じた。若者が集まる前に親たちの相談会も実施。 ②農作業体験事業：大変暑い時期なので午後からの作業は慣れている人でないと難しいが、「写真撮りに来て」といって誘ったりした。彼はもっぱら写真しかとらなかったが、畑と山が広がる景色をあちこち動いて写真を撮ってきた。作業をしたのは前から来ている若者が担当。なす、きゅうり、オクラの収穫と小豆、大豆の成長を観察。ボランテイア支援者と草苅機で草苅をした。
	9 月	メニュー	①居場所活動「福岡第 3 空間」②農作業体験③パソコン講習会準備説明会
		内容	①「福岡第 3 空間」は同じメンバーが参加。あと、弟さん 2 人が母親の急死によって大変戸惑い、市のひきこもりセンターと楠の会に駆け込んでこられたので第 3 空間に参加を促して山田さんのアドバイスを受けるようにした。市の生活困窮者自立支援にも行かれたが、財産の処分とか、本人を同行することしかアドバイスがなかったと言う。まずは姉弟の間で話ができる関係作りから取り掛かるように、仕事のことや今後のことより、おいしい食べ物を差し入れしたり、体の様子や生活の様子を見ていく方に力を入れるようお話しした。 ②農作業は 9 月に入って夏野菜の撤去と秋冬野菜の畑づくりに取りかかった。写真係といつもの若者とほかに親御さん、サポーター、若者が新しく参加。 ③パソコン講習会の準備説明会をやったが、企画がよくなかったようで、再度企画の見直しをすることにした。
	10 月	メニュー	①居場所第 3 空間②農作業体験③かつき苑見学会
		内容	①第 3 空間 10 月はお姉様の参加含め 7 人、弟さんの高校が参加者と同じだったと言うので話が盛り上がった。外部の当事者も話を催促すると嫌がられるが、かなり遅くまで鍋を囲んで当事者の気持ちを語り合うなど話が弾んだ。 ②の作業は参加者 3 人、ボランティア 1 人、親 3 人。9 月の植えた秋野菜の成長が著しく、1 週間見ないうちに大きくなっていくことに驚いていた。写真班も写真を撮りに来た。 ③介護の職場は人手不足というので、それに心優しい若者たちがい

			るので職場体験ができたら、と見学会を企画。しかし、予告が遅れて当事者の参加がなかった（2 人直前でキャンセル）。仕方なく親だけが見学に。「自分たちも老人だがまだ介護には遠いと思っていたが、こんなことかとショックだった。」という親も。子どものことよりも、自分たちの近未来のことも考える機会になった。
実施内容	11 月	メニュー	①居場所第 3 空間②農作業体験③パソコン講習会④久留米親若者体験発表会
		内容	①第 3 空間 11 月 27 日（金）この日は親の相談会のあと、第 3 空間をすることにしていたが、親も若者もたくさん来てくれた。パソコンの入力を頼んだのでやってきて作業をする人、ギターの弦を直しに来てくれた人、ボランテイアの人と話し込む人、そのあと、鍋の会をしたが 4 人がそのまま残ってくれて鍋を囲んでくれた。親も残って若者と会話していた。 ②ジャガイモ、大豆の収穫が終わりました。大根、人参、かぶ、青梗菜、水菜は「第 3 空間」の鍋の材料になっています。 ③11 月 17 日・24 日パソコン講習会パワーポイント講座始まる！1 回目は若者 3 名、2 回目も 1 人欠席で　新たに 1 人参加者が居り同じく 3 人、親も 4 人。まず若者だけでパソコンのセットアップを講師の先生と一緒にやった。次に先生の講義を聞き、何をテーマにするか原案をかき出した。次回はいよいよパワーポイントの操作方法を聞いて、前回のプランに従って各自制作に取り掛かった。 ④久留米の会親・若者体験発表会はいつもの久留米の会より少し多めで 20 人程出席。久留米保健所から一人参加。親父の会をやっているＵさんと、若者は若者の会に来ている人 3 人全部来てもらって発表してもらった。親たちには大変好評だった。またこんな企画をして欲しいと要望された。
	12 月	メニュー	①居場所第 3 空間②農作業体験③パソコン講習会④
		内容	①第 3 空間はクリスマス会をした。参加若者 9 人、親 6 人、ボランテイア支援者 2 人と山田さんでにぎやかに遊んだ。 ②ジャガイモは第 3 空間でコロッケとサラダに使った。大豆、小豆の後の畑はごみを焼き、いつでも使えるように耕しておく。参加者若者 4 名、親 4 名、ボランテイア 1 名。 ③パソコン講習会第六期パソコン講習会（パワーポイント学習）、参加者：若者 4 名、親 4 名のうち、最終日は若者 2 名、親 3 名、スタッフ 3 名。発表会には支援者（ＫＡ・Ｋ）が 2 名来て下さり賑や

			かに。参加者全員からコメントをいただきましたので若者からのものだけ披露します。Ｔ君：このＰＣ講習会で初めてパワーポントを使ったけどやってみると面白かったです。Ｅ君：見学するだけにしようとはじめ思っていましたが、第１回から第６回まですべて参加して本当に良かったと思います。Ｙ君：ＰＣ講座、初参加して良かったと思っています。ＰＣに疎い僕にとって、右も左もわからない作業でしたが、Ｎさんや先生の指導もあり、自分の作品ができた事は、大変凄い事だと言えます。あとＷｏｒｄ、Ｅｘｃｅｌ、ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔそろってＯｆｆｉｃｅということがわかりました。 ④福岡南部では初めての講演会に 90 名。福祉関係の団体と実行委員会を結成し、資金集めから企画まで協力して実施。ひきこもりへの関心を高めることに成功。
	１月	メニュー	①居場所第３空間②農作業体験③大牟田講演会
		内容	①第 3 空間は 1 月 30 日講演会と同じ日になり、寒い日だったせいか若者は 3 人。ただ講演会を終わった親たち 6 人が山田さんと会い、今後の若者の会についていろいろ話し込んだ。 ②（会報より）お正月過ぎて 2 週間目の日曜日に久しぶりに畑に行きました。ニンニクは寒さに弱くて葉が黄色くなっています。この寒さの中、人参、大根、白菜、ネギ、キャベツ、ゴボウもありました。これからの作業はジャガイモを植える準備です。種イモがもうすでにお店に出ています。いつも失敗が多いので施肥に気を付けます。 ③講演会「ひきこもりからの脱出に大切なこと～自己肯定感を養う～」を福岡市で開催。支援者、社協関係者、親当事者など 80 数名。アンケートでは「よかった」、「大変良かった」が大半だった。 ＜下記にチラシを添付＞
実施成果	**＜運営者は何を提供できたか？＞＜利用者にはどんな効果があったか？＞** ①居場所第 3 空間は会員外の新しい若者の参加者があったこと、②農作業体験は若者たちに荒々しい自然の姿を体験してもらったこと、③パソコン講習会は若者たちが自分の親以外の大人たちに大変近く接することができたこと、④講演会 3 つはひきこもりの支援につながらない人たち、あまりよく知らなかったひきこもりのことについて、今までこのような機会に恵まれなかった人たちへ支援の必要性を理解する機会になったと思われる。		

開催の模様	 福岡市講演会 「ひきこもりからの脱出に大切なこと」 若者の居場所活動　福岡第３空間 パソコン講習会 農作業体験事業 11 月
利用者の感想	パソコンのことで知らなかったことを勉強できたこと、農業体験では、汗して働く一種の楽しさを知ったと言う、今まで付き合ったことがない親の会の人たちと接したこと、居場所に来てみたこと、新しい支援者にであったこと。
課題と改善策	いくら色々な企画をだしてもひきこもる若者たちがそれにつられて家から出てくると言うことはあまり期待できない。力を注いでプランを立ててみたが、その努力に報われる思いはしなかった。むしろこれは根本的には親たちを動かさないと若者は動かないと実感した。そのためにこれからの親の会は居場所をやるよりは、親たちをエンパワーすること、親の会をやっていくこと、それも近づきやすい親の集いでなければ、高い入会金を納めなければならないのは親の会に近づくこともできないと思った。そこで今回意を決して居場所の閉鎖を決めた。お金を大して使わずに親の会に近づき、ピアの力で親同志の助け合いをやっていく方が若者たちを動かす力になると思われた。それと同時に、近くに相談に行けるところでないと遠いところまで出かけていくことは、高齢者や悩みを抱えて体力も弱っている親たちには役に立たないと思われる。よってこれからは地域地域で少人数の親の集いをやってみることにしている。今親の集いは、5 か所あるが、これに 2，3 か所加えて、不定期でも時々公民館などを借りてやっていこうと思う。また若者支援は、親ではなく、その志のある人たちにやってもらえるように考えていきたい。京都の若者、福岡の若者、石垣島の若者と親の交流会などできないかと考えている。それから進んで、A 型でもなく，B 型でもない，ひきこもりで使えるＣ型の若者支援ができないか、それには多くの普通の大人社会との接触交流する場が必要で、それは若者の就労や生活支援でもある。高齢化する親と若者が希望をもって生きていけるような仕組みを真剣に考えていきたいと思っている。

沖縄ブロック（沖縄県支部）における居場所事業			
実施支部	KHJ 沖縄県　てぃんさぐぬの会		
会場	地域子ども若者多目的広場ＵＴＴ　及び　那覇市真地公民館		
人数	126 名（家族 37 名　　当事者 89 名）		
広報	別地域より支部が移転。その上で、沖縄県南部地域の方々に一つ一つ周知を行った。		
実施内容	8 月	メニュー	コミュニティーカフェ
		内容	当事者と支援者により理解の深いラポール形成を図った。無言、緊張、多様な状況に応じた居場所づくりを、支援者、当事者で模索した。

	9 月	メニュー	コミュニティーカフェ
		内容	10 月のひきこもり大学の準備に取り掛かる。 新たな試みとして、地域の若者の協力のもと、ランチ会や自然発生的に始まる運動やレクレーションを行った。
	10 月	メニュー	軽作業等
		内容	19 日ひきこもり大学・居場所シンポジウムを行った。 二つの大きな催しを行う上で、当事者や支援者と協力体制を整えた。 協力企業から中間的就労の意味合いで、封入作業の依頼を受け、無事に納品した。
実施内容	11 月	メニュー	軽作業等
		内容	草刈りや駐車場での誘導に 2 人一組で従事した。金額は低いものの謝金を支援者、当事者が同じ金額を獲れたことは意義深い。
	12 月	メニュー	多目的活動
		内容	スポーツ交流・ランチ会・調理体験等で多岐にわたる活動を行うことができた。
	1 月	メニュー	農業体験
		内容	地域農家の協力の下、草刈り、ヤギの飼育、農村体験を行った。 ヤギが出産を迎え、新たな生命との出会いもあり感慨深い経験を得ることができた。
開催の模様			
実施成果	できる限り、外での活動を促し、沖縄の持つ、悲しさや力強さ、今の幸せとこれまでの歴史を感じることをテーマに仲間として活動した。		
利用者の感想	外に出られたこと、いろいろなことを見たりしたこと。いつの間にか変わっていた身の回りを知ることができた。		
課題と改善策	＜今後の居場所継続に向けた課題＞ ひきこもりとは、ニートとは。早期に発見した若者は、応援を行うとすぐに次のステップへ歩みだし、就労や職業訓練、福祉関係団体等へ促すことができた。コミュニケーションが課題となる若者や中年層は心因性、精神的要因を感じた。医療や保健等の協力を仰ぎたく、地域行政機関等へ相談を行った。平成 29 年度 10 月より沖縄県精神保健センターがひきこもり支援を行うとのことなので、連携して行きたい。		

第三部　アンケート報告

１．居場所の利用者アンケート報告

１）利用者アンケートについて　（※アンケートは巻末資料２を参照）

居場所を利用した主に当事者本人（一部家族の方含む）に、居場所の利用者アンケートを実施し、以下について回答を求めた。（回答数：532 人／12 支部）

＜調査内容＞
①居場所利用者の性別　②年齢　③利用者の立場 ④居場所参加回数
⑤居場所への満足度
⑥居場所に参加した理由（自由記述あり）
⑦満足したところ　⑧不満だったところ
⑨居場所でやってもらいたいこと（やってみたいこと）

２）利用者アンケート結果（選択式①～⑥について）

①回答者の性別　②回答者の年代　③回答者の立場について

①回答者の性別は、男性と女性は、ほぼ半数であった（図 3-1）

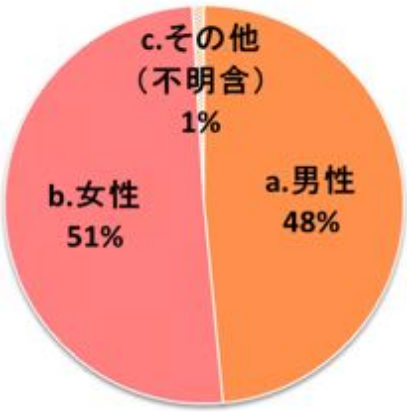


図 3-1　性別

②回答者の年代は、30 代が最も多く、次に 20 代、40 代と続いている。（図 3-2 ）

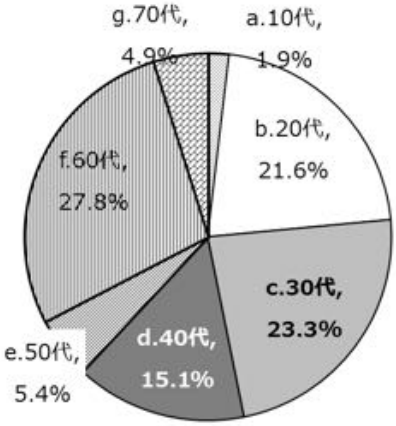


図 3-2　年代

③回答者の立場は、当事者が半数近くを占め、家族が 3 割を超えた。
（図 3-3）

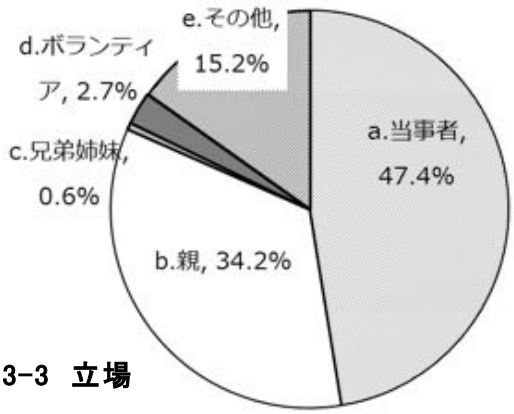


図 3-3　立場

④居場所の参加回数について

回答者のうち、はじめての人が約 15%であり、2 回以上通っているリピーターからの回答が、85%を占めている。
また、約 4 割が、居場所を 2 ～ 9 回通っていると回答、居場所に 10 回以上通い、定着している参加者は、27.5%、わからないと回答した人は、回数が読めない参加者と想定すると、<u>半数近く（46.6%）の人が、居場所に定着後の回答と考えられる。</u>

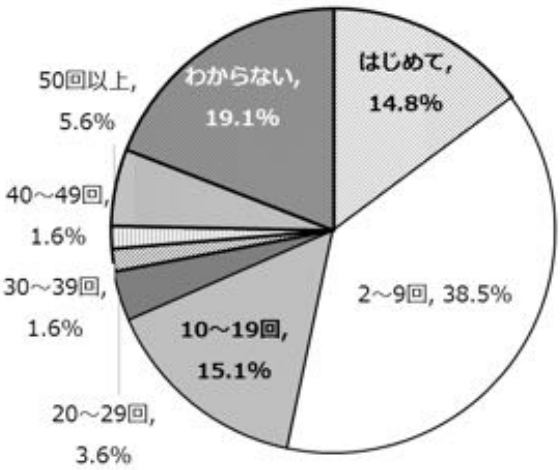


図 3-4 居場所の参加回数

⑤居場所への満足度について

回答者のうち、居場所に何らかの満足を感じた人は、やや満足を含めて、94%に上った。

a.満足	281 人
b.やや満足	214 人
c.やや不満足	26 人
d.不満足	4 人
合計	525(人)

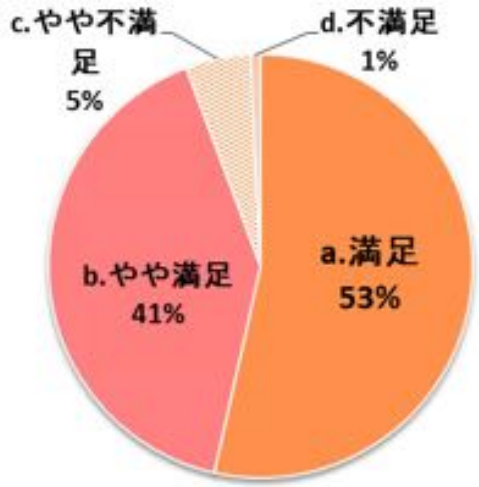


図 3-5 居場所の満足度

⑥居場所に参加した理由 （複数回答）

居場所に参加した理由は、人との出会い、交流が最も多く全体の 4 割を占めた。逆に、就労準備を目的とした利用は最も少なく全体の 1 割以下だった。

表 3-1 居場所に参加した理由

a.人との出会い、交流	**411**	**41%**
b.役立つ情報、スキルを得たい	204	20%
c.就労準備	84	8%
d.安心できる場所だから	184	18%
e.不安や問題について話したり相談したい（自由記述あり※）	132	13%
計	1015	—

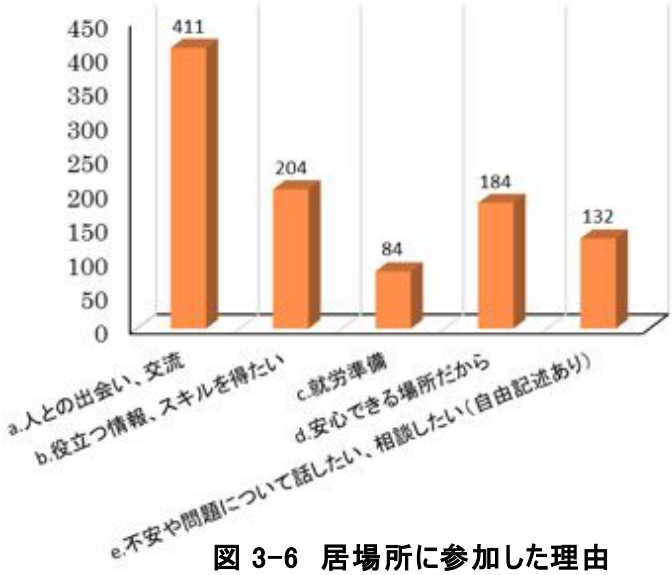


図 3-6 居場所に参加した理由

⑥※居場所に参加してどんな不安や問題について話したいですか（自由記述）

＜当事者本人からの回答まとめ＞（記入の多かった順に）

①就労、仕事、将来について	15 人
②異性・恋愛・ガールフレンド	7 人
③コミュニケーション、人間関係について	6 人
④友達について	3 人
⑤自分の症状の改善や病状について	3 人
⑥問題の乗り越え方、ストレス発散について	2 人
⑦自分の老化について（親亡き後について）	1 人

⑦居場所に参加して満足した点について

参加した当事者の声から、居場所に来てよかった点について、その傾向をまとめた。

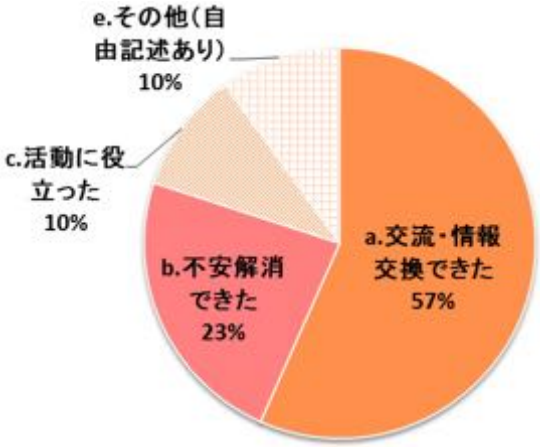


図 3-7 居場所に参加して良かった点

＜孤立の解消～安心、共感、交流＞

・同じような悩みを抱えた人と交流することで、共感できて安心する。また、孤独にならないで済むので、とても大切な場所だと思います。
・同じ悩みを共有でき、がんばろうという気持ちになる。
・経験談や不安なことを吐き出せる場所なのでこれからも来たいです。
・普段は、自分の世界にひきこもることが多く、外出し、他者との交流をしないと、精神的に参ってしまう。
・話し相手がいて良かった。

＜作業や体験を通じての楽しさ、満足、達成感＞

・外に出る機会になった、運動ができた。楽しく話ができた。
・ファームでの作業が良かった。
・お菓子を作ったのは初めてで、とても楽しかった。
・そば打ちを、粉から作ることは初めてだったので、最初は不安でした。でも、最後まで出来たので良かったです。
・うどん作りが面白かったです。
・良かったと思う（出来た感！）

＜各種講座からの情報交換、学び＞

・レジリエンス講座「人は何も意識しないと 9 割がたネガティブなことを考える」というお話はとても役立った。良いことにもっと目を向けようと改めて思いました。
・労働問題について、相談できるところがあると知り、今後の就労を想定して、役立つお話が聞けました。
・職業講話がよかった、外や家ではなかなか考えないことが多いので。

・普通なら会って聞けないような職業の人に、いろいろと質問できた。
・在宅ワークについて、とても詳しく教えていただき、知らないことが、たくさんわかりました。
・今まで知らなかった気付かなかった新しいことを学ぶことができました。

＜パソコン教室、学習支援＞
・教え方が丁寧、わからなくても置いて行かれない。
・丁寧に教えて下さり、日商 PC 検定 3 級を実技が満点で取得できました。
・わからない点を、わかりやすく教えて下さいました。また、役立つ裏技も教えて下さいました。

＜自分自身に対する気づき、変化＞
・本音が言えてスッキリ。不安が少し軽くなった。
・継続して参加することで、外に出ること（外出）への抵抗がなくなった。他人と話すことに慣れることができた。
・一人で家にいる状態ではできないことができた。
・自分の事ばかり考えていたが、話を聞いて（外の事を知ることができて）よかった。
・自分自身の確認、自分がすべきこと、進む方向性など見えてくるようになった。
・これからも生きていく上で、人との関わりはなくてはならないものだと思います。とても難しく、そしてとても大切な事だと思います。これからも私は、この人たちとの出会いを大切にして生きたいです。

⑧居場所に参加して不満だったところ

参加した当事者の声から、居場所に来て不満だった点について、その傾向をまとめた。

＜参加者層の偏り、固定化、新しい参加者がいない＞
・参加者に同年代の人が居ない。
・なかなかいい仲間ができない。
・30 代の人が居ない。
・気の合う人がいない。
・新しい人が増えない。
・年齢層、性別の偏りがある。
・男性の方が多いので、少し入りづらい所がある。
・女性の参加者さんがもっといたらうれしいなあと思います。

＜居場所に慣れるまでの不安感＞
・なじめない。
・個人的につきあう友人ができない（プライベートで信頼できる友人ができない）。
・居場所の中での自分の居場所がまだよく分からない。続けることが大事なのかな。深く考えずフラッと来ればいいのかなぁ。
・他の人との親しさ感やキョリ感がつかめない。

＜その他＞
・（居場所の）スペースがせまい。

・一般の待合と共有スペースのため、声をおさえがちになる。
・(参加者に対し）少しお金が（電車賃くらい）出てくれればよいです
・グループワークは出来るだけ、当事者の年齢ごと(10 才位の間隔で)、ひきこもり状態の程度を見てやってほしい。

⑨居場所でやってもらいたいこと（やってみたいこと）

アンケートから見えた「やりたいこと」について、回答者の自由記述から、望ましい居場所について以下にまとめた。

＜安心に配慮した環境づくり＞
・くつろげる場所であれば一番。
・まずは静かに過ごせる場所。
・ひとりでボーッとしていてもいい雰囲気づくり。

＜相談できる場所に＞
・居場所では相談したい。
・相談したい時に、1 対 1 で話せるスペースと機会があるといい。
・年金相談・社労士紹介。

＜料理教室など＞
・料理、簡単な調理。
・料理教室（みんなでゆるく料理をつくる)。
・簡単な料理などをつくって食事会。
・食に関する企画は人が集まりやすい。

＜レクリエーション（体験型)、スポーツ＞
・スポーツ、旅行、カラオケ、呑み会。
・外で軽い運動、ケガをしない程度の、簡単なスポーツ。
・スポーツ（バドミントン、卓球、バスケ、サッカー、フットサルなど)
・ボーリングやパットゴルフ。
・野外活動がしたい。
・カフェ
・読書会（本を読んでみんなで感想を述べ合う）
・映画上映会
・ボードゲーム（勝ち負け型ではなく協力型。コミュニケーションのツールとしても良いと思う、皆でできるゲーム）
・コミュニケーションにつながるゲーム（トランプ等)
・遠くへ出かける機会をつくる。
・親子ミーティングのようなもの（ステップミーティングなど)
・中学・高校レベルの勉強を教えてほしい。
・NABA ミーティング
・新聞みたいな、みんなの近況ちらし、プログラムづくり。
・「居場所でやってもらいたいこと」を話し合う会。
・このままの楽しくおしゃべりするだけの場所。

・お茶の入れ方教室
・コラージュとか塗り絵等。
・手芸教室
・格安の趣味を楽しむ場（ヨガ etc）

＜講座、勉強会＞
・パソコン教室
・いつ来てもいい学習スペース（PC や他の勉強が自由にできる、自主学習の場）
・経験者の講義を定期的に（３ヶ月に１回位）実施してもらいたい。
・レジリエンス講座
・心理学の勉強（心理学系の学生や大学院生などを講師に招くなど）
・当事者の体験発表
・心理学/哲学勉強会

＜仕事づくり、ボランティア・軽作業など＞
・仕事を作って欲しい。在宅ワークのような仕事。
・軽作業、ネット販売の発送作業等（収入あり）、内職等の仕事が欲しい。
・就労に向かっての準備等、就労情報、仕事おこし。
・次のステップアップの働く場所作り。いろんな働き方を考えていく。
・インストラクターのもとで、いろいろな作業をしたい。
・面接官に来てもらい、ひきこもりや長期就職活動中のイメージをうかがいたい。
・多種多様な職についてる人の話をもっと聞いてみたい（職業講話など）
・ボランティアに参加したい。
・畑に行くこと。

＜他団体、家族との交流イベント、情報交換会＞
・居場所の人以外の方との交流の機会。
・他団体との交流をもっと活発にしてはどうか？
・保護者の方々と当事者を含めた、交流会イベント。
・親、当事者の交流会開催。
・就労の為に役立つ様なイベント。
・宿泊型の当事者対談を夜間に行うなど。
・支援機関などとの情報交換会
・異業種交流会
・親亡き後のライフプランについての意見、情報交換会。
・役に立つ社会資源についての情報交換会（都営交通無料乗車券など）

＜居場所の役割についての声＞
・仲間づくり、友達づくり。
・仲間をつくり、社会に発言したい。
・当事者はひきこもった結果、自己世界の中ですべて完結するループに入っており、現実世界から隔離されている。少しずつ現実世界に引き戻す場所が居場所の役割と考えます。

２．居場所づくり全体の課題と改善策

各支部の居場所づくりにおける課題と改善策を調べるために、事業開始時に運営担当者を対象にアンケート調査（巻末資料 3）を行うと共に、事業開始後の課題と改善策について報告をもとに、その結果を踏まえて今度の居場所運営において求められるものを考えたい。

＜運営上の課題について（複数回答可）＞

課題として最も多く挙がったのは、「財政基盤の安定」の困難さであった。居場所のプログラムの充実や、常設の居場所の設備確保、人材確保ために、財政の安定は必要不可欠であり、そこをどう工夫していくかが、運営者の最大の課題となっている。

人材確保スキルアップ	施設整備拡充	財政基盤の安定	プログラム検討	社会参加検討・職場開拓	家族の意識改革	地域への理解啓発	親亡き後の支援
13	10	20	12	9	8	4	6

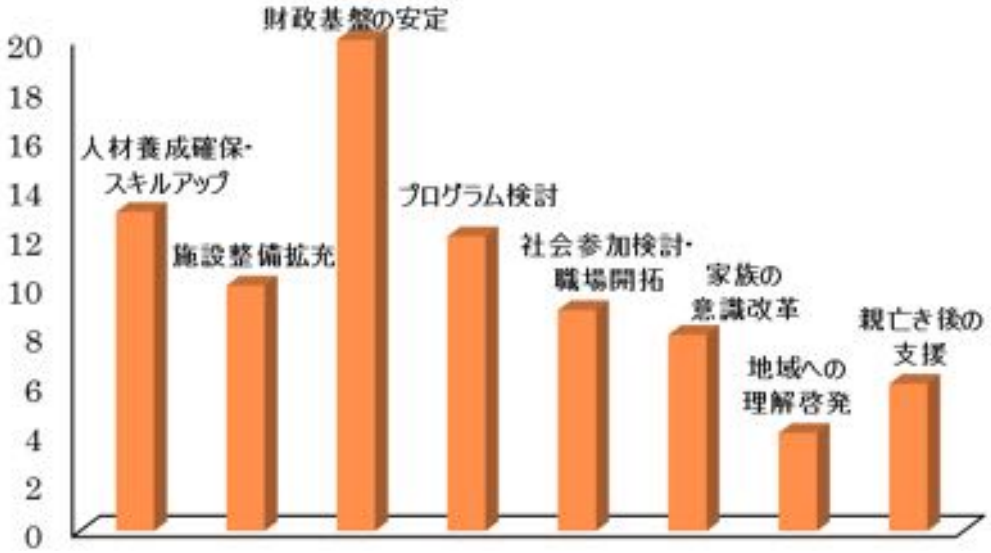


図 3-8　居場所の運営上の課題について

※その他：居場所運営中の具体的課題について

○参加者集め、居場所の入口の問題

・居場所に人が集まらない。どうやって集めるか（青森、加賀、東東京、三重）
・決まった当事者しか出てこないので、未だ出てこない当事者に対してどのように伝えるのか。（浜松）
・当事者が一歩外に出て、居場所につながるにはどうすればよいか（大阪）

○スタッフの役割、技術の問題

・特定のスタッフが役割を負いすぎてしまう、分担、協力体制が取れない（青森）
・ピアサポータの技術問題（三重）

○設備・財政面

・以前より広くなったが、経費も倍になり駐車料金も発生。
・施設の整備が不充分。駐車場がない。
・立地は良いが、町中なので駐車料金がいる。

○居場所環境の問題

・女性の居場所が無く、女性が参加しづらい状況にある（長岡）
・静かな雰囲気を好む方が多かったが、活発な人が参加した場合や、年齢層が極端に離れた場合、グループを分けて開催するのも今後あっても良い（名古屋）
・部屋の中の居場所は人気が無かった。理由は、部屋の中で他人と顔を突き合わせて何か話さなくては、と想像すると嫌になるから。外の居場所ファームは緩やかな就労準備場所として機能（浜松）

○人材確保（後継者不足）の問題

・居場所での人数が多くなると全体への配慮に欠け、対応が困難になる（長岡）
・集まる人数が 10 人以下だったので、世話人 1 名で対応していたが、参加者が多いともう少し手が必要かと感じることがあった（名古屋）
・タイムリーに相談を聞いてあげられなかった。
・元経験者、居場所の世話人（リーダー）的な当事者等の育成をしたいが、やっとリーダーシップがとれるようになったところで、次のステップに向かって卒業していくと活動上ジレンマとなる（香川）

○多様な受け入れの在り方の問題

・参加者によってやりたいことが違うのでそれぞれに担当スタッフが必要（加賀）
・ひきこもり当事者といっても、年齢幅、性別、興味の持ち方などそれぞれに相異なるそれぞれの事情がある（福井）
・ひきこもり当事者が抱える問題は多様であるため居場所で提供できるプログラムには限界があるし人員も不足している（愛知）
・就労支援を始めた人に対し、居場所としてどういうサポートができるのかが不明確になりがちだった（名古屋）
・社会復帰へ向けての具体的な支援の必要性（兵庫）
・利用者の回復度により様々なニーズと役割が必要となる（香川）

○参加者の途絶の問題

・来なくなってしまった参加者への対応とフォローをどうするか。→居場所スタッフが手分けして、近況を把握するための手紙（はがき）や電話はどうであろうか（千葉）

○必要機関との連携の問題

・障害年金に関する質問を受けた時、専門機関（年金事務所）へすぐに付添ができればよかったが、世話人不在になるため出られなかった。必要機関と連携が必要。

○居場所への参加が長期化してしまう問題

居場所に長くとどまってもらっても問題であり、居心地が良すぎても次のステップにつながらなければ問題である。そのため、初期段階に当事者の十分なアセスメントが必要（広島）

○40 代以降の当事者の居場所について

自営業以外の 39 歳以上の当事者は、居場所から何処へ旅立っていけばいいのか(香川)

＜居場所に来なくなった参加者の対応について＞

居場所運営上の課題ともなっている居場所の利用者が突然来なくなってしまった場合の対応方法について尋ねたところ、ほとんどの支部が何らかの対応を取っていることがわかった（複数回答）。

①電話、手紙、メール等での連絡	②会報などの情報誌の発送	③家族とは連絡を取る	④何もしない
12	11	11	1

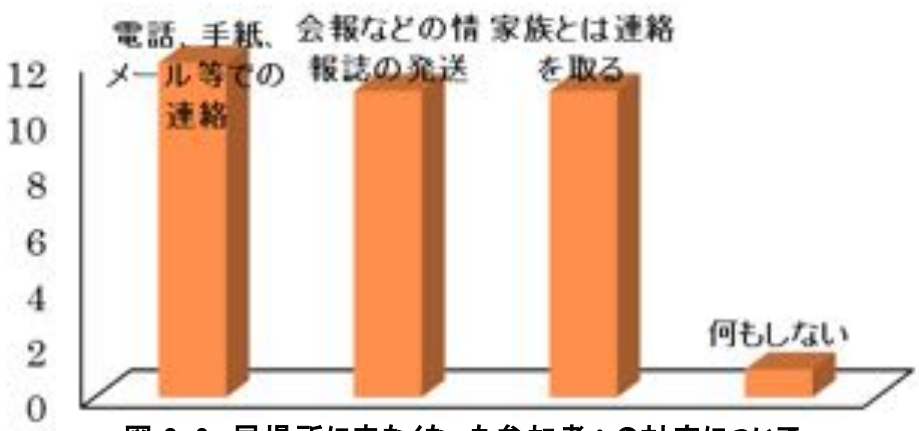


図 3-9　居場所に来なくなった参加者への対応について

※自由記述（利用者が来なくなった場合について）

・親と連携を取り合って経過を知る。
・他の当事者がメールのやり取りをしている場合があるので、大体の近況報告は入って来る。
・①～③の対応を行うが、時と場合により、他支援機関へつなげるサポートも行う。
・①～③を行うが、理由があってそのようにしたと考えられる場合は、そっとしておく。必要があれば言ってくるだろうと思われるので。

＜利用者の参加年数と長期化の対応について＞

居場所を利用するひきこもり当事者、経験者の参加年数について尋ねた。特に長期化（10 年以上にわたり利用）している利用者については、全体の 8%に及んだ。また、長期化にどのように対応しているかについて回答を求めた。

1年未満	71 人
3年未満	57 人
7年未満	47 人
10 年未満	19 人
10 年以上	17 人
合計	211 人

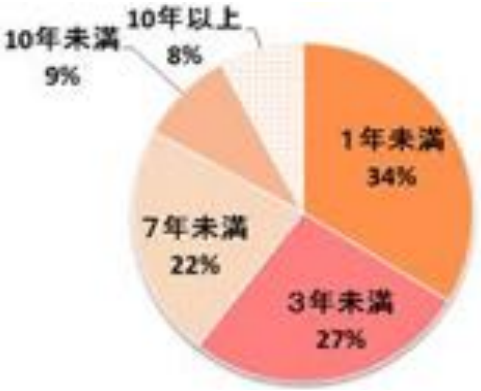


図 3-9　居場所利用者の参加年数

※10 年以上の長期者がいる方にどんな対応をしているか

・サポートステーションのスタッフが来て、活動と就労自立支援の説明をした。
顔が見える関係づくりで必要としている人はつながっている（千葉）
・電話で話を聞くようにしています。（電話がかかってくるため）（加賀）
・働けない事情を抱えている方にとって、日常生活が安定するような支援を行う。（名古屋）
・医師による診断、精神療法、投薬（長岡）

※対応していない場合の理由について
・本人に社会に出ようとする気力、きっかけがなく、拒絶の状態が改善されない。
・関係妄想の疾患が強く、進展できない。

＜はじめて居場所に来た人への対応＞

・居場所に来たことに対しての、歓迎、ねぎらい、安心（東京）
・声かけを注意すること。
・スタッフがなるべくついて一人にさせない（不安にさせない。なかなか思うようにいきませんが）次回来てくれるよう帰る時に声かけをする。次回の前日に電話を入れて誘う（できれば）（千葉）
・なるべくマンツーマン（名古屋）
・当事者の緊張をほぐし、気持ちをしっかりと受け止められるよう心がけている。（大阪）
・気を遣わず、意思表示を出来る環境づくり。その悩みや状況は一人だけじゃないという事実を伝える（兵庫）
・学び合いの気持ちを忘れずに。支え合いの土台は、お互いを知り合うことから始まります・・・と伝えます。（豊田）
・来てくださったことをねぎらう。過去を否定している人にはよかったことを見つけ出して確認をしていただく。継続していけば必ずいいご縁にめぐりあうと継続の大事さを言う（福岡）
・何か、ひっかかり（本人とのつながり）が見つかるまで待つ（沖縄）
・①やっとの思いで決断、勇気を出して来ることができた居場所なので、安心できる居場所であること。
②グループに入れなくて別の部屋にいても、当事者は聞いてくれているので、邪魔にならない程度に話しかける。飲み物等（お茶、ジュース、コーヒーなど）も注文を聞いて当事者が出してあげる。
③初参加でもグループに入って、プログラムができる当事者には、支援者（元経験者）に対応をお願いしている。親御さんが同行の場合は別室で話しを聞くようにしている。（香川）

＜課題に対する具体的改善策について＞

居場所づくりの今後について、各支部からの報告による具体的改善策をまとめた。

○財政基盤の安定について

・助成金の積極的活用。
・自治体へのひきこもり者支援事業補助金交付要綱制定（香川）

○居場所への繋げ方（入口）

・チラシだけては参加者が集まらない。情報発信、周知のあり方を工夫する必要。
・今現在もひきこもり状態にある人の興味関心を、親の聴き取りから把握し、アプローチする。
・ハガキを出す、文通などで、つながり（輪）をつくる。

○当事者への安心に配慮した場づくりのために

・当事者に限定した居場所づくり。
・当事者が気を遣わず、意思表示を出来る環境づくり。
・ひとりひとりに応じた環境改善と、もの言える居場所のための配慮を。
例）トイレなど、他人が居ると使えない、居られない参加者が。可能な限りの状況の改善と、気を遣わず、意思表示を出来る環境づくりが必要（兵庫）

・①その人の状態をよく観察し対応する。→②ゆるやかな受け入れ（初めは余りかまいすぎない）→③親と支援者の連携を大切にする（浜松）
・自分の好きなように過ごすことを大切にしていると共に、何を言わんとしているかをじっと見て対応するようにしています（加賀）
・居場所を１か所に固定せず、様々な場所を居場所としていく（福井）

○プログラムの開発、多様なメニュー作り～体験を増やす・広げる・自主性・自由～

・魅力的な居場所プログラムの開発（レクレーション等の遊び、野外活動など）
・当事者本人の声を拾い居場所づくりの一層の充実化（愛知）
・本人が集まる魅力ある体験型の居場所づくりの推進へ（広島）
（当事者同士の関与の仕方を工夫し、触れ合う時間を作る、達成感を経験をさせる）
・スモールステップ学習の意識を常に持って、どんなに小さくてもよいから参加者が一歩前進するという意識をもって運営。発声練習、柔軟体操、リラクゼーション、大きな声で朗読、定型化したあいさつや心の表現、笑いを大きな声で行い、心と体を使う時間を設ける。テレワーク（在宅ワーク）の研究も（福井）
例：事務所内で３つのブースを作り、各々異なったことに取り組んでもらい、途中お茶時間をとり全員で集まり、雑談情報交換の場としたいと思います（福井）。

○地域資源や他機関との連携促進（入口から出口まで）

・入口：地域の民生委員や地域保健所等との連携を図り、居場所に参加できる体制づくりを、行政との強い協力体制の下に推し進める。ピアサポーター制度の実質的推進。既存の NPO 等との連携（千葉）
・出口：若者の自己主張や自立支援に貢献できる居場所づくりを、地域のサポートステーションや諸支援センターなどとの連携を図りながらの未来思考的取り組みを考える時期かも知れない。
・他の自助会との交流会（名古屋）

○オーダーメイドな支援～ひとりひとりのペースや理解力に応じた対応～
・個性、生い立ち、環境、年齢などが違うので、それぞれの個性にあったきめ細やかな支援が必要。

○自助力の構築～当事者活動の推進～
・当事者の得意なことをリーダーシップをとってやってもらう。それに対する対価を払うようにする（香川）
・自律する意思を涵養するために、当事者、支援者集団が自ら社会で生きて行く方法をサバイバルとして真剣に考え、試行錯誤できる自助活動の推進（福岡）
・実施運営に若者の関与を増やす事(豊田)
→若者の会スケジュール部会の立上げと実施…２７年５月から若者の会居場所運営の月次活動予定表の企画立案作業に大地の会の先輩、卒業生２名（１名は月次のピアサポーターの役割の人物)加わって頂き、若者の感性を発揮して頂きました。
実際に彼らの意見で実施した事柄があります。他面立案の構成とか主旨説明の中で活動の意味合いを伝承しています。今後はこの作業部会に居場所参加者を加えていきたいと思っています。

○運営スタッフが心がけることについて
どんな問題もオープンにしていくこと、問題が起こった時は委員会で十分審議する。一人の決断で動かないこと。

○家族の老後の問題
・これには、行政へのアプローチが必要。困窮者自立支援の枠の中で、一人一人の将来についての不安が自立を阻害しないよう支援したい（福岡)。

○家族と離れて暮らす場合の改善策
・ひきこもりの子や、その家族が、場合によって離れて暮らした方が良いケースは多いが、そのような時の為のシェアハウスを作りたい（浜松）

○長期高年齢化に対して
・親たちをエンパワーすること、親の居場所づくりと身近な地域でのアウトリーチ（福岡）
・遠い場所でお金のかかるところに親は来ない。お金をたいして使わずに、地域地域で少人数の親の集いをやっていく。ピアの力、親同志の助け合いをやっていく。
・高齢化する親と若者が希望をもって生きていけるような仕組みを真剣に考えていきたいと思っている。できる限り、情報や技術、能力を持っている人の紹介、行政の理解協力を仰ぎ、連携力を持っていく。

○親が元気になる場として
・親が元気になることも、とても大切です。親として、そばにいる他者の力になりたいし、また、力になって欲しいので居場所を発展させたい。活動に必要な費用を作るために、居場所で皆で作業をしたいです（香川）
・自分の子ではない当事者との触れ合いの機会から、我が子への見方も変わり、当事者と共に体験することで励ましをもらい、家族の空気も明るくなった（東京、広島）

＜考察＞

以上の利用者アンケート、及び運営者アンケートの２つの調査から、居場所に対する当事者本人、及び、親、家族会スタッフの声を集めることができた。その結果をもとに、今後の「居場所づくり」の方向性を考えてみたい。

＜利用者アンケートからの考察＞

居場所全体に対する満足度は 94%であった（図 3-5)。居場所づくりを「はじめて」行った支部が 41%（図 1-1）だったことから考えると、居場所づくりの満足度としては、比較的高い数字であったと思われる。

また、アンケート回答した参加者のうち、はじめて居場所に参加した人が 14.8%であり、2 回以上通っているリピーターからの回答が、8 割以上を占めた（図 3-4)。全体の傾向では、男性、女性はおよそ半々であり（図 3-1)、そのうちの約半数は、当事者、経験者の参加(47.4%）であり、親の参加は 3 割を占めた（図 3-3)。

回答者の年代は、30 代(23.3%）が最も多く、次に 20 代(21.6%)、40 代(15.1%)と続いている（図 3-2)。この結果は、当会による家族会を対象とした全国調査における本人の平均年齢 33.2 歳（2015）という結果からも見てとれる。

＜居場所への参加動機・良かった点・不満だった点について（本人の声から）＞

参加動機として「人との出会い、交流」が 4 割にのぼった（表 3－1,図 3－6)。実際に良かった点も「交流、情報交換ができた」が 57%に上った（図 3－7)。「同じような悩みを抱えた人と交流することで、共感できて安心する。孤独にならないで済むので、とても大切な場所」であり、孤立の解消と共に「安心できる場所だから」という理由が、居場所のリピート（定着）につながっていることがわかった。

その他の参加動機に「役立つ情報、スキルを得たい」20%、「不安や問題について話したり相談したい」13%、「就労準備」８%など、当事者本人それぞれが必要とする情報交換やスキル取得、及び悩みの相談ができる場所として、居場所が期待されていることがわかる。(表 3-1)

居場所に参加して良かったこととして、交流、情報交換、不安解消の他に、「作業や体験を通じての楽しさ、達成感」、「各種講座などの学び、パソコン教室、学習支援」に対する満足が高く、参加動機とのリンクが見られた。

また、内面の気づきに関する記述も見られた。人や外部との関わりに少しずつ慣れていく過程で、「自分の事ばかり考えていたが、外の事を知ることができてよかった」、「自分自身の確認、自分がすべきこと、進む方向性など見えてくるようになった」など、居場所に通い続けることで自己を変化させていけるプロセスが読み取れる。

他方、居場所に参加して不満だった点として、「参加者層の偏り、固定化」が挙がった。「同年代の人が居ない」、「新しい人が増えない」、「男性の方が多いので、少し入りづらい所がある」、「居場所に親が多くて居づらい」など参加者層（年代、性別）の固定化が、大きな要因であることがわかった。また、「個人的につきあう友人ができない」（プライベートで信頼できる友人ができない）といった記述もあり、居場所での「仲間づくり、友達づくり」を、どのようにサポートしていくかも（利用者同士の交流促進)、当事者本人としての大きな課題であることがわかる。

＜居場所でやってもらいたいこと、やってみたいことについて＞

本人の声を集めたものが 85 ページである（回答はすべて自由記述)。居場所では、

悩みを話したい、相談したいという声に対して、料理やレクリエーション（体験）やスポーツなど、楽しい時間や体験を一緒に共有することへの興味関心が比較的高いことがわかった。話すことが苦手な人でも、楽しい体験の共有を通じて、他者と接することに慣れていくこと、またコミュニケーション訓練にも役立っていることが読み取れる。

また、「仕事づくり・ボランティア・軽作業」についての興味や職業講話などへの関心も高かった。仲間づくりの次のステップアップとして、居場所から仕事につながりたいという希望を持っている当事者は少なくないと考えられる。

「他団体や家族との交流イベント」の希望も多くみられた。「参加者の固定化」への対策として、新しい出会いと交流の機会を作っていくことが、当事者本人にとっても居場所運営の活性化にとっても大切な点であると思われる。

＜運営者アンケートからの考察～居場所運営の主な課題について～＞

居場所運営の課題として多かったのは、財政基盤（87 ページ、図 3-8）であったが、その背景には、居場所に集う当事者の「多様性」に対応するための財源と人材不足がある。「ひきこもり当事者が抱える問題は多様であるため居場所で提供できるプログラムには限界があるし人員も不足している」、「利用者の回復度により様々なニーズと役割が必要となる」、「参加者によってやりたいことが違うのでそれぞれに担当スタッフが必要」といった現状に対応するための課題である。一人一人にきめ細かなサポートを行おうとすればするほど課題に直面するというジレンマを感じながら運営している支部が少なくない。実際、この財源不足を補うために、ボランティアスタッフ（53%）の力が居場所を支えていることが読み取れる。（25 ページ、図 1-2）

＜親と本人が一緒に活動する制約の無い居場所～親と本人のピアサポート～＞

長期高年齢化が進む中、地域に 40 歳代以降の当事者が気兼ねなく通える居場所が少ない現状に対して、家族会は「年齢制限の無い居場所」を開設し、年齢の壁や制約の少ない居場所づくりを行っていることがわかる（26 ページ、図 1-6）。

また、家族会の居場所として、当事者と家族が参加できる居場所は 75%に上り、家族との協働で居場所が実施されていることがわかった。（25 ページ、図 1 -5）なお、居場所が、親にとっても、自信と元気を取り戻す場となっていたことが、自由記述から読み取れる。居場所を通じて「自分の子ではない当事者との触れ合いの機会から、我が子への見方も変わり、当事者と共に体験することで励ましをもらい、家族の空気も明るくなった」（92 ページ）としている。これは、サポートする側の親が、実は、当事者からサポートされていたという体験でもある。居場所での親と本人の関わり合いの中で、ピア（仲間）としてサポートし合い、元気をもらい合う関係は、家族会ならではの相乗効果であろう。

＜居場所における自助力の構築＞

当会は、全国のひきこもり当事者団体として、居場所づくりにおいても、自助力の構築を打ち出す傾向が見られた。「当事者の得意なことをリーダーシップをとってやってもらう。それに対する対価を払うようにする」（香川）（92 ページ）。居場所運営に、積極的に参画してもらい、本人が主体性をもって生きていくための試行錯誤を応援する取り組みである。

家族会の居場所を、社会との接点の場として捉え、当事者本人の体験の場を、本人と共に開拓していく動きが期待される。

３．今後の居場所づくりに求められるもの

＜他機関の取組みから～今後の居場所づくりの参考として～＞

平成 28 年 2 月 27 日（土）、28 日（日）に福島で実施された「第 11 回全国若者・ひきこもり協同実践交流会」に参加した。これは、ひきこもりをはじめとする若者支援に関わる現場の人々が、学びあい議論することを通して、各支援現場の取り組みを再考し、協同で社会を創るための実践交流会である。支援者や当事者、さまざまな立場の人が「共に未来を語るつながり」を目指し、全国各地の取り組みから学びを深めている。この実践交流会の参加は、本事業の一環である「居場所運営のノウハウ共有のための会合への参加」を目的としている。

各々が、居場所を運営する上で、参考にしたいテーマ別の実践交流会に参加した。

●テーマ別実践交流会　（報告支部：千葉）

「居場所の入口問題 ： 居場所をどうつくり、増やし、それを若者たちに届けていくか？」

「居場所の出口問題：社会参加の拠点となる、居場所のありかたについて」

＜参考としたい意見～シンポジウム―若手支援者のシンポジストの発言から＞

・ベテランが若者の本当の気持ちをくみ上げられるか？

・若者の支援者が若者の代表として発言できているか？

・ひきこもり、大きなレールから外れて初めて自分の人生を考えられるようになった。

・農業活動を通して、仕事をすることだけでなく、暮らしを作っていくという考えが出てきた。

・レールから外れると、楽しむことはやってはいけないと思っていたか？　それを受け入れてくれる社会が必要。

・働いてない○○さんではなく、○○さんはこれこれの特性を持っているという社会・地域にしたい。

＜他機関の取組みから参考になった改善点＞

「ぷらっとほーむ」（山形）は「排除・孤立に陥りがちな若い世代の居場所／学びの場づくり」を目的に活動し、20～30 代の若者 12 人によって運営されている。「ぷらっとほーむ」での居場所における５段階発達の過程が参考となった。

① 安心していられる、本音で弱音を吐ける場を開く。

② 人々の様々なニーズを引き受ける。

③ ニーズと資源・文化のユニークな結合が生まれる。

④ ＜居場所＞発の価値が外の世界に広がっていく。

⑤ ＜居場所＞のネットワークが地域に張り巡らされていく。

●**テーマ別実践交流会**（報告支部：広島もみじの会、加賀いまここ親の会、本部事務局）

「仕事づくりへの挑戦」

～適応させるためだけの就労支援ではなく、本人が仕事の経験値を貯め、主体的に力を発揮することが出来る場の創造へ～

＜参考にしたい点について＞

１．Moonlight Project 「月あかりの計画」と仕事 ―太鼓集団「響」と HIBIKICAFÉ という場所―（埼玉　平野和弘氏 ）の発表より。同氏は、行政の助成を受けると、対象から漏れる当事者が出てくるとの懸念や、成果を求められることのプレッシャー等の負担を考え、助成をもらわずに支援している。また、 カフェの場所は妻の実家をつくり変えて運営している。

支援者の本気度が伝わってきた。これが当事者にも自然と伝わっているのではないかと感じた。

２．仕事づくりは、人とのつながりを作ることから

・一杯のコーヒーを二杯分のお金を払って支援する「恩送りコーヒー」の発想が素晴らしい。
・困りごとを事業化していくことが必要。
・「協力してください」では誰もしない。「いっしょにやろう！」だ。
・支援するのではなく、主体性を持たせる。
・やっぱりカフェがいい！　みんなが楽しく集まるところ。
・ポイントは「わくわく」「楽しく」「みんないっしょに」。
・わくわくが無ければ事業は続かない。つらいこと、我慢は長続きしない。
・話し合いを大切に進める。みんな納得してやっているかがポイント。
・多くの人とつながることで可能性は広がる。

３．創造集団 440Hz の長井岳氏（福島）から、「自分からはじまる会社～不登校経験者が設立した社会的企業～」について発表があった。そこは、「マイノリティが生きやすい社会」を模索した会社（映像・デザイン）。「ルールありきではなく、その人ありき」。勤務日数も人それぞれで、無理強いはしない。社会で得た困難さ（上下関係、人間関係、職場に適さなければいけない自分）から、過剰に適応し、疲弊してしまった実体験から、「自分の望むかたちでの社会参加」を模索した。

そこに集うメンバーたちは、「自分が何者で、どう生きるか？　何が好きか？」など、一人一人が大切にしたいものを見失わずに、仕事することを大切にしている。一緒に行えるのは、「信頼関係があるから」。困難を共有し、話し合うことで、信頼感を深めている。

自分の望むかたちでの社会参加のために、「やりたいことと、求められることをすり合わせる」、「プロのクオリティをめざし、経験を積み重ねる」。

ひきこもりを経験した者が、既成の就労形態にこだわらず、自分たちが働きやすい環境（会社）で、自分たちがやりたいことを実現するための事例として大変有意義な学びとなった。

●**テーマ別実践交流会**（報告支部：東京楽の会リーラ、広島もみじの会）

「生活支援のあり方を探る」

～「生活困窮者自立支援制度」の中で、就労支援には留まらない継続的な支援として、生活の学び直しを含めた生活支援のあり方が問われ始めている～

＜参考なった点について＞

・生活困窮者自立支援法成立の背景について、参考になった。もともとホームレス支援等を実施していたＮＰＯ等の提言が政府を動かしたのだった。福祉＋労働の観点で作られている（厚労省としては異例）。

・医療以外の地域資源が全て集まった。→県、市、社協、受託団体、支援団体、家族会、行政書士等 15～20 名が参加していたが、市町によって取り組みの温度差の大きいことが良く分かった。

・困窮者窓口は、社協ががっちり担っている。→全国的には社協が最も多く受託しているが、福祉に重心が傾き過ぎていないか等、懸念もでていた。

・支援団体（生活困窮相談受託団体の体制）としては、対応のプロセスがしっかりしていることが重要である。（見立て→支援プラン→実行）

・北九州の受託団体から「家族全体まるごと支援」についての発表があった。→ 家庭全体が疲弊し、ひきこもりだけでなく、障害、貧困、介護、病気、虐待、等々様々な困難を抱えていることが多く、丸ごと支援が必須の状況になっている。

・KHJ 家族会（東京）では、人口比を考えると、地域に密着した家族会を作ることが理想的である。（具体的に動き始めたのは、八王子市）

・生活困窮者自立支援制度の中間的就労について、行政から認定されなければならないとの認識を持っていたが、必ずしも必要がない。発表の中であったのは、中間的就労場所を 116 事業所紹介できるが、それも有給であり、中間的就労を行う事業者としての認定は受けていないということだった。

・任意事業のとらえ方について、やらなくてもいいようにとらえられがちだが、基本的には必須事業と同様に任意事業もやらなければ自立支援に繋がらない。各自治体や受託窓口が、これをやるか否かにより行政の本気度が伝わってくると考えるべき。

＜各地の困窮者自立相談支援機関の事例から＞

・北海道の空知サポートセンター（受託団体は、NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター） では、自主運営事業として、地域づくり、支援ネットワークづくり、生活支援（共同生活の場所を自主財源で運営）を行っている。事業運営には地域の協力が必要なことや、制度のはざまにいて制度を利用できない人の支援をするとの思いから実施している。例えば、自主運営事業の「わくわーく」の中で、生活支援として、町内の空き家を提供してもらい、改修して、収入のない当事者（現在男性限定）と暮らしている。ここを家庭生活の学び直しの場としても活用している。

・京都ジョブパークの運営をしている一般社団法人京都自立就労サポートセンターでは、6 か月間の就労定着支援ですべてが解決するわけではないとの思いから、自主的に友の会を設置し、当事者（OB）企画のもと、バーベキューなどのイベントなどを実施し、当事者間でのつながりを継続している組織もあることに感心した。

●特別分科会　「家族交流会」（報告支部：KHJ 福島県 花ももの会 ）

特別分科会③「家族交流会」では、家族会の現状を報告しつつ、まだ家族会を立ち上げて間もない方々にも自分たちの足場を確認してもらい、これから進む方向のイメージ作りの助けになることを目的とした。そのため、全国組織を持つ「KHJ ひきこもり家族会連合会」の協力を得た。プログラムは、「家族会の今」「当事者会の今」「ひきこもり大学」として、二日間にわたり、全 3 回で開催した。

＜当事者交流会①～家族や家族会の現状を共有し理解を深める交流会～＞

その初回である「当事者交流会①～家族や家族会の現状を共有し理解を深める交流会～」では、開催する前提として、コーディネーター・発表者の方に「ご自分のこれまでの経験を含め、ひきこもり大学の親バージョンのニュアンスを込めて、話しをしてもらいたい」ということと、家族もまた、自分は自分でいいと思えるプロセスを経てきていると思われるが、「『その後をどう生きるのか』も視野に入れて、それぞれの家族会の現状と課題を話してもらいたい」ということを伝えた。具体的には以下ａ、b、c の 3 点であった。

a、家族会を立ち上げた目的とその活動をしようと思ったきっかけあるいは理由
（なぜ家族会？）

b、家族会で活動して、何が変わったのか？どう変わったのか？
（家族会は何を変えたのか）

c、その変化は、これからの生き方に繋がっていくものなのか？
（これからの家族会）

＜コーディネーター・発表者＞

コーディネーター：NPO 法人教育研究所 所長　　牟田武生氏

発表者（発表順）：（福島県）「ふくしま花ももの会」千葉 桂子
（新潟県）N PO 法人 KHJ にいがた「秋桜の会」三膳克弥氏
（静岡県）NPO 法人「てくてく」山本洋見氏
（山形県）NPO 法人「から・ころセンター」伊藤正俊氏

KHJ 家族会連合会の取り組み：（KHJ 本部より副理事長：伊藤正俊氏）

KHJ 家族会の取組みについて話す伊藤正俊氏

＜現在の家族や家族会の現状について＞

家族の孤立化を防止するためにも「家族会」の存在意義が語られたが、課題や運営だけでなく、なぜ「家族会」だったのか、実際に「家族会」を運営している代表の方からご自分の経験を踏まえた具体的な話が聞くことができた。

○　コーディネーター牟田氏⇒現在のひきこもり問題の当事者と家族の高齢化と長期化が伝えられ、土台である家族の孤立化を防ぐために支援者と地域と家族のつながりを作る大切さが語られた。

○「ふくしま花ももの会」（福島県）千葉⇒発足間もない会であり、今後、会としての活動をどのように進めて行けばよいか暗中模索していること。親が本当に子どもを理解する事は、親自身が自分を理解することとリンクしているのではないかと話した。

○　「にいがた秋桜の会」（新潟県）三膳氏⇒ひきこもりの子どもを持つ親として、日常の生活を子どもと向き合いながら、他の家族と連帯し地域に「家族会」を根付かせる活動をしていること。家族会を継続する意味を強く感じていることが語られた。

○　「てくてく」（静岡県）山本氏⇒自分の大好きな植物を育て作物を収穫する農業を通じて、ひきこもりの当事者を支援する中で、地域とのつながりも増えてきたこと。お互いに繋がるためには、自分をまず生かすこと、楽しむことを考えていくことが大切であると話された。

○　「から・ころセンター」（山形県）伊藤氏⇒実際に当事者の居場所やＢ型就労を運営している立場から、当事者のそのままを理解していくことの大切さについて語られた。関係性が構築されていくことで支援することが可能になって行く。当事者同士の関係性も広がって行く。その関係性をお互いに信頼できるようなものにしていくことが望まれるとのことだった。

＜KHJ 家族会連合会について説明＞

KHJ 家族会連合会について KHJ 家族会連合会副会長・伊藤正俊氏より説明があった。また「家族会フォーマット」について説明があった。このフォーマットは、家族会の成長ステップと考えられる。

ステップ 1⇒家族会の立ち上げ　目的の明確化と組織化

ステップ 2⇒家族会の運営にて　例会継続と「親の居場所」と「当事者の居場所」への道筋

ステップ 3⇒地域連携について　家族会の事業化と、地域の事業所（社会参加・就労等）との連携

これからの「家族会」は、お互いに本音が言える関係の中で安心感を持ち、フラットな関係の中で学び合い、自立へ向けて連携しつつ、子どもも家族も社会と繋がっていくことができるとのことだった。

＜まとめ＞

現在も、家族のひきこもりに向き合う代表の方もおられ、ご自身の体験からの言葉が心にしみた。「家族会」が、当事者への変化を目的としつつ、実は家族そのものの変化を促していることが語られたと思う。ひきこもりは、家族の熱意や愛情があれば何とかなるわけではないない。ひきこもりが、現代社会の課題であれば、当事者を抱える家族であることを踏まえつつも、「ひきこもりを学び理解する」という視点の獲得や、家族みずからの行動の変化が求められていると思われた。

＜当事者交流会②～当事者自身が運営する居場所づくりについての意見交換会～＞

当事者の会を運営していくにあたって、当事者自身が、どのような工夫をしているのか、また、当事者自身が運営に関わっている場合、どのような課題が見られるのか、そして今、それにどう向き合っているのかについて、各地で居場所づくりを実践しているひきこもり経験者を交えて意見交換を行った。

○当事者会の運営にあたって心がけていること　（東京 楽の会リーラ：大橋さん）

１．会のリーダーが孤立しないこと（無理させすぎない、ひとりが抱えすぎない）

２．役割分担をリスト化する

（任されることで、信用されている。必要とされているということがわかる）

３．仲間を信じる（任せて、信じて、待つ）

４．当事者自身の限界を知る（当事者だけでやると煮詰まるため外部との協働が必要）

例）庵の成功（100 人超え）・・・・当事者の声を徹底的に大切にしている居場所。

当事者の視野を広げるために、当事者以外の人を入れる。当事者と外部との垣根を越えて協働する。具体的には、当事者が行う範囲と、外部の方にお任せする範囲を決める。意見交換は積極的に行っていく。

５．親と子の対話の重要性

ひきこもり大学の親版があってほしい。自分と向き合う力がある親御さん（当事者の視点に立ちたいと思う親御さん）の発表と対話の場。

※居場所で親子の対話集会を促進へ：自分の親、自分の子とは、うまくいかない場合は多いが、他人の親、他人の子（当事者）からの話は、素直に耳を傾けられることが多い。対話をしながら、親と子が互いの気持ちを受け止め理解し合おうとする過程が互いを勇気づける。（本人の視点、親の視点を知ることができる）

６．青年部会を作る（本人の視点を取り入れた活動推進へ）

○当事者による居場所づくりの工夫　（神奈川：割田さん　愛知：伊神さん）

・一人でいたい人も自由にいられる居場所（一人でくつろげるスペースは必ず作っておく）

・本当に話したくなったら話せる場所づくり

（ここは、悩みや困っていることを話てもいい場所だよ。人の話を聴くのが難しい状態の人には、自己紹介ファイルなど渡したり）

・居場所の最初に、配慮してほしいことを聞いておく等。

○仕事が一人に集中してしまう課題について　（福島リーブル：　佐藤さん）

3 人の当事者で居場所を始めてから、だんだん一体感を持てなくなってきた。役割分担が不明確であり（広報ホームページ担当だけは作ったが）、一人に仕事が集中してしまった。最終的には、膝突き合わせて話し合い、意思決定のラインを作っていく必要がある。

○当事者と家族が協働していく可能性について

親も当事者であるという視点で考えると排除はできない。親が居場所にとって有益なのであれば、柔軟に取り入れていきたい。「親」を全て同じに見ない。本人の視点に立てる親御さんとは、協働の

可能性はある（実は、本人が親の会に入っていくよりも、親が本人の居場所に入っていく方が抵抗感がある場合が多かったりする）。
※ただし親御さんが入る場合も、当事者・経験者主導のもとに進めていく事がベストである。居場所に親御さんを入れると当事者と対立し合う場面もあるので、そのことを留意をすることも大事。

（写真右）居場所づくりについて発表する、青森さくらの会会長の下山さん。昨年、初めて居場所を開いた。今年は、北海道新幹線開通に伴い、青森、北海道と相互交流、連携を強化。当事者研究大会とのネットワークの推進などを行っていく予定。

＜まとめ～今後の居場所づくりの方向について～＞

本事業全体を通して見えた、今後、家族会が取り組む居場所づくりの方向性について考える。

１．ひとりひとりに合った居場所サポートの実践

・本人の関心や回復の度合いに合わせた多様な居場所のあり方と、制約のない、垣根の無い交流の居場所づくり。（いろいろな人との関わり、いろんな考え、話しが聞けること。当事者主体の多様な居場所の型の発想を持ち寄る等）

２．居場所の入口から出口まで積極的な地域連携により選択肢を広げていく
～居場所と社会参加の場を一体的に作り出す取り組みへ～

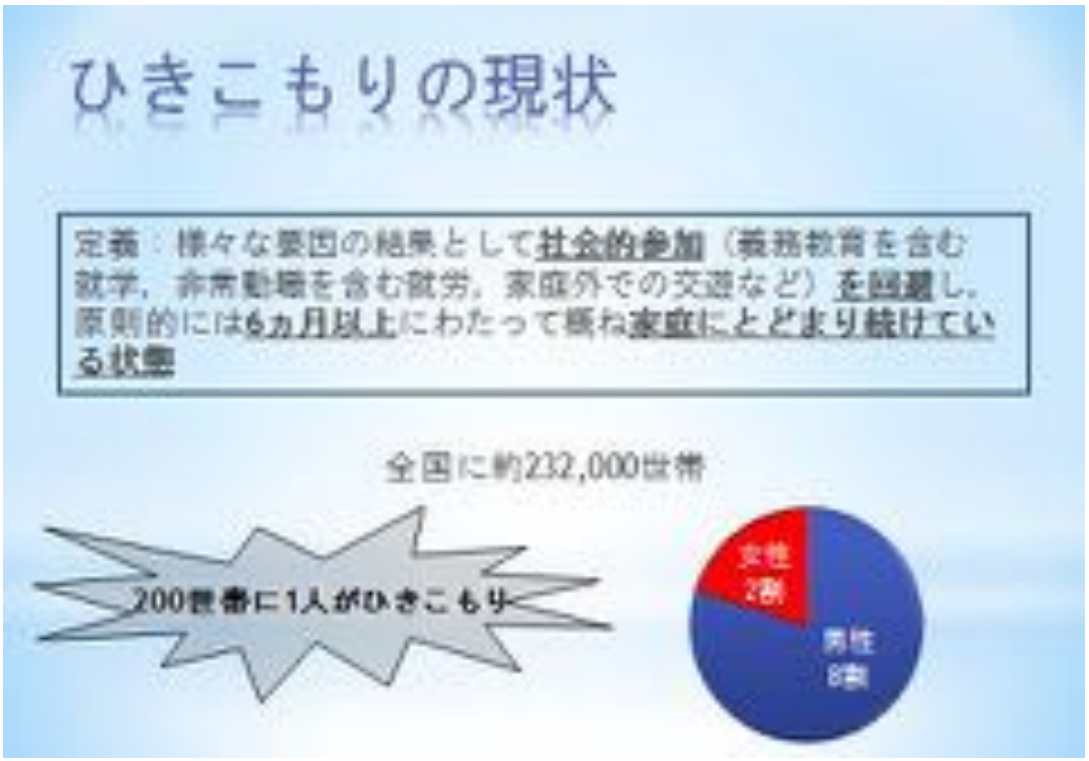
○入口：家族会が地域の拠点に～まず行ける場所、居られる場所の提供～
地域の民生委員や地域保健所等との連携を図り、居場所に参加できる体制づくりを、行政との強い協力体制の下に推し進める。既存の NPO 等とも積極的に連携。
↓
体験やレクリエーション交流、人との関わりに慣れる環境と、参加者同士の仲間づくりのための機会の提供。その上でコミュニケーション能力の取り戻し。当事者の意見、考えが出せる場に。当事者自らが発案する居場所（自主性、自由、自助）。
↓
○出口：社会参加へのステップ
居場所だけで終わらない、社会復帰へ向けての具体的な支援。ボランティア活動や中間的就労の場の創設。社会との接点のある居場所づくりへ。地域のサポートステーションや諸支援センターなどとの連携を図りながらの未来思考的取り組みを考えていく必要性。

３．長期高年齢化を見据えた居場所づくりを考える～地域連携の促進～

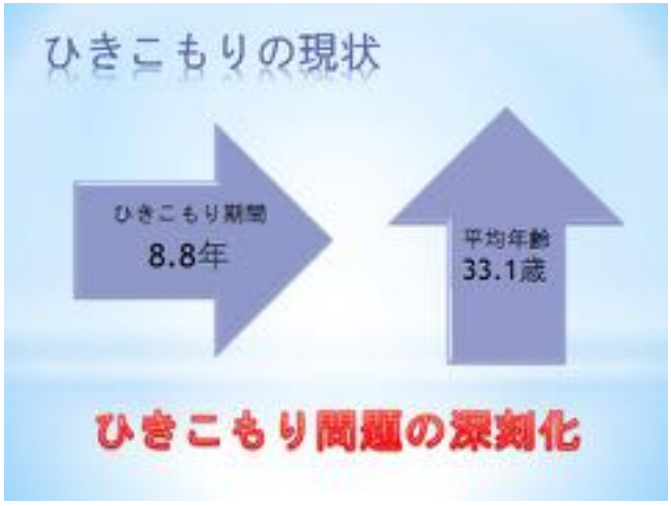
・高齢化する親と若者が希望をもって生きていけるような仕組みを真剣に考える。
・情報や技術、能力を持っている人の紹介、行政の理解、協力を仰ぎ、家族会が連携していくことが望まれる。また、高齢化した家族を孤立させずにつながれる居場所や、身近な地域に出向くアウトリーチ（出張家族会・親の居場所づくり）も必要であろう。

第四部　居場所活動の効果測定報告
～レジリエンス調査より～

1．ひきこもりの現状



平成 19 年度より行われた厚生労働科学研究によると，「ひきこもり」とは，「様々な要因の結果として社会的参加を回避し，原則的には 6 ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」であるとされています。国内の疫学調査では，全国の「ひきこもり」がいる世帯数は低めに見積もっても約 232,000 世帯に及ぶと推定されており，この数字は，全国において 200 人に 1 人がひきこもりであるということを示しています。また，ひきこもり本人の性別の割合は男性が約 8 割で，男性の方が多い傾向にあるとされています。



ひきこもり期間の平均は 8.8 年で，平均年齢は 30 歳を超えたことが報告されたことなどからも，ひきこもり状態から抜け出すことの困難さが示唆されており，ひきこもり問題の深刻化が指摘されています。

ひきこもり状態の特徴のひとつとして，「長期化」が挙げられます。ひきこもり本人が支援機関などへ積極的に相談に来られないことや，家族の意識や状況として，「ひきこもり者がいることを知られたくない」，「実情を話すことを恥ととらえている」，「家族が心を閉ざしている」などといった抵抗感や家族自身の孤立が，ひきこもり状態を長期化させていると考えられます。

ひきこもり状態が長期化すると，精神障害や身体疾患だけでなく，社会参加率の悪化など様々な影響が出て，ひきこもり本人が社会復帰をすることは容易ではなくなります。また，家族の高齢化により，キーパーソンとなる親が継続的に相談に出向くことや，ひきこもり本人への働きかけを続けることが現実的に難しくなり，ひきこもり状態からの回復がより困難となります。

これらのことから，ひきこもり状態の長期化は，ひきこもり本人や家族に深刻な影響を与えるため，早期の回復が望まれます。

2．レジリエンスとは

ひきこもりのような困難な状況からの回復過程を捉える概念として，レジリエンスを用いることが可能と考えられます。様々な課題や困難な出来事は個人に影響を与えますが，全ての人が日常生活において不適応な状態になるわけではありません。適応している，あるいは落ち込んでも回復できる人もいる。このような現象を理解する際に有効な概念としてレジリエンスが挙げられます。**レジリエンスは，「困難で脅威的な状況にもかかわらず，うまく適応する過程・能力・結果」**と定義されており，レジリエンスを活用する状況とひきこもりの状況は類似していると言えます。

レジリエンスを規定する要因は，「個人内要因」と「環境要因」の 2 つに大別されます。個人内要因には，個人の気質，パーソナリティなどの資質的要因と，統制の所在などの獲得的要因が含まれ，環境要因には，家族，友人などからのソーシャルサポートなどが含まれます。初期のレジリエンス研究ではあくまで深刻な状況での心的影響について議論されていましたが，近年では日常的生活場面におけるレジリエンスも注目されており，レジリエンスを高めることでさまざなリスクや困難な出来事に対して適応することが可能になると言えます。しかし，ひきこもりとレジリエンスに関する知見は示されておらず，その関連は明らかにされていません。また，ひきこもり状態にある人のレジリエンスを測定する尺度はこれまでに作成されていません。

さらに，現在，主に使用されているレジリエンス尺度は個人内要因のみを測定するものが多く，環境要因を測定するものは一部しか存在しません。ひきこもり状態からの回復には周囲の環境要因が大きく関わるため，ひきこもり状態にある人のレジリエンスを測定するためには個人内要因と環境要因を測定することのできる尺度が必要となります。

これらのことから今回実施したレジリエンス調査では，レジリエンスの個人内要因と環境要因の 2 つの要因を測定することのできるレジリエンス・チェックリストを作成しました。

さらに，ひきこもり経験者と，ひきこもり状態を経験したことのない大学生を対象に，ひきこもり経験とレジリエンスの関連を検討しました。

３．居場所とは

現在，当事者への支援として重要性が指摘されているのが居場所支援です。居場所とは，「ひきこもり経験者が様々な体験を通して社会生活に慣れる場として運営されている施設のこと」です。

居場所支援は、施設での活動や交流を通して，当事者に生活面の変化や人間関係の獲得，社会経験ができる，楽しく心を許せる場がある，と感じてもらえる（浅田，2010）ことを目指しており，家庭から社会へとつながる接点としての役割をもつとされています。しかし，今まで居場所への参加がひきこもり経験者にどのような効果を与えているのかについて，学術的に検討した研究は行われていません。

これらのことを踏まえて，本調査では，レジリエンス・チェックリストの作成，ひきこもり経験とレジリエンス関連の検討，そして，居場所への参加がレジリエンスに与える影響について検討することを目的としました。

調査１：レジリエンス・チェックリストの作成

レジリエンスの個人内要因と環境要因の２側面の状態を簡易に測定するためのレジリエンス・チェックリストを作成しました。はじめに，大学生２名と大学教員１名により既存のレジリエンス尺度のレビューを行い，レジリエンスの構成因子をリスト化し，表にまとめました（Table１，Table２）。先行研究を参考に，リストのうち複数の尺度で取り扱われており，なおかつ，レジリエンスを構成する因子として重要と考えられるものを抽出し，レジリエンス・チェックリストの構成因子としてまとめました。項目の説明文は先行研究を参考に検討しました。また，先行研究では個人内要因でのみレジリエンスを測定していましたが，本研究ではひきこもり状態にある人にとって重要となる環境要因を測定できる項目を含むレジリエンス尺度が必要であると考えたため，環境要因となる家庭内，家庭外の項目を加え，レジリエンス・チェックリストを作成しました。項目は，個人内要因７項目（「楽観性」「自己コントロール」「社交性」「行動力」「問題解決能力」「自己理解」「他者理解」），家庭内要因４項目（「住環境の安定」「家庭のルール」「家族からの物質的援助」「家族からの心理的援助」），家庭外要因４項目（「家庭外の環境の安定」「家庭外の主な活動の場でのルール」「家庭外の環境での物質的援助」「家庭外の環境での心理的援助」）の計 15 項目から構成されています（Table３）。

Table1　レジリエンスの構成因子（個人内要因）

個人内要因	概念説明	妥当性検討尺度
楽観性	将来に対して不安をもたず、肯定的な期待を持って行動できる力	二次元レジリエンス要因尺度（BRS）3項目
統制力	もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力	二次元レジリエンス要因尺度（BRS）3項目
社交性	もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れる力	二次元レジリエンス要因尺度（BRS）3項目
行動力	目標や意欲をもともとの忍耐力によって努力して実行できる力	二次元レジリエンス要因尺度（BRS）3項目
共感性	他者の感情を共有したり、理解したりすること	多次元共感性尺度(MES)（25項目）
自律性（自己決定）	日常の些末な問題から人生の進路に関わる重要な問題まで.自分の判断により自分の責任で選択することを意味する。	PEA日本語版尺度（31項目）
自己効力感	ある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行可能感」、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識、あるいは、自分にはこのようなことがここまでできるのだという考え	GSES(16項目)
原因帰属 （ローカス・オブ・コントロール）	自分に起こる事象に対して、主観的にどの程度自分がコントロールしているか、あるいは、外的要因によってコントロールされているかという帰属因に関する信念。	LOC尺度（18項目）
問題解決能力	社会的場面において対処法を考え出す（対処法の案出）、あるいは対処の結果を予測して選択する（対処法の評価）認知プロセスのことである。	SPSI-R日本語版（松尾・坂野.2002）―社会的問題解決能力
ソーシャル・スキル	対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念	成人用ソーシャルスキル自己評価尺度（35項目）
知的スキル	例えばプレゼンテーションをする能力、仲間を構築する能力、論文を書く能力、実験を計画する能力、お金をうまく配置する能力など人間としての素養を含めたいろいろな基本的な素養である	日本語版BRIEF-P（63項目）、レジリエンス尺度（森、2001）
根気強さ	「最善の解決法が困難で、その解決にいくらかの段階を必要とするものであっても、忍耐強く努力し続けることができる」など、忍耐強く問題の解決に取り組む姿勢	レジリエンス尺度（森.2001）I CAN因子（7項目）
ユーモア	「おかしさ」「おもしろさ」という心的現象を示すもの。May（1953）は自我感との関連からユーモアを取り上げている。「普通、ユーモアには自我感を保持する機能がある。それは、自我とその問題との『距離』を認識する健康な方法であり、局外にあって、しかもある見通しをもって問題を見ることのできる一方法である」	RS-S（7項目）
コンピテンス	環境と効果的に相互交渉する能力のことであり、効果的な変化をもたらすことができる自己評価である	RS-S
肯定的未来志向	将来に目標を持つなどの未来に対する肯定的な志向性を表す	精神回復力尺度
感情調整	自分の感情をコントロールすることを表す	精神回復力尺度
意欲的活動性	ねばり強く問題を解決しようとすること	中学生用レジリエンス尺度
肯定的評価	何らかの事象に対してより楽観的あるいは肯定的な側面を重視して評価すること	RS-S
親和性	他者あるいは、状況や場所に対して肯定的に接することができる特性	RS-S
内面共有性	ネガティブな心理状態を立て直すために他者との内面の共有を求めること	中学生用レジリエンス尺度（6項目）
実行機能	目標に到達するために行動や思考の計画、調整、コントロールなどを行う機能の総称	日本語版BRIEF-P（63項目）、レジリエンス尺度（森、2001）（I CAN因子　7項目）
自己有効性	人が環境との相互作用の過程で、自己の有効性についての感情経験を求めて効果的に対応しようとする	森（2001）のレジリエンス尺度

Table2　レジリエンスの構成因子（環境要因）

環境要因	概念説明	妥当性検討尺度
安定した家庭環境	（良好な夫婦関係・親子関係・兄弟関係、経済的余裕）	ICF、FAI
家庭内の組織化や規則	（効果的なしつけ）組織化：情報や知識が共有化されていて，組織としての力を発揮できる状態になっていること	家族レジリエンス尺度、FAI
家庭内での物理的サポート	（金銭面，生活面）両親のサポート　Ex）「私が学校で，問題になったら両親はすぐに助けてくれる」	家族レジリエンス尺度（社会的経済的資源2項目）
家庭内での情緒的サポート	（親の理解、話をよく聞いてくれる）両親のサポート　Ex）「私の両親は，先生との相談にこころよく応じてくれる」「私の両親は，学校でがんばるようにはげます」	家族レジリエンス尺度（結びつき11項目、家族の力への信頼8項目、価と関係性のバランス6項目）
安定した社会参加環境	（学校，会社，地域）職場、学校などでの人間関係　学校活動へのかかわりの程度　Ex）「教室で自分の意見を表現するよう，先生ははげましてくれる」「先生は私たちを公平にあつかってくれる」	心理社会的学校環境項目（先生のサポート、生徒自律性、級友サポート、学校満足度、学校関連ストレス）、職場用ソーシャルサポート
社会参加環境での組織化や規則	ルールの公平さ、適切さ　Ex）「私たちの学校では，生徒がいろいろなきまりづくりに参加する」「この学校はあまりにきびしすぎる」「この学校のきまりは公平である」	S-H式レジリエンス尺度（ソーシャルサポート12項目、自己効力感10項目、社会性5項目）、職場用ソーシャルサポート
社会参加環境での物理的サポート	（手当、協力体制、就労支援）先生のサポート，級友のサポート　同僚のサポートEx）「私が特別の助けを必要とするとき，先生は助けてくれる」「先生は，一人の人間として私にかかわってくれる」「クラスのほとんどのみんなは，親切でたよりになる」	RS-S（ソーシャルサポート6項目、肯定的評価6項目、コンピテンス6項目、重要な他者6項目、親和性4項目）、職場用ソーシャルサポート
社会参加環境での情緒的サポート	（スクールカウンセラー、学校の先生・会社の上司の理解、友だち・仲間の存在）先生のサポート，級友のサポート，同僚のサポート　Ex）「私のクラスのみんなは，一緒にいると楽しい」「みんなは私を受け入れてくれる」	職場用ソーシャルサポート

Table 3　自己記入式レジリエンス・チェックリスト

以下の項目について、あなた自身や周囲の状態について当てはまると思う数字１つに○（丸）を付けてください。
全く当てはまらない場合は「１」、非常に当てはまる場合は「５」に○（丸）を付けてください。

全く当てはまらない		どちらでもない		非常に当てはまる
1	2	3	4	5

●自分自身について

１ 楽観性（例：つらいときでも何とかなりそうな気がする）

1	2	3	4	5

２ 自己コントロール（例：つらいときでも自分の気持ちをコントロールできる方だ）

1	2	3	4	5

３ 社交性（例：人と親しくなりたいと思う）

1	2	3	4	5

４ 行動力（例：決めたことは最後までやり抜こうとする方だ）

1	2	3	4	5

５ 問題解決能力（例：困難な問題でも解決に向けて取り組むようにしている）

1	2	3	4	5

６ 自己理解（例：自分の良いところ、悪いところを理解している方だ）

1	2	3	4	5

７ 他者理解（例：人の気持ちを理解している方だ）

1	2	3	4	5

●家庭環境について

１ 住環境の安定（例：住居は安全で、衛生的かつ、快適である）

1	2	3	4	5

２ 家庭のルール（例：家族みんなが納得して守っているルールがある）

1	2	3	4	5

３ 家族からの物質的援助（例：家庭には食べ物、お金、必要な物が揃っている）

1	2	3	4	5

４ 家族からの心理的援助（例：親の理解がある、困ったとき家族は話をよく聞いてくれる）

1	2	3	4	5

●家庭外の主な活動の場（または家庭外の環境　例：居場所、相談機関、病院など）について

１ 家庭外の環境の安定（例：家庭外の環境は安全で、衛生的かつ、快適である）

1	2	3	4	5

２ 家庭外の主な活動の場でのルール
（例：家庭外の主な活動の場には、みんなが納得して守っているルールがある）

1	2	3	4	5

３ 家庭外の環境での物質的援助（例：家庭外の環境には、食べ物、お金、必要な物が揃っている）

1	2	3	4	5

４ 家庭外の環境での心理的援助（例：家庭外の環境で接する人は気持ちを分かってくれる）

1	2	3	4	5

質問紙への回答にばらつきが出るかを確認するため，事前に 5 名のひきこもり当事者と 19 名

のひきこもり当事者の親に質問紙への回答を求め，質問紙の構成を検討しました。得られたデータを用いて，各項目についての記述統計量を算出しました（Table 4）

	M	*SD*	*MS*
楽観性	2.75	.897	.804
自己コントロール	3.33	1.049	1.101
社交性	3.29	1.233	1.520
行動力	3.38	.770	.592
問題解決能力	3.22	.902	.814
自己理解	3.25	1.152	1.326
他者理解	3.50	1.285	1.652
個人要因合計	22.583	5.1323	26.341
住環境の安定	3.67	1.167	1.362
家庭のルール	3.25	1.152	1.326
家族からの物質的援助	4.17	.761	.580
家族からの心理的援助	3.38	1.056	1.114
家庭内要因合計	14.458	2.8434	8.085
家庭外環境の安定	3.46	.977	.955
家庭外の活動の場でのルール	3.42	.881	.775
家庭外での物質的援助	2.96	1.197	1.433
家庭外での心理的援助	3.50	.933	.870
家庭外要因合計	13.333	3.1987	10.232
環境要因合計	27.792	4.9868	24.868
個人･環境要因合計	50.375	9.2868	86.245

作成したレジリエンス・チェックリストの尺度の項目の信頼性を検討するため，Cronbach の α 係数を算出しました。その結果，チェックリスト全体（α=.791）という結果が得られ，いずれにおいても高い内的整合性が確認されました。

尺度項目の妥当性を検討するため，自己記入式レジリエンス・チェックリストと，以下の既存の尺度との相関を算出しました。

①二次元レジリエンス要因尺度（BRS）: 平野（2010）が作成した，レジリエンスを資質的要因，獲得的要因の 2 つの側面から測定する尺度です。資質的レジリエンス要因は「楽観性」「統制力」「社交性」「行動力」の 4 因子，獲得的レジリエンス要因は「問題解決志向」「自己理解」

「他者心理の理解」の 3 因子から成り、各因子 3 項目，合計 21 項目で構成されています。項目は「どんなことでも，たいてい何とかなりそうな気がする」「嫌なことがあっても，自分の感情をコントロールすることができる」「自分から人と親しくなることが得意だ」「決めたことを最後までやりとおすことができる」などから構成されており，回答は 5 件法（1：まったくあてはまらない　～　5：よくあてはまる）で求めました。

②職場用ソーシャルサポート尺度:職場用ソーシャルサポート尺度を一部改訂して使用しました。職場用ソーシャルサポート尺度は，小牧・田中（1993）が作成し，職場におけるソーシャルサポート 15 項目で構成されています。項目は「問題で困っているとき，どうすればいいか相談にのってくれる」「負担が非常に大きいときには手伝ってくれる」などから構成されており，回答は 5 件法（1：そう思わない　～　5：そう思う）で求めました。

③家族アセスメントインベントリー（FAI）：西出（1993）が作成した家族機能を測定する尺度です。「家族に対する評価と凝集性」「親密で自由な家族内交流」「家族の構成度」「家族内の秩序・ルール」の 4 因子，合計 30 項目で構成されています。今回はその中の「家族内の秩序・ルール」の 7 項目を用いました。項目は「家族で決めたことはみんなで守る」「私の家では，お互いの役割分担がはっきりしている」などから構成されており，回答は 6 件法（1：まったくあてはまらない　～　6：よくあてはまる）で求めました。

レジリエンス・チェックリストと，既存の尺度である BRS（二次元レジリエンス要因尺度），FAI（家族アセスメントインベントリー），職場用ソーシャルサポート尺度との相関係数を Spearman の順位相関係数を用いて算出しました。その結果，いずれにおいても相関がみられ，尺度の妥当性が確認されました。

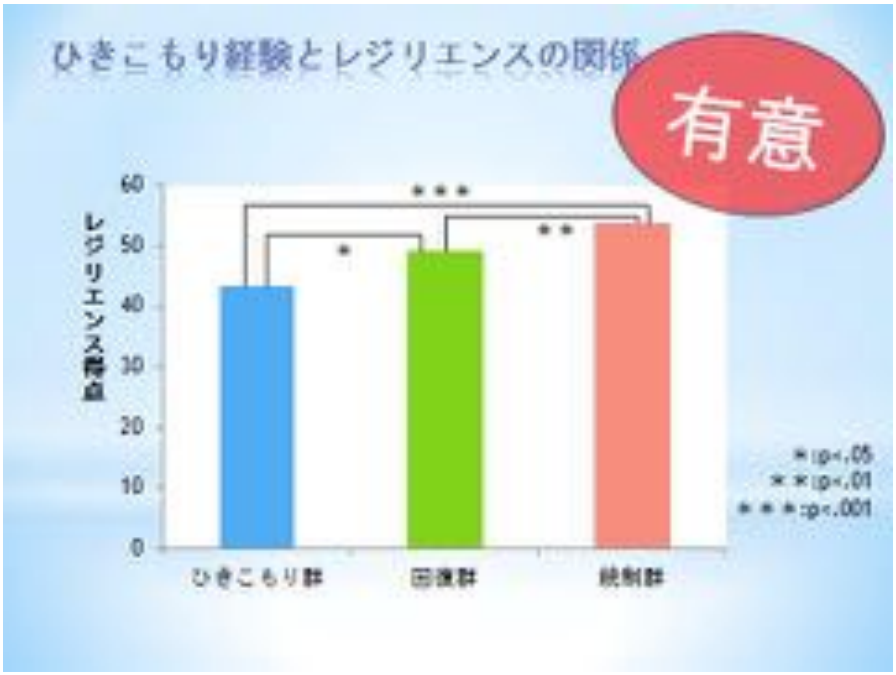
調査２：ひきこもり経験とレジリエンスの関連

ひきこもり状態を経験した人（現在もひきこもり状態にある人を含む 53 名と，比較検討のため大学生 103 名を対象としました。そのうち有効回答数は，現在もひきこもり状態にある人（以下，ひきこもり群）20 名（男性 18 名，女性 2 名），ひきこもり状態から回復した人（以下，回復群）34 名（男性 27 名，女性 7 名），大学生（以下，統制群）103 名（男性 40 名，女性 63 名）でした。ひきこもり群の平均年齢は 35.7±6.59 歳，回復群の平均年齢は 34.3±7.16 歳，統制群の平均年齢は 19.1±0.81 歳でした。ひきこもり経験者を対象とした調査は，NPO 法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会に協力を依頼し，同会の支部会において実施しました。大学生を対象とした調査は，指導教員の講義内で実施しました。調査参加者には調査の説明を行ったうえで，インフォームドコンセントに答えてもらい，同意が得られた参加者には質問紙への回答を求めました。

この調査では，以下のことについて尋ねました。

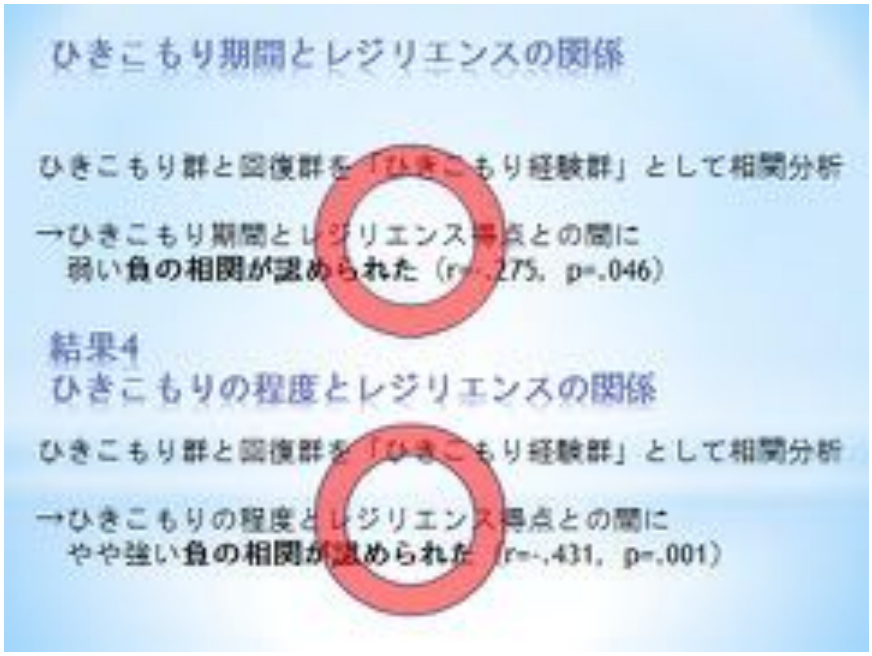
基礎情報：現在住んでいる都道府県，年齢，性別，過去の経験（ひきこもりの程度とその期間，相談機関利用状況）を尋ねました。本研究では，活動範囲および対人交流状況をひきこもりの程度としています。

自己記入式レジリエンス・チェックリスト：ひきこもり状態にある人のレジリエンスを測定するために作成したチェックリストです。回答は 5 件法（1：全く当てはまらない～5：非常に当てはまる）で求めました。



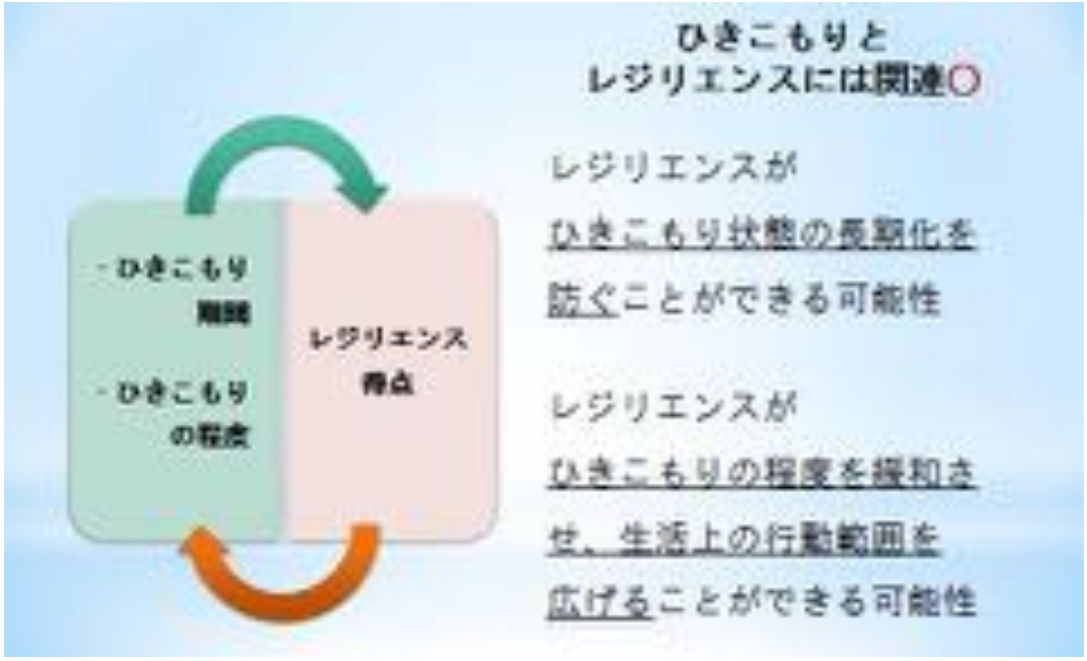
ひきこもり群 20 名，回復群 34 名，統制群 103 名を分析対象として，ひきこもり経験とレジリエンスの関係を検証するために，一要因の分散分析を行いました。その結果，ひきこもり経験の主効果が有意でした。そこで Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，統制群のレジリエンス得点はひきこもり群のレジリエンス得点よりも有意に高く（$p<.001$; $p=.000$），回復群の

レジリエンス得点はひきこもり群のレジリエンス得点よりも有意に高く（p<.05; p=.014），統制群のレジリエンス得点は回復群のレジリエンス得点よりも有意に高い（p<.01; p=.003），という結果が得られました。



ひきこもり期間とレジリエンス得点の関係を検証するために，ひきこもり群と回復群の 2 群をひきこもり経験群としてまとめ，相関分析を行いました。その結果，ひきこもり期間とレジリエンス得点との間に弱い負の相関が認められました。

また，ひきこもりの程度とレジリエンス得点の関係を検証するために，ひきこもり群と回復群の 2 群をひきこもり経験群としてまとめ，相関分析を行いました。その結果，ひきこもりの程度とレジリエンス得点との間にやや強い負の相関が認められました。



今回得られた結果から，レジリエンスがひきこもり状態に陥らないための予防策となる概念およびひきこもり状態からの回復過程を捉える概念であるということが言えると考えられます。

調査３：居場所への参加がレジリエンスに与える影響

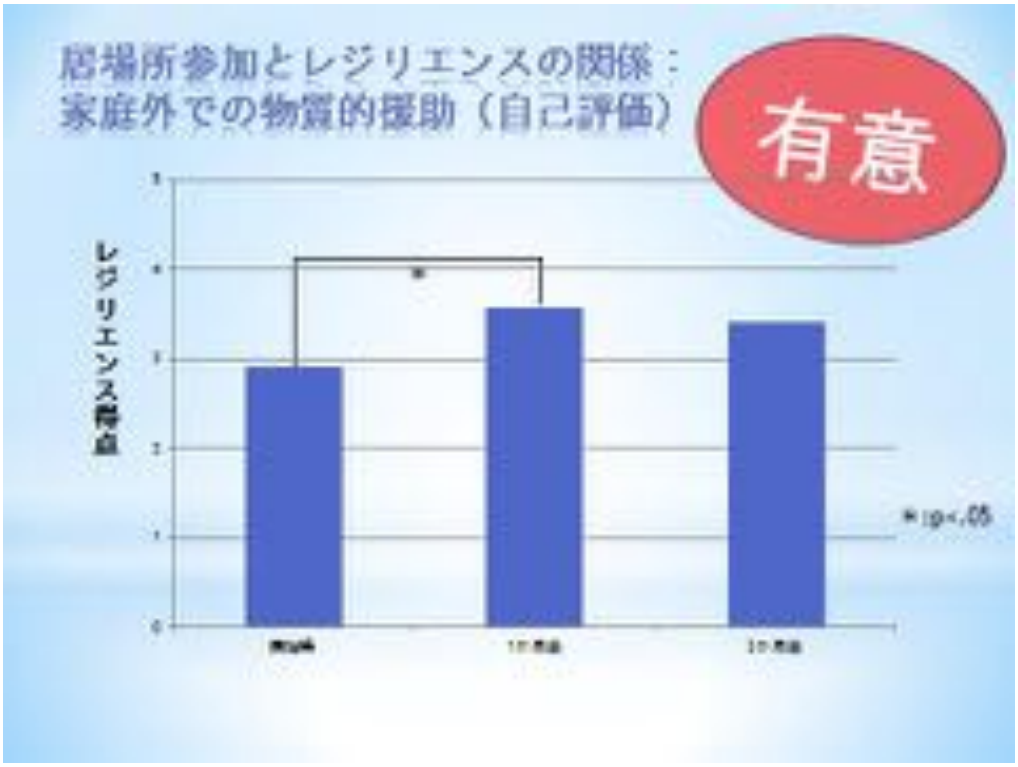
2015 年 11 月初旬に、居場所事業に参加している全国にある支援施設 17 か所へ同意書、説明文書、質問紙、返信用封筒の入ったマニュアルを配布しました

その後、施設運営スタッフから調査対象者に調査説明を行ってもらい、同意が得られたひきこもり経験者 24 名を対象に３回の質問紙調査を行いました(男性 15 名，女性８名，性別不明１名，M=31.35，SD=7.604)。

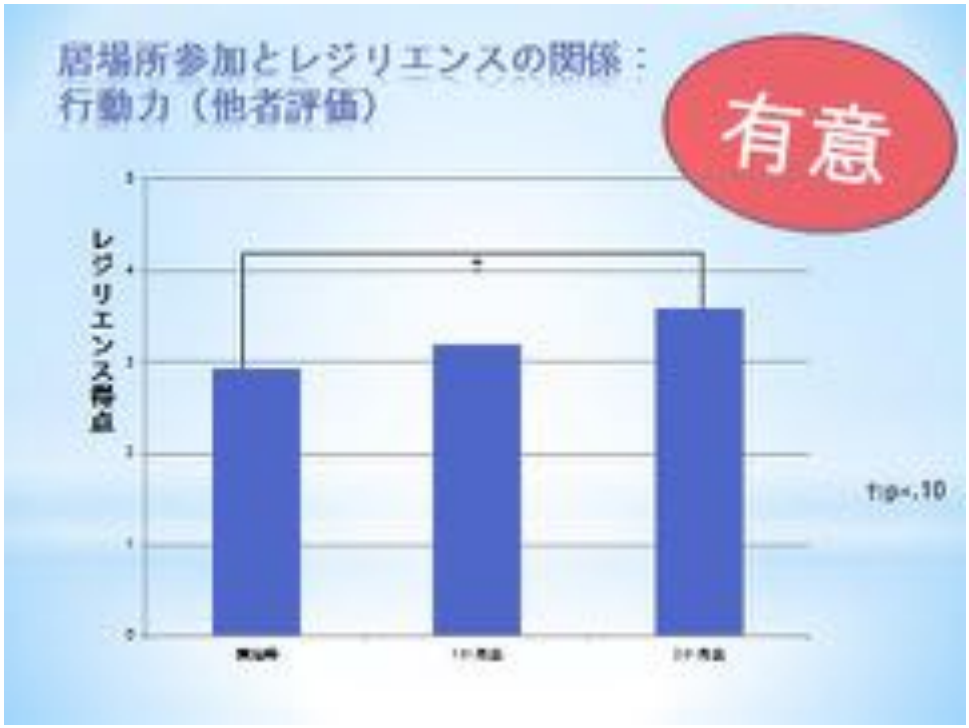
この調査では，居場所参加前と参加後（参加から約１か月後と２か月後）の計３回質問紙調査を行いました。以下のような内容について調査を行いました。

①自己記入式レジリエンス・チェックリスト：ひきこもり状態にある人のレジリエンスを測定するために作成したチェックリストです。「つらいときでも何とかなりそうな気がする」等、15 項目から構成されます。

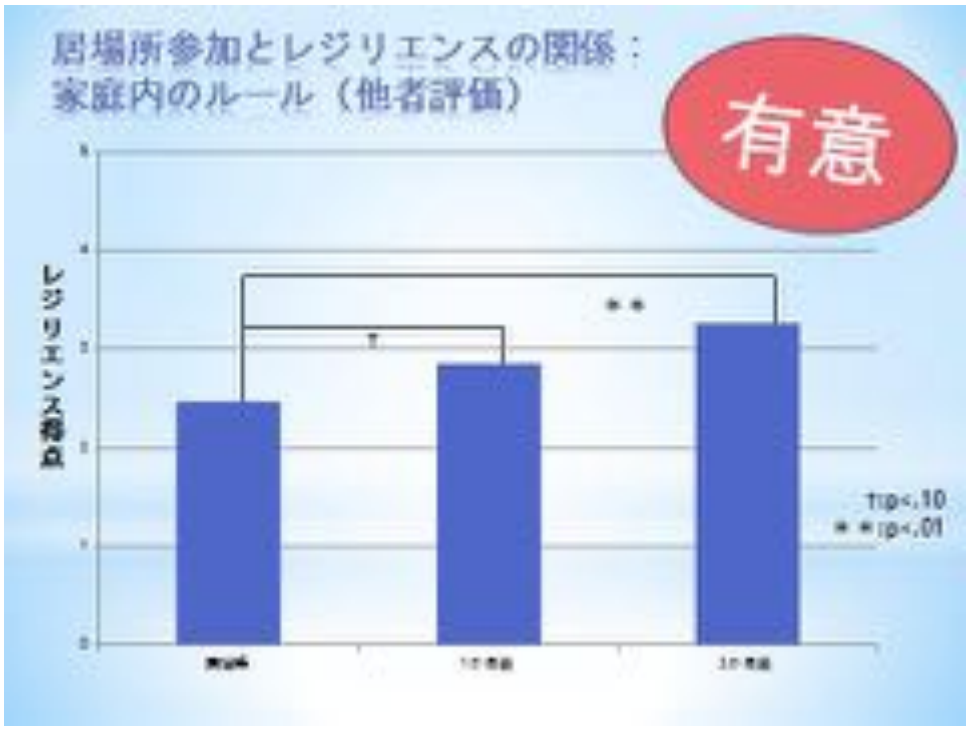
②他者記入式レジリエンス・チェックリスト：ひきこもり状態にある人のレジリエンスを測定するために作成したチェックリストです。「つらいときでも何とかなりそうな気がしているようだ」等、15 項目から構成されます。



まず，レジリエンス・チェックリストの自己評価においては，家庭外での物質的援助において1か月後に増加していることが示されました。しかし，その効果は2か月後には維持されていないことが示されました。



次に，レジリエンスチェックリストの他者評価では，行動力において2か月後に有意傾向の上昇を示していることが分かりました。居場所に参加することによって，他者から見て行動力が向上していること分かります。



最後に，レジリエンスチェックリストの他者評価の家庭内でのルールにおいて，1 か月後に上昇し，2 か月後にさらに上昇することが示されました。

これらの結果から，居場所に参加することで自己評価，他者評価の両方において一定の効果が得られることが示されました。

自己記入式で、家庭外での物質的援助において 1 か月後に上昇が認められたのは，居場所への参加の初期に居場所での物質的援助が手厚くなり，その後，初期の手厚い物質的援助が減少したためと考えられます。居場所への参加が定着するまでに支援者が手厚い支援を行っていることを利用者自身も実感していたものと言えます。

他者評価式で、「行動力」で向上がみられたのは，自分に自信がない人が多いとされているひきこもり経験者が，居場所での活動を通して，客観的に見て自信をつけていくことができたという結果ではないかと考えられます。実際、利用者自身が、居場所に参加したことで、人との交流やコミュニケーション能力で変化があったと感じていたことが自由記述のアンケートから見受けられました。

他者評価式で「家庭内でのルール」に向上が認められたのは，居場所に参加することによって家庭内での活動にメリハリがついたためと考えられます。家庭内中心での生活をしていると，普段の生活のリズムが作りにくいものです。また，居場所に参加することで家庭内でのルールを家族と共有できるようになった可能性も考えられます。

これらの結果は，居場所に参加することによる変化をレジリエンスでとらえることができるということも示された一方で，レジリエンスでは、一つの要因の中での細かい変化までは捉えることが難しいということも同時に示されました。また，今回変化した要因が一部にとどまった理由としては、調査開始前から居場所に参加していた人が含まれていたことも関係していると考えられます。今後は，居場所に初めて参加した人を対象に調査を行う必要があると言えます。居場所

に参加している中のある一定の期間の変化としての結果を示すことはできましたが，居場所の参加前と参加後での変化に比べるとその変化量は表れにくいものとなりました。さらに，変化をとらえるには調査期間が短いこともこの結果と関係していたと思われました。

本調査ではレジリエンスを高めることで，ひきこもり状態から回復できる可能性が示唆されたものの，どのような認知や行動および環境がレジリエンスを高めることができるのかについてまでは検討に至っていません。

今後，スキル重視型，体験重視型，環境整備重視型といったレジリエンス育成プログラムなど，レジリエンスを高めるものが，ひきこもり経験者にも有効なものであるか検証する必要があると考えられます。

＜引用文献＞

平野真理(2010)　レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み-二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成　日本パーソナリティ研究,19,94-106
小花和尚子(2002) 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス　日本生理人類学会誌,7,25-32
鬼頭有紀(2016) 居場所への参加がひきこもり経験者のレジリエンスに与える影響　徳島大学卒業論文
神代桃子(2016)ひきこもり経験とレジリエンスの関連　徳島大学卒業論文

Masten A. S., Best K. M. & Garmezy N.(1990)Resillience and development:Contributions from the study of children who overcome adversity. Development and Psychopathology, 2, 425-444
齋藤和貴・岡安孝弘(2010)大学生用レジリエンス尺度の作成　明治大学心理社会学研究,5, 22-32.
高辻千恵(2002)幼児の園生活におけるレジリエンス-尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討- 教育心理学研究,50,427-435

＜本調査に関する問合せ先＞

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
准教授　境　泉洋

徳島大学総合科学部　4 年
鬼頭有紀・神代桃子

〒770-8502　徳島県徳島市南常三島1丁目1番地
TEL & FAX　088-656-7191(内線 2361)

おわりに　～家族会の未来・居場所づくりへの展望～

他の居場所や支援機関とノウハウを共有しながら、全国で１７支部が充実した居場所づくりに努めました。このうち居場所づくりを「はじめて」行った支部が７支部でした。また家族会がない地域において、居場所の必要性と有効性についての講演を行い、全国への普及促進活動を進めた結果、8 地域に新たに家族会ができました。

講演会のアンケートから読み取れることは、家族、当事者本人、支援者、それぞれの立場から、それぞれの状態（回復段階）に応じた困難さがあることがわかりました。家族からは、子どもへの関わり方や親亡き後の問題、本人からは就労面や心身の安定を保つことへの困難、支援者からは本人とつながるため、また関わるための入口問題や、関わり方、連携方法、地域資源の不足の問題などが挙がりました。特に、ひきこもり当事者の声から読み取れるのは、ひきこもり状態から脱しても、その段階ごとでの生き辛さを抱えており、彼らの目線に立って、その辛さをどう理解していくかが大切と思われます。また、地域資源、支援体制の不足については、社会全体で考えていくべき問題といえるでしょう。ひきこもり支援に求められるものは、長期に渡り伴走できる、継続的な粘り強い支援でしょう。また、当事者ひとりひとりで課題が違い対処できることとできないことがあるため、この多様性に対応できる「居場所づくり」が必要であると考えられます。そのため公的（フォーマル）、民間（インフォーマル）を問わず、多様な地域資源を確保していくことが重要であるといえます。

もちろん、ひきこもり支援の基盤として必要なのは家族支援であり、家庭を治療の場とするための家族支援と親の学習であります。当事者と支援者の信頼関係を築くことが必要ですが、その前に親と子の間の信頼関係が構築されていることが重要です。さらに夫婦間の信頼関係も必要です。これらの信頼関係を作り直していくのは家族会の重要な役割といえるでしょう。土台に信頼があってはじめて、学習した効果が出てくるのだと思います。

居場所の運営結果、成果としては以下のようなものが挙がっています。

１．安心感・意欲の高まり

（安心できる、また来たい。ひきこもり状態から一歩外に出る意欲の醸成）

２．他者との関係づくり、コミュニケーションの促進、他者への思いやりの醸成

３、人との交流、集団への参加、仲間づくりにつながった。

（対話以外での交流の場の提供により集団の中に入って行けた）

４．自己表現、自己発見の場となった。

５．継続的な居場所参加と共に、生活リズムの立て直しにつながった。

６．居場所＝インフォーマルな社会資源としての周知と、社会的理解の促進へ

（支援に抵抗のある若者にも、気兼ねなく来てもらえる相談場所に）

７．「体験」を通した「関心」と「行動」力の高まり・・・・・本人が関心を持って取り組めることが見つかった。

・当事者が講師へ。周囲の評価や承認が自信へとつながった。

・役割を持ち、周囲と協力して楽しみながら、成し遂げる。達成感と楽しみの共有。

８．勉強会や就労準備の機会、情報交換の機会を提供することにより、次のステップへ一歩踏み出すきっかけ作りとなった。

９．居場所の情報提供により、居場所以外でも日常生活の動きがあった。

10．回を重ねる毎の変化（積極性：仲間と話す、役割を担う、他の講演会、講習会に参加する等）が見えてきた。

11.自分たちにできることは？居場所をもっと良くするために、自分たち（当事者自身）も居場所づくりに参加したい（家族会の活性化、自助への意欲の醸成）

一方、居場所の課題として最も多く挙がったのは、「財政基盤の安定」が困難であるということでした。居場所のプログラムの充実や、常設の居場所の設備確保、人材確保のために、財政の安定は必要不可欠であり、そこをどう工夫していくかが、運営者の最大の課題となっています。また、当事者が出てこないという「居場所の入口の問題」や特定のスタッフが役割を負いすぎてしまう、分担、協力体制が取れないという「スタッフの役割やスキルの問題」もあります。また、居場所の環境における課題として、静かな雰囲気を好む参加者の中に、活発な人が入った場合の配慮や、参加者の年齢層が極端に離れていると馴染みづらいため、グループを分ける必要があるとの意見もありました。また、部屋の中の居場所は、他人と顔を突き合わせて何か話さなくてはと想像すると嫌になってしまうというものや、外の居場所である農場では緩やかな就労準備場所として機能しており、これを好む傾向があるという意見もありました。

元経験者、居場所の世話人（リーダー）的な当事者等の育成をしたいが、やっとリーダーシップがとれるようになったところで、次のステップに向かって卒業していくため活動上のジレンマとなるといった「人材確保（後継者不足）の問題」もあります。

ひきこもり当事者が抱える問題は多様であるため居場所で提供できるプログラムには限界があるし人員も不足しているという「多様な受け入れの在り方の問題」もあります。

来なくなってしまった参加者への対応とフォローをどうするかという「参加者の途絶の問題」もあります。

居場所に長くとどまってもらっても問題であり、居心地が良すぎても次のステップにつながらなければ問題であるといった「居場所での長期化」を懸念する声もあります。自営業ではない39 歳以上の当事者は、居場所から何処へ旅立っていかせるべきか「居場所後の行き先」を懸念する声もあります。

以上のことから、居場所の在り方としては、ひとりひとりに合った居場所サポートの実践をするとともに、居場所の入口から出口まで積極的な地域連携により選択肢を広げていく～居場所と社会参加の場を一体的に作り出す取り組みへ～ことが重要です。

一方、ひきこもる若者たちが居場所につられて家から出てくると言うことはあまり期待できないとして、居場所の閉鎖を決めた支部もあります。居場所よりも親たちをエンパワーすること、家族会をやっていくこと、ピアの力で親同志の助け合いをやっていく方が若者たちを動かす力になるというものです。さらに、身近な地域に家族会を増やすことで参加しやすくする。これも、家族会の在り方ともいえるかもしれません。居場所だけが解決につながるわけではなく、様々なものを地域資源として用意しておくことは、いずれにしてもよりよい地域づくりに貢献していくものとなるでしょう。これからも家族会はその拠点となるための努力が求められるでしょう。一番苦しんでおり、その苦しみをわかっているのが家族会なのですから。

特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会
理事　藤岡清人

平成 27 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

「ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくり」

事業委員一覧　（五十音順）

氏名	所属機関	役職
伊神 亮	NPO 法人なでしこの会（愛知）	事業委員
市川 乙允	NPO 法人楽の会リーラ（東京）	事業委員
井上 庫男	NPO 法人 KHJ 千葉県なの花会	事業委員
大矢 哲裕	KHJ 長岡フェニックスの会	事業委員
川井 富枝	NPO 法人 KHJ 香川県オリーブの会	事業委員
近藤 茂樹	KHJ 福井県すいせんの会	事業委員
境 泉洋	徳島大学大学院 SAS 研究部准教授	事業委員長
下山 洋雄	KHJ 青森県さくらの会	事業委員
土田 芳次	豊田・大地の会	事業委員
林 正則	KHJ 南加賀 いまここ親の会	事業委員
藤岡 清人	KHJ 広島 もみじの会	事業委員
堀部 尚之	KHJ みえオレンジの会	事業委員
前川 実	NPO 法人 大阪虹の会	事業委員
松本 むつみ	NPO 法人　ひまわりの家（兵庫宍粟市）	事業委員
山田 孝介	NPO 法人　オレンジの会（名古屋）	事業委員
山本 洋見	NPO 法人　てくてく　（浜松）	事業委員
吉村 文恵	KHJ 福岡県 楠の会	事業委員
平良 玲奈	KHJ 沖縄県 てぃんさぐぬ花の会	事業委員
上田 理香	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会	本部事務局（主担当）
岩野 雅夫	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会	本部事務局（副担当）
深谷 守貞	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会	本部事務局（副担当）
山本 宜代	特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会	本部事務局（会計）

資料

１．講演会に関するアンケート

２．居場所の利用者アンケート

３．居場所の運営者アンケート

資料1

ひきこもり講演会に関するアンケート

本日は、講演会にご参加いただき、誠にありがとうございました。
このアンケートは、KHJ 全国ひきこもり家族会連合会の今後の活動の参考とさせていただくとともに、独立行政法人福祉医療機構（ＷＡＭ）が行う社会福祉振興助成事業の実施について今後の参考とさせていただきます。
ご参加の皆様から、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。ご協力をお願いいたします。

≪以下の設問で該当する欄に☑を入れてください≫

１．本日の講演会の内容全般について、ご満足いただけましたか。（４択）

a. 満足　b. やや満足　（ →設問２へ）
c. やや不満足　d. 不満足　（→設問３へ）

２．（１で「満足」「やや満足」を選んだ方）どのような点が良かったですか。（複数回答可）

a. 役立つ情報が得られた　b. 日頃の生活や活動に役立った　c. スキルアップにつながった
d. 他の参加者との交流・情報交換が図られた　e. 抱えていた問題・不安の解消につながった
f. その他 －良かった点を具体的に教えてください－
（　　）

３．（１で「やや不満足」「不満足」を選んだ方）どのような点が良くなかったですか。（複数回答可）

a. 役立つ情報が得られなかった　b. 日頃の生活や活動の参考にならなかった
c. スキルアップにつながらなかった　d. 他の参加者との交流・情報交換ができなかった
e. 抱えていた問題・不安の解消につながらなかった
f. その他 －良くなかった点を具体的に教えてください－
（　　）

４．本日の講演会に参加された方は？

１）性別　a. 男性　b. 女性　c. その他
２）年齢　a. 10 代　b. 20 代　c. 30 代　d. 40 代　e. 50 代　f. 60 代　g. 70 代　h. 80 代
３）参加された方

＝ひきこもり当事者・家族など＝

a. ひきこもり当事者　b. ひきこもり当事者の親　c. ひきこもり当事者の兄弟姉妹
d. 親戚・友人　e. その他（　　）

※当事者及びご家族の方は、同別居の有無と、当事者の年齢についても回答願います

a. ひきこもり当事者と同居　b. 別居　当事者の年齢　（　　）歳

⇒裏ページの設問５～６にお進みください

＝保健師や社協職員など支援者の立場＝

□保健師　□社協職員　□行政職員　□民生委員　□その他（　　）

⇒裏ページの設問７～９にお進みください

表ページで、「ひきこもり当事者・家族など」に☑を入れた方に質問します。

５．本日の講演会に参加した理由をお聞かせください。（自由記述）

６．現在、生活をする上での困ったことや悩み事をお聞かせください。（自由記述）

表ページで、「保健師や社協職員など支援者の立場から」の参加に☑を入れた方に質問します。

７．支援者の立場として、本日の講演会に参加した理由をお聞かせください。（自由記述）

８．ひきこもり支援を行うにあたって、困難を感じていることがありましたらお聞かせください。
（自由記述）

９．ひきこもり支援を行うにあたって、現在取り組んでいる事項がありましたらお聞かせください。
（自由記述）

ご協力ありがとうございました

特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会

―― 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 ―

資料2

「ひきこもり当事者の居場所づくり」利用者アンケート

このアンケートは、ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくりのために、全国引きこもりＫＨＪ親の会（家族会連合会）の今後の活動の参考とさせていただくとともに、本事業の実施に必要な助成金（独立行政法人福祉医療機構（ＷＡＭ）が行う社会福祉振興助成事業）の事業実施の参考とすることを目的に行うものです。

≪以下の質問について、該当するところに〇をつけるか、具体的に記入してください。≫

１．居場所を利用された方について。

１）性別　a.男性　b.女性　c.その他

２）年齢　a.10 代　b.20 代　c.30 代　d.40 代　e.50 代　f.60 代　g.70 代　h.80 代

３）居場所に参加された方のお立場

a.ひきこもり当事者　b.ひきこもり当事者の親　c.ひきこもり当事者の兄弟姉妹

d.ボランティア　e.その他（　　）

４）参加した回数について　a.はじめて　b.以前も来たことがある　約　　回目

２．居場所に参加した理由をお聞かせください。（複数回答可）

a.人との出会い、交流　b.役立つ情報、スキルを得たい　c. 就労準備　d.安心できる場所だから

e.不安や問題について話したい、相談したい→具体的にはどんな不安がありますか？

（例:就労、コミュニケーション　　）

f.その他

（　　）

３．居場所を利用されてみてどうでしたか。（４択）

a.満足　b.やや満足　（→設問４へ）

c.やや不満足　d.不満足　（→設問５へ）

４．（１で「満足」「やや満足」を選んだ方）どのような点が良かったですか。（複数回答可）

a. 他の参加者との交流・情報交換ができた　b. 抱えていた問題・不安の解消につながった

c. 日頃の生活や活動に役立った　d.就労準備のスキルアップにつながった

e. その他 （良かった点を具体的に教えてください）

５．（１で「やや不満足」「不満足」を選んだ方）どのような点が良くなかったですか。

６．居場所でやってもらいたいことを自由にお書きください。

７．ご意見、ご感想などを自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

ＮＰＯ法人　全国引きこもりＫＨＪ親の会（家族会連合会）

―― 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 ―

資料3

「ひきこもり当事者の居場所づくり」運営者アンケート

このアンケートは、ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくりのために、全国引きこもりＫＨＪ親の会（家族会連合会）の今後の活動の参考とさせていただくとともに、本事業の実施に必要な助成金（独立行政法人福祉医療機構（ＷＡＭ）が行う社会福祉振興助成事業）の事業実施の参考とすることを目的に行うものです。

≪以下の質問について、該当するところに〇をつけるか、具体的に記入してください。≫

1.あなたの支部名を教えてください。（　　支部）

2.あなたの団体の設立・居場所支援の活動開始年月について、お答えください。

（　　）年（　　）月設立　居場所支援開始年月（　　）年（　　）月

3.あなたの団体施設状況について、該当するところに〇をつけてください。

①単独の常設施設　②ビルなどの賃貸による常設施設　③他団体との合同による常設施設
④公共施設などによる非常設賃借施設　⑤自宅などの併用による非常設施設
⑥その他の施設（　　）

4.あなたの団体における主なる事業内容について、該当するところに〇を付けてください(複数回答可)。また、とくに重点をおいている事業については◎をつけてください。

①相談支援事業（電話や電子メール・来談/訪問支援）②居場所支援事業　③社会参加促進事業（ボランティアなど）④就労手前支援事業（中間的就労）⑤就労支援事業（ジョブ・トレーニングなど）⑥就労中の支援　⑦生活支援事業（日常生活習慣など）⑧地域とのネットワーク事業（他団体との連携など）⑨家族支援（家族会など）⑩その他の支援（　　）

5.あなたの居場所に所属するスタッフ構成について、該当するところに〇をつけ、その人数を記してください。

①専任スタッフ（　　名）②嘱託スタッフ（　　名）③非常勤スタッフ（　　名）
④ボランティアスタッフ（　　名）⑤その他のスタッフ（　　名）

6.上記 5 で回答した有無資格者のうち、あてはまるものについて、それぞれ該当するところにその人数をお答えください。

①医師（　　名）②看護師保健師（　　名）③精神保健福祉士（　　名）
④社会福祉士（　　名）⑤保育士（　　名）⑥作業療法士（　　名）
⑦臨床心理士などの心理士（　　名）⑧キャリア・カウンセラー（　　名）
⑨その他の有資格者（具体的に　）（　　名）
⑩無資格者（　　名）⑪ピアサポーター（　　名）⑫ピア・スタッフはいない

7.あなたの居場所の参加者の参加の頻度について、該当するところに〇をつけてください。

①月1回　②月2･3回　③週1回　④週2回　⑤週3回　⑥週4回以上⑦それ以外(　　)

8.あなたの居場所で現在抱えている諸課題について、該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。また、とくに今後検討するべき課題となるものには◎をつけてください。

①人材養成確保　②施設の整備拡充　③財政的基盤の安定　④支援者の質や力量　⑤居場所支援プログラムの検討　⑥就労手前支援のための職場開拓　⑦幅広い社会参加方法の検討　⑧家族の接し方や意識改革⑨地域社会への理解啓発　⑩親亡き後の支援のあり方

⑪その他の課題（　　）

9.居場所への参加要件について、参加できる人に該当するところに〇をつけてください。

①ひきこもりなど当事者・経験者のみ参加可能　②当事者経験者と家族も参加可能

③当事者・経験者と家族さらに支援者も参加可能　④参加したい人であればどなたでも可能

⑤その他（　　）

10.居場所に参加できるひきこもり当事者・経験者の年齢条件について、該当するところに〇をつけてください。また年齢に上限がある場合はその年齢を記載してください。

①年齢制限はある（概ね　　歳以下・以上）②年齢制限は全くない

③その他（　　）

11.女性の居場所について教えてください。居場所支援をすすめるにあたり、あなた様の団体で該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①女性だけの居場所を設置している　②女性に配慮した運営を心掛けている　③女性の支援者を配置して対応している　④とくに性別に問わられずに行なっている

⑤その他（　　）

12.居場所にはさまざまな人たちが集まるがゆえに、他の参加者や支援者との相性課題や対人トラブルなどが起こる懸念が指摘されています。居場所に参加するにあたって最低限のルール化が必要という声もありますが、あなた様の団体が行なう居場所ではそうしたルールを設けていますか。該当するところに〇をつけてください。

①一定のルールを設けている（設問 13 へ）　②まったくルールは設けていない

③その他（　　）

13.上記 12 で①一定のルール化を設けていると回答した団体にお聞きします。そのルール内容に該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①守秘義務　②相手の発言を決して否定しない　③宗教等自分の価値観を押し付けない

④陰口悪口は言わない　⑤説教や教育指導はしない　⑥インターネット上には個人が特定できる批判等を書き込まない　⑦自分がされて嫌なことは相手にはしない　⑧その他（　　）

14.あなた様の団体が行なう居場所支援で運営上大切にされているものは何ですか。また初めて居場所に参加するひきこもり当事者・経験者もいますが、そのために心掛けていることは何ですか。それぞれお答えください（自由記述）。・運営上大切にしていること（　　）

・初参加者に心掛けていること（　　）

15.現時点の居場所における、ひきこもりなど当事者・経験者の参加年数について、該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①1 年未満（　　）名　②3 年未満（　　）名　③7 年未満（　　）名　④10 年未満（　　）名
⑤10 年以上（　　）名（Q16 へ進む）

16. 10 年以上と回答した団体にお聞きします。長期にわたり利用している理由について該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①本人の希望　②疾病・障碍　③支援者の判断　④家庭の事情（具体的に ）
（　　）　⑤他に利用できる適切なサービスが地域にはない　⑥その他（　　）

17.また、上記 15 で 10 年以上と回答した団体にお聞きします。長期化していることに対する何らかの対応について、該当するところに〇をつけてください。

①対応している（Q.18 へ進む）　②対応していない（Q.19 へ進む）　③検討中である
④その他（　　）

18.上記 16 で<u>①対応している</u>と回答した団体にお聞きします。具体的にどのような対応をしていますか。お答えください（自由記述）。

19. 上記 16 で<u>②対応していない</u>と回答した団体にお聞きします。なぜ対応しないのか、その理由をお答えください（自由記述）。

20. あなたの団体が行なう居場所にひきこもりなどの当事者・経験者が複数回参加したのち、突然参加しなくなる人がいた場合の対応について、該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①とくに何もしない　②様子を見て電話や手紙・電子メールで連絡をとるようにする
③会報など情報誌だけは送るようにする　④家族とは連絡をとるようにする
⑤その他（　　）

21.上記 19.で①とくに何もしないと回答した団体にお聞きします。その理由についてお答えください（自由記述）。

22.居場所は現在どの制度においても位置づけられていない自由な集まりでありますが、居場所の運営にあたっては、どこに力点を置いて運営されているか。該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①言いっ放し聞きっ放しなど雑談方式　②集団で遊び学べるメニュー方式　③参加者によってその都度毎回内容を決める自由方式　④屋外活動を取り入れた多様な行動方式　⑤事前にテーマなどを設定して行なうプログラム方式　⑥その他の方式（　　）

23.これからの家族会が主催する社会的自立をめざす居場所支援に求められるものとして、該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。

①当事者の就労準備のための居場所づくり　②当事者の雇用創出のための地域の特産物の発掘・生産のための居場所づくり　③当事者自らが発案し参画する取り組み　④当事者の芸術的センスを伸ばす取り組み　⑤心身共に健康となる持続可能な取り組み

⑥その他（　　）

24.これからの居場所支援における支援者としての役割、立ち位置について、該当するところに〇をつけてください（複数回答可）。また、とくに重視されるものには◎をつけてください。

①当事者を主体ととらえる　②常に内省する態度をもつ　③協同する関係性　④アドボカシー（代弁者・権利擁護者）⑤社会・家庭環境調整者　⑥ソーシャル・アクション（社会資源開発）　⑦社会的支援ネットワーク　⑧社会への理解啓発　⑨新しい価値の創造

⑩その他（　　）

25.あなたの団体が行なう居場所における当面の運営・活動上の課題について、率直にお答えください（自由記述）。

26.本調査は国庫の助成金を得て実施しています。これら調査結果はそのまま国にも報告されることから、その他、居場所支援に関してご意見ご要望等があればご自由にお書きください（自由記述）。

ご協力ありがとうございました。

※このアンケートは、特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワークによる平成26年度のWAM事業「北海道ひきこもり居場所支援に関する実態調査」を参考に作成しております。

特定非営利活動法人　KHJ全国ひきこもり家族会連合会

―― 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業　―

ひきこもり当事者の社会的自立に向けた居場所づくり

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業報告書

平成 27 年 3 月 発行

問い合わせ先

特定非営利活動法人　KHJ 全国ひきこもり家族会連合会

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨３－４－４
電話：03-5944-5250　FAX：03-5944-5290
メール：info@khj-h.com
ホームページ：http://www.khj-h.com